

一般国道 10 号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第 3 集

団後遺跡
西一町田遺跡
炭山遺跡

福岡県豊前市所在遺跡の調査

1994

福岡県教育委員会

団後遺跡
西一町田遺跡
炭山遺跡

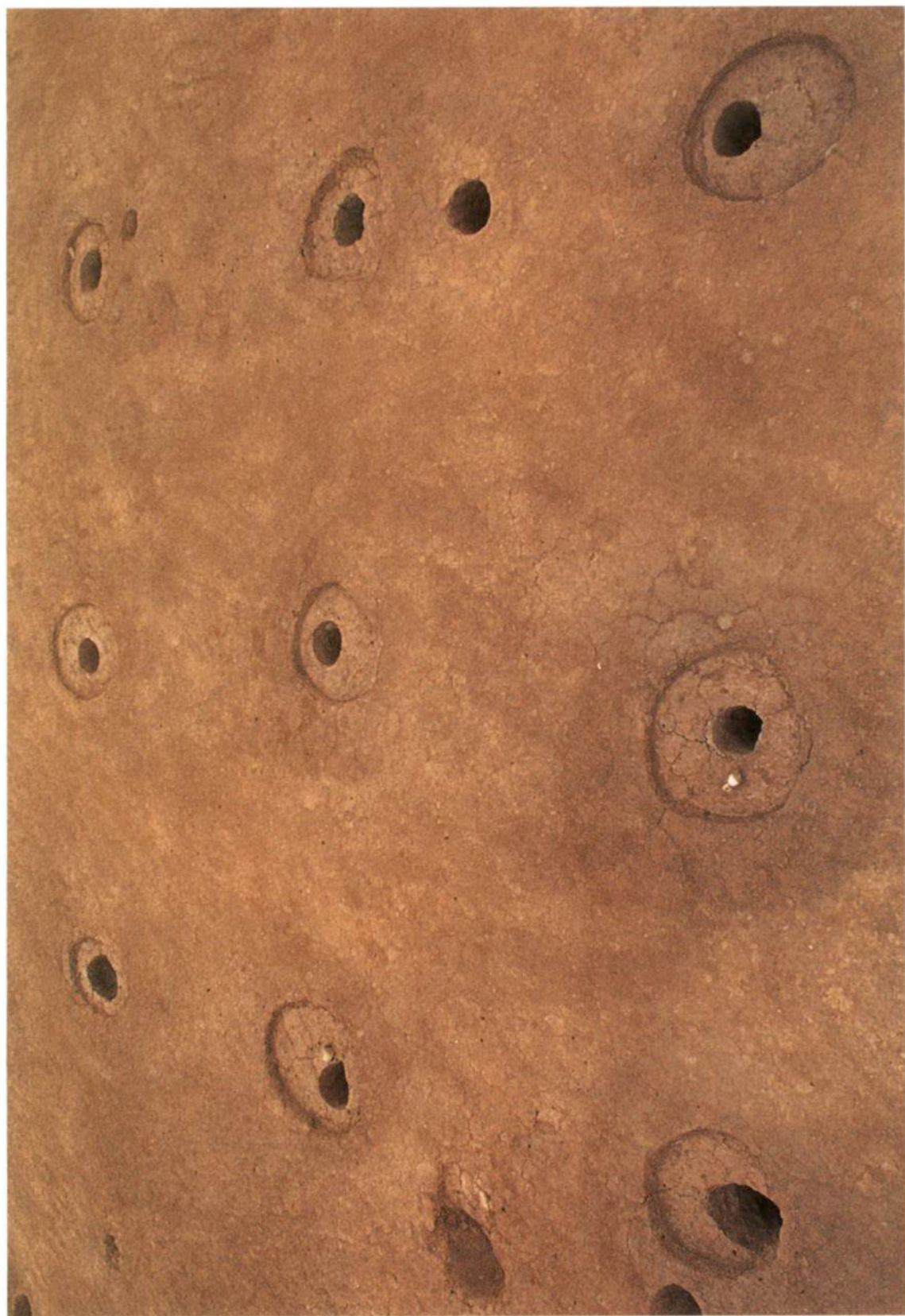
福岡県豊前市所在遺跡の調査



団後遺跡 (第1次) 全景



堅穴住居跡群近景（西から）2・3号住居跡中心に



団後遺跡（第二次）1号掘立柱建物遺構全景（南から）

序

福岡県教育委員会は、建設省の委託を受けて、一般国道10号線椎田道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和62年以降実施して来ました。そして、平成2年までに全体の発掘調査が終了し、平成3年には完全一般供用が行われています。

本書は、昭和63年度及び平成元年度に調査を実施した、豊前市に所在する団後遺跡、西一町田遺跡、炭山遺跡の調査結果を「国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告」第3集として取りまとめたものです。

発掘調査の報告として、満足いくものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する正しい認識と理解、文化財愛護思想の普及、さらには生涯学習時代を迎えての地域史研究の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々の御協力をいただいた建設省北九州国道工事事務所、豊前市教育委員会をはじめ地元関係各位に対して、心から感謝申し上げます。

平成6年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

- 1 本書は、一般国道10号線椎田道路建設のために破壊される埋蔵文化財を発掘調査した、福岡県豊前市及び築上郡椎田町所在の遺跡群の報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和63年度と平成元年度に福岡県教育委員会が建設省から委託されて実施した。
- 3 本書の執筆分担は次のとおりである。
 - 第1章 緒方泉
 - 第2章 副島邦弘、緒方泉
 - 第3章 副島邦弘
 - 第4章 飛野博文
 - 第5章 飛野博文
- 4 遺構の実測図は副島、飛野、緒方の各調査担当者と犬塚カヲル、田原フジ子、荒巻朋子の各氏が、遺物の整理、図面の作成には、担当者の他に岩瀬正信、豊福弥生、原カヨ子、福島衣具子、森山シズ子、鬼木つや子、若松三枝子、平田春美、関久江、棚町陽子、岡由美子、久富美智子、田中典子、坂田順子、藤原さとみ、土山真弓美、堀江圭子、岩熊真実の各氏が従事した。
- 5 掲載写真のうち、遺構は副島、飛野、緒方が撮影したが、遺物は九州歴史資料館学芸第一課石丸洋参事補佐と北岡伸一、中島久美子の各氏があたった。
- 6 本書の編集は各執筆分担者が行い、その取りまとめを副島の指導のもと緒方が担当した。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査経過と関係組織	1
1.	昭和63年度、平成元年度の調査経過	1
2.	平成5年度の報告書作成の経過と関係組織	4
第2節	遺跡の位置の環境	6
1.	遺跡の位置	6
2.	周辺の遺跡	6
第2章	団後遺跡の調査	9
第1節	はじめに	9
第2節	第1次調査の遺構と遺物	10
1.	竪穴住居	10
2.	掘立柱建物	15
3.	土塼	17
4.	溝	25
5.	その他	26
6.	小結	29
第3節	第2次調査の遺構と遺物	31
1.	発掘調査の概要	31
2.	生活遺構と遺物	31
3.	小結	54
第3章	団後遺跡の総括	55
第4章	西一町田遺跡の調査	57
第1節	はじめに	57
第2節	遺構と遺物	57
1.	遺構	57

2. 遺物	63
第3節 おわりに	64
第5章 炭山遺跡の調査	65
第1節 はじめに	65
第2節 遺構と遺物	65
1. 遺構	65
2. 遺物	70
第3節 おわりに	71

西一町田遺跡

- 図版28 1) 調査後全景 (北西から)
2) 調査後全景 (南東から)
- 図版29 1) 集石遺構 SX 1 ~SX 6 (西から)
2) 祠状遺構 (東から)
- 図版30 1) 集石遺構 SX 4 ~SX 6 (南西から)
2) 集石遺構 SX 4 ~SX 6 (南西から)
- 図版31 1) 集石遺構 SX 6 (南東から)
2) 集石遺構 SX 6 遺物出土状態
- 図版32 1) 集石遺構 SX 7 (南東から)
2) 土壙 SK 3 (南東から)

炭山遺跡

- 図版33 1) 石組遺構現況全景 (南東から)
2) 石組遺構現況全景 (北東から)
- 図版34 1) 石組遺構現況全景 (南東から)
2) 石組遺構清掃後全景 (南東から)
- 図版35 1) 石組遺構基壇状部分 (南東から)
2) 石組遺構調査後全景 (南東から)
- 図版36 1) 溝状遺構土層 (北東から)
2) 2号土塁状遺構と溝状遺構 (東から)
- 図版37 1) 5号土塁状遺構 (西から)
2) 溝状遺構 (南東から)

挿図目次

第1図	団後遺跡周辺地形図 (1/5,000)	3
第2図	団後遺跡、西一丁田遺跡、炭山遺跡と周辺の遺跡分布図	7

団後遺跡第1次

第3図	1号・2号竪穴住居実測図 (1/80)	折込10~11
第4図	1号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)	11
第5図	2号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)	13
第6図	3号竪穴住居実測図 (1/60)	14
第7図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	16
第8図	1号土壙実測図 (1/60)	17
第9図	1号土壙・2号溝状遺構出土遺物実測図 (1/4)	18
第10図	2号土壙実測図 (1/60)	20
第11図	3号竪穴住居・2号土壙出土遺物実測図 (1/4)	21
第12図	3号土壙実測図 (1/60)	22
第13図	3号土壙出土遺物実測図 (1/4)	23
第14図	各遺構出土土製品及び土器実測図 (1/4)	27
第15図	3号土壙出土遺物実測図 (1/4)	28

団後遺跡第2次

第16図	団後遺跡第2次調査遺構配置図 (1/200)	折込30~31
第17図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	32
第18図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/2)	32
第19図	2・3・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	32
第20図	2・3号竪穴住居跡出土遺物実測図① (1/2)	34
第21図	3号竪穴住居跡出土遺物実測図② (1/1)	35
第22図	3号竪穴住居跡出土遺物実測図③ (1/2、1/4)	36
第23図	3号竪穴住居跡出土遺物実測図④ (1/3)	37
第24図	4号竪穴住居跡出土遺物実測図① (1/2)	39
第25図	4号竪穴住居跡出土遺物 (石器) 実測図	39
第26図	5・6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	40

図版目次

- 口絵カラー 1 団後遺跡（第一次）全景
〳 2 団後遺跡（第二次）竪穴住居跡群近景（西から）
〳 3 団後遺跡（第二次）1号掘立柱建物遺構全景（南から）

団後遺跡第1次

- 図版 1 1) 団後遺跡全景（東から）
2) 団後遺跡全景（南から）
図版 2 1) 1区全景（東から）
2) 2区全景（南から）
図版 3 1) 3区全景（真上から）
2) 4、5区全景（真上から）
図版 4 1) 1号竪穴住居全景（真上から）
2) 1号竪穴住居全景（東から）
図版 5 1) 1号竪穴住居全景（南から）
2) 1号竪穴住居と作業員のみなさん（南から）
図版 6 1) 2号竪穴住居全景（南から）
2) 3号竪穴住居発掘作業風景（西から）
図版 7 1) 3号竪穴住居全景（南から、完掘後）
2) 3号竪穴住居全景（南から、完掘後）
図版 8 1) 1号土壙全景（南から）
2) 1号土壙遺物出土状況（南から）
図版 9 1) 2号土壙全景（南から）
2) 気球写真撮影準備風景
図版10 1) 3号土壙全景（南から）
2) 3号土壙近景（西から）
図版11 1) 1号掘立柱建物全景（東から）
2) 1号及び2号溝状遺構（東から）
図版12 団後遺跡出土土器①
図版13 団後遺跡出土土器②
図版14 団後遺跡出土土器③

図版15 団後遺跡出土土器④

図版16 団後遺跡出土土器⑤

団後遺跡第2次

図版17 1) 発掘区全景 (南西から)

2) 発掘区全景 (南から)

図版18 遺構全景 (東から)

図版19 1) 住居跡群全景

2) 1号住居跡 (西から)

図版20 2号住居跡 (西から)

図版21 1) 2、3号住居跡全景

2) 遺物出土状況

3) 2号住居跡近景

図版22 西側住居跡群全景

図版23 1) 4、5号住居跡全景 (南から)

2) 6号住居跡全景 (東から)

図版24 1) 1号建物遺構全景 (東から)

2) 1号建物遺構近景 (東から)

図版25 1) 2・3号建物遺構全景

2) 土壙・溝状遺構全景

3) 溝状遺構近景

図版26 1) 1号土壙全景

2) 1号土壙畦をはずした状況

3) 1号土壙浮き石をはずした状態

図版27 1) 7号溝状遺構 (排水溝?) (北から)

2) 柱穴75号土壙遺物出土状態 (北から)

3) 2号土壙 (井戸?)

4) 4号土壙 (石を除いた状態)

図版28 出土遺物①

図版29 出土遺物②

図版30 出土遺物③

第27図	5号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/2)	40
第28図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	42
第29図	1～3号掘立柱建物遺構出土遺物実測図 (1/2)	43
第30図	2・3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	44
第31図	1号土壙実測図 (1/40)	45
第32図	1号土壙出土遺物実測図 (1/2)	45
第33図	2号土壙実測図 (1/20)	46
第34図	2号土壙出土遺物実測図 (1/2)	47
第35図	3号土壙実測図 (1/20)	48
第36図	4号土壙実測図 (1/40)	48
第37図	5号土壙実測図 (1/40)	49
第38図	1号溝状遺構出土遺物実測図 (1/2)	50
第39図	柱穴中出土遺物実測図 (1/2)	52
第40図	文化課椎田事務所周辺	53

西一町田遺跡

第41図	遺構配置図 (1/200)	58
第42図	集石遺構 SX 1～3・祠状遺構実測図 (1/40)	59
第43図	集石遺構 SX 4～SX 6 実測図 (1/40)	61
第44図	集石遺構 SX 7 実測図 (1/60)	62
第45図	出土遺物実測図 (1/3)	63

炭山遺跡

第46図	現況測量図 (1/400)	66
第47図	石組遺構実測図 (1/60)	折込66～67
第48図	土塁状遺構土層図 (1/80)	68
第49図	溝状遺構実測図 (1/200)	69
第50図	出土遺物実測図 (1/3)	70
第51図	周辺城跡配置図 (1/100,000)	74

表 目 次

第 1 表	一般国道10号線椎田道路 関係遺跡一覧表.....	2
-------	---------------------------	---

付 図 目 次

付図 1	団後遺跡（第 1 次、第 2 次）周辺地形図（1/3,000）
付図 2	団後遺跡全体遺構配置図（1/300）

第1章

はじめに

第1節 調査経過と関係組織

1. 昭和63年度、平成元年度の調査経過
2. 平成5年度の報告書作成の経過と関係組織

第2節 遺跡の位置の環境

1. 遺跡の位置
2. 周辺の遺跡

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と関係組織

1 昭和63年度、平成元年度の調査の経過

福岡県東部を走る大動脈である一般国道10号線は、近年の北九州都市圏拡大に伴う行橋市から豊前市間での人口増加と共に、交通量が著しく増大により、各所で著しい交通渋滞を引き起こしている。

そこで、建設省は日本道路公団と共に、椎田道路（5.9km、建設省分）及び椎田バイパス（10.3km、日本道路公団分）の建設計画を進めた。

福岡県教育委員会では、昭和62年度から建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所から委託を受けて、一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財の発掘調査を実施した。

本報告書では、昭和63年度及び平成元年度に発掘調査された豊前市域に所在する第5地点（西一町田遺跡）、第7地点（団後遺跡）、第8-B地点（炭山遺跡）の3地点について報告する。

以下、各遺跡ごとに調査経過を述べていく。

団後遺跡（第1次、第2次）の発掘調査

団後遺跡の調査は当初調査予定対象面積が12700㎡であったが、用地買収の進捗状況の関係で、昭和63年度に5000㎡、平成元年度に7700㎡と、計2回に分けて発掘調査を実施することとなった。

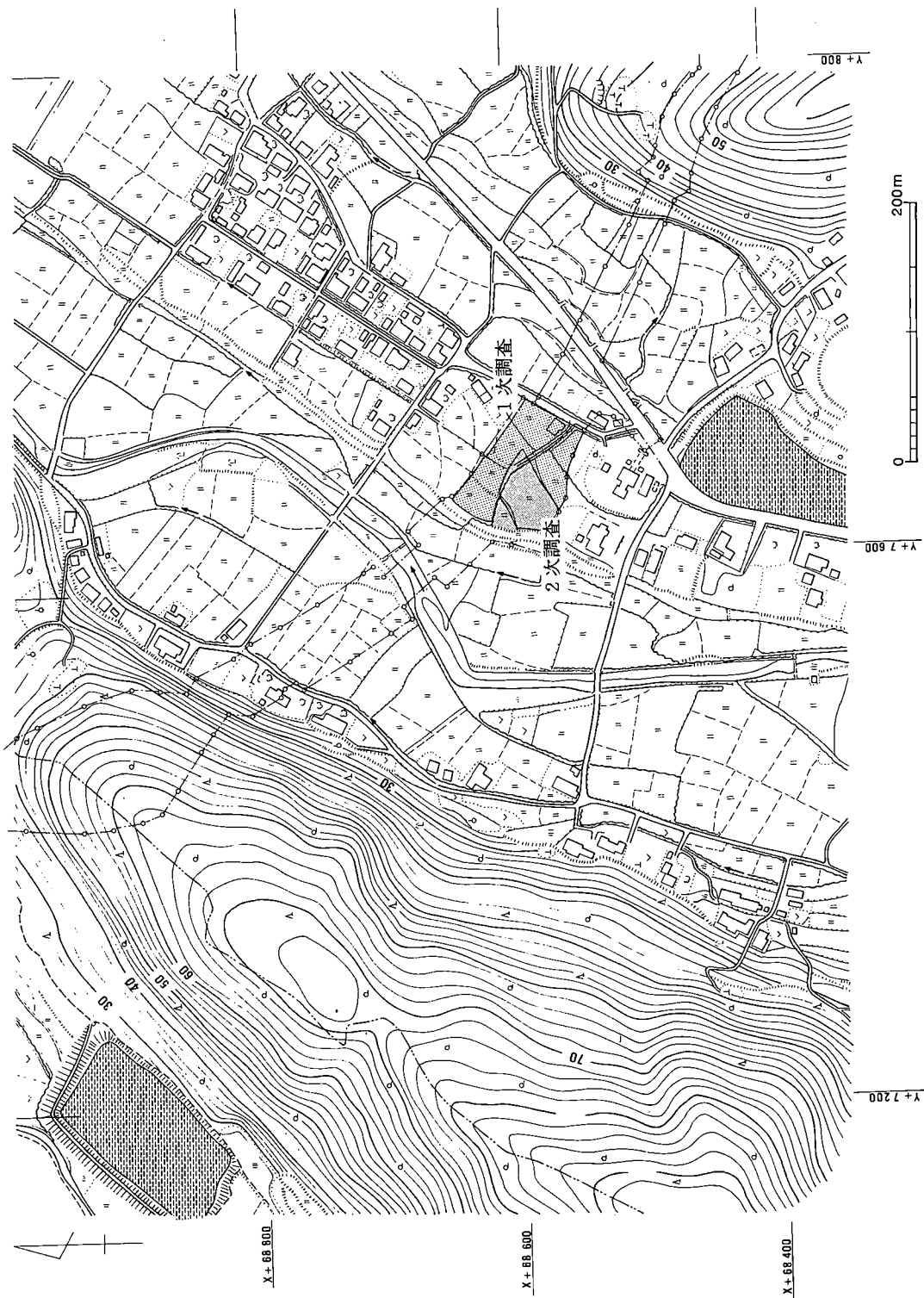
昭和63年度は、第1次調査として4月12日から6月11日の約2ヵ月の調査を実施した。調査は、農道や水路、畦の関係から、南側の1区から北側の5区の5箇所を調査区を設定して、1区から順次調査を進行させた。

その結果、竪穴住居3軒、掘立柱建物1棟、溝2条、土壇3基、ピット等の遺構が1区、2区に集中するように検出された。それらは、出土した土器等から弥生時代後期、終末期、古墳時代後期、鎌倉時代の複合集落であることがわかった。特に、1号竪穴住居では、ベッド状遺構を有する住居のまわりに溝が巡り、葺きおろした屋根により生活空間の拡大がなされるという当時の住宅事情を知る上で貴重な成果を得ることができた。その成果については、新聞記者発表すると共に、近くの角田小学校の6年生が社会科の学習教材として活用した。

また平成元年度は、第2次調査として4月1日から5月31日の約2ヵ月間の調査を実施した。当初、調査予定面積は7700㎡とされていたが、実際に調査された面積は、2700㎡であった。

第1表 一般国道10号線椎田道路 関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内 容	分布面積 (m ²)	調査地区と調査面積				備考	報告書
					62(m ²)	63	平1	平2		
1-A	辻垣畠田・長通遺跡	行橋市辻垣		33,400	6,400				完了	2集
1-B	辻垣ヲサマル遺跡	〃	弥生～中世		27,000				完了	1集
2	居屋敷遺跡	豊津町徳永	古墳・窯跡・横穴	1,050		980			完了	
3	鋤先遺跡	〃	古墳～近世 墓地	5,700				5,700	完了	
4	徳永川の上遺跡	〃	旧石器～中世集落 墓地	11,250		12,500	12,500	12,500	完了	
5	西一町田遺跡	椎田町上の 河内	石組、柱穴、溝	1,000			1,000		完了	3集
6-A		豊前市石丸		3,000		試掘			遺構なし完了	
6-B	中村石丸遺跡	〃	縄文集落	3,500		3,000			完了	
7	団後遺跡	〃団後	弥生～中世集落	12,700	試掘	5,000		7,700	完了	3集
8-A		〃中村		3,000		試掘			遺構なし完了	
8-B	炭山遺跡	〃松江	石組、土塁、溝	6,800			1,800		完了	3集
9-A		〃 〃		14,780		試掘			遺構なし完了	
9-B	黒峰尾10号墳	〃松江	古墳1基	5,000		5,000			完了	
10		〃選仏寺		1,050			試掘		遺構なし完了	
11		〃舟入		600			試掘		遺構なし完了	
12		〃広山		9,000			試掘		遺構なし完了	
			計	95,830	33,600	26,480	15,300	25,900		



第1図 団後遺跡周辺地形図(1/5,000)

その結果、弥生時代後期を中心とした、竪穴住居 6 軒、掘立柱建物 4 棟、土城 5 基、その他柱穴群、溝、ピット等を検出した。

西一町田遺跡の調査経過

西一町田遺跡の調査は、平成元年度の発掘調査として、平成元年10月5日から11月4日の約1ヵ月間実施した。調査面積は1000㎡であった。

その結果、石組遺構、柱穴、溝状遺構を検出した。

炭山遺跡の調査経過

炭山遺跡の調査は、平成元年度の発掘調査として、平成元年11月10日から12月8日の約1ヵ月間実施した。調査面積は1800㎡であった。

その結果、石組遺構、土塁状遺構、溝状遺構を検出した。

なお、発掘調査にあたっては、建設省北九州工事事務所、豊前市教育委員会、福岡県教育庁京築教育事務所から多大な御援助、御協力も得た。さらに、調査作業員として参加していただいた地元関係各位の御協力により事故もなく無事に調査を遂行することができた。ここに記して感謝の意を表したい。

2 平成5年度の報告書作成の経過と関係組織

平成5年度における一般国道10号線椎田道路関係発掘調査報告書は、昨年度の第1集「辻垣ヲサマル遺跡」に続き、

第2集「辻垣畠田・長通遺跡」

第3集「団後遺跡・西一町田遺跡・炭山遺跡」

の計2冊が刊行された。

なお、最後になったが、昭和63年度、平成元年度、平成5年度の発掘調査及び整理作業にあたっての関係者は下記のとおりである。

建設省北九州国道工事事務所	63年	元年	5年
所 長	高橋 松男	高橋 松男	岩田 秀人
副 所 長	石丸 勝己、竹中 幸生	石丸 勝己、九谷 秀明	香月 敏明、中山高虎
工務課長	衛藤 恒郎	衛藤 恒郎	中山 博勝
調査課長	久良木 裕	久良木 裕	山田茂利

福岡県教育委員会

	63年	元年	5年
総括 教育長	竹井 宏	御手洗 康	光安 常喜
教育次長	大鶴 英雄 測上 雄幸	測上 雄幸	樋口 修資
指導第二部長	大平 岩男	月森清三郎	丸林 茂夫
指導第二部副理事			河鍋 好一
指導第二部参事	葉石 勲		
文化課長		六本木聖久	森山 良一
文化課参事		森本 精造	松尾 正俊、柳田 康雄
文化課長補佐	平 聖峯	平 聖峯	清水 圭輔
文化課長技術補佐	宮小路賀宏	宮小路賀宏	
文化課参事補佐	中矢 真人 栗原 和彦 大塚 健 松尾 正俊 柳田 康雄	中矢 真人 大塚 健 松尾 正俊 柳田 康雄 井上 裕弘 石山 勲	井上 裕弘 石山 勲 毛屋 信 石井 秀一 橋口 達也 川述 昭人 木下 修 高橋 章 磯村 幸男 児玉 真一
庶務 文化課管理係長	池原 脩二	池原 脩二	毛屋 信
事務主査	和田 健作	和田 健作	富田 浩一
主任主事	沢田 俊夫	沢田 俊夫	安丸 重喜
調査及び整理			
文化課調査班総括	柳田 康雄(兼)	柳田 康雄(兼)	橋口 達也(兼)
総括補佐	井上 裕弘	井上 裕弘(兼)	
参事補佐			副島 邦弘(現 福岡県立美術館)
技術主査	副島 邦弘	副島 邦弘	
主任技師	緒方 泉	飛野 博文	飛野 博文(現 京築教育事務所) 緒方 泉(現 筑豊教育事務所)

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置 (第2図)

団後遺跡、西一町田遺跡、炭山遺跡の所在するところは、それぞれ団後、炭山遺跡が福岡県豊前市大字中村、西一町田遺跡が豊前市の北隣の築上郡椎田町大字上の河内である。

豊前市及び椎田町は、福岡県東南端に位置し、周防灘に面し、街の中央部にはJR日豊本線、国道10号線が横断している。求菩提山山系から伸びる舌状の丘陵は細長く奥深い谷間をつくり、下流域には肥沃な平野を形成している。

それぞれの遺跡は、団後遺跡が角田川右岸の微高地、西一町田遺跡、炭山遺跡は舌状丘陵の斜面に位置している。

2 周辺の遺跡 (第2図)

団後遺跡、西一町田遺跡、炭山遺跡周辺の遺跡については、平成5年刊行の「豊前市史一考古資料編」に詳しいので参照されたい。



メモを取りながら発掘調査の説明を聞く角田小の児童

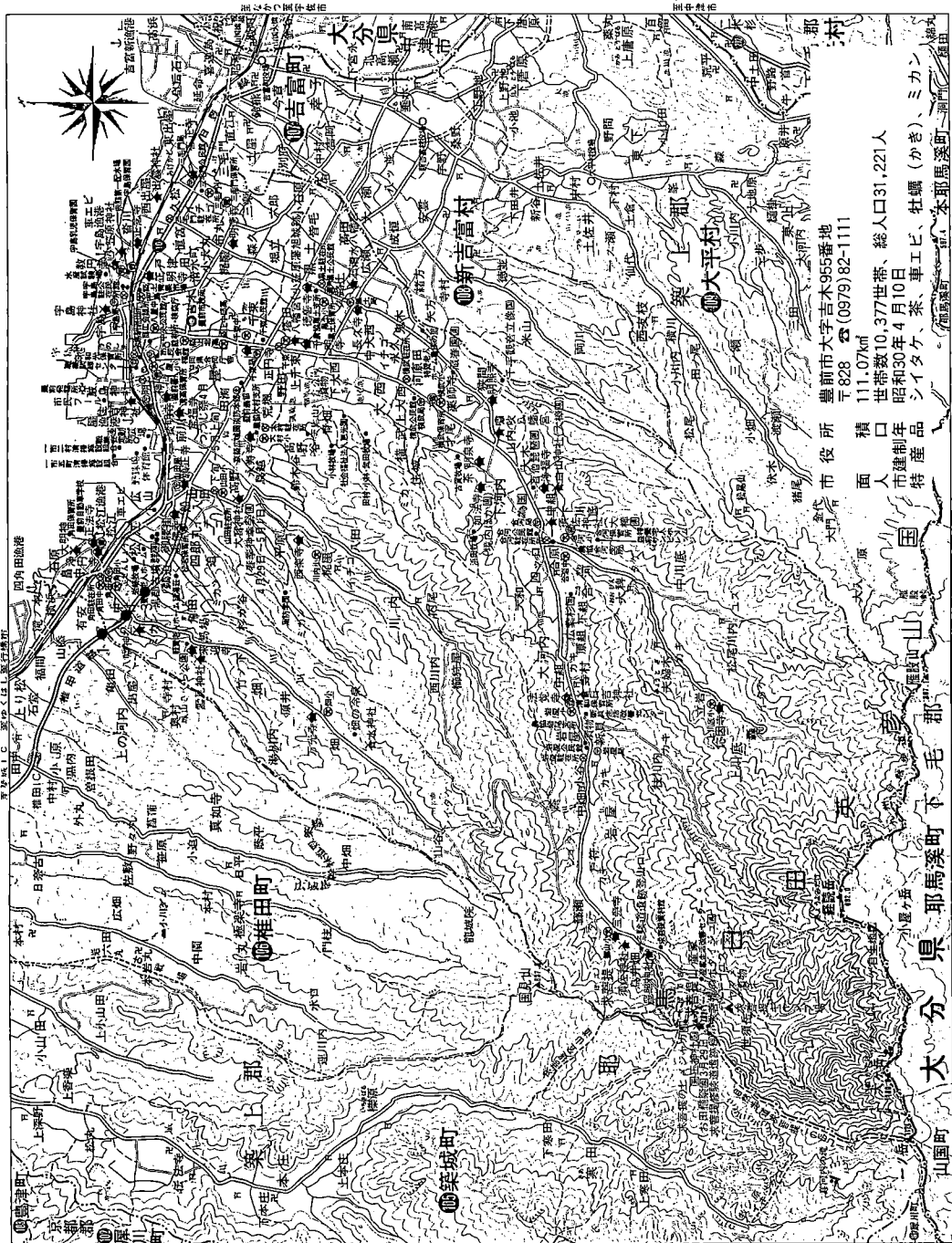
豊前・角田小の6年生44人

豊前市大字中村、角田小(小字)の団後遺跡は、平成5年(西暦1993年)11月18日、団後、西一町田、炭山の遺跡とともに、豊前市教育委員会の調査隊が調査した。調査の結果、団後遺跡は、西一町田遺跡の北西、炭山遺跡の南東に位置している。調査の結果、団後遺跡は、西一町田遺跡の北西、炭山遺跡の南東に位置している。調査の結果、団後遺跡は、西一町田遺跡の北西、炭山遺跡の南東に位置している。

団後遺跡の発掘調査を見学

古代に広がる夢

読売新聞
昭和63年5月12日付



凡例
 1. 西一丁目遺跡
 2. 団後遺跡
 3. 炭山遺跡

豊前市大字吉木955番地
 〒828 ☎(0979)82-1111
 111.07km
 積口 世帯数10,377世帯、総人口31,221人
 昭和30年4月10日
 市制施行
 特産品 シイタケ、茶、草工ビ、牡蠣(かき)、ミカン

第2図 団後遺跡、西一丁目遺跡、炭山遺跡と周辺の遺跡分布図

第2章

団後遺跡（第1次）の調査

第1節 はじめに

第2節 第1次調査の遺構と遺物

1. 竪穴住居
2. 掘立柱建物
3. 土壇
4. 溝
5. その他
6. 小結

第3節 第2次調査の遺構と遺物

1. 発掘調査の概要
2. 生活遺構と遺物
3. 小結

第2章 団後遺跡（第1次）の調査

第1節 はじめに

団後遺跡は、福岡県豊前市大字中村字団後に所在する。

本遺跡は、南北を求菩提山系から伸びる舌状丘陵に挟まれ、その中央を貫流し周防灘に注ぐ角田川右岸に位置している。その対岸には縄文時代後期の大型建物が検出された第6地点（中村石丸遺跡）が所在している。また、隣接して鎌倉時代に創建されたと伝承される角田八幡神社（市指定文化財棟札〈25年・1235年記載〉所蔵）がある。

その他、角田川上流には、宇都宮氏関係の馬場城や名水として知られる「畑冷泉」がある。

この周辺での発掘調査は、当遺跡の発掘調査と前後2回、計3回の発掘調査がなされている。第1回目は昭和62年7月13日～15日にかけて、一般国道10号線椎田バイパス建設予定地内にあった中村公民館の北側路線外移転に伴ない豊前市教育委員会により、また第2回目は当遺跡で、昭和63年4月12日～6月11日にかけて、さらに第3回目は平成元年4月1日～5月31日にかけて、共に福岡県教育委員会により、一般国道10号線椎田バイパス関係工事路線内の発掘調査として実施された。

第2回、第3回の発掘調査は、昭和63年度に建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所から委託を受けて、福岡県教育委員会が実施したものである。当初、調査予定面積全体が12,700㎡の第7地点とされていたが、発掘調査開始時に一部未買収地があったため、発掘調査面積を5,000㎡として、残りを次年度以降の事業として作業を開始することとした。従って、第2回目を1次調査、第3回目を2次調査とするものである。

1次調査は畦や水路、農道の関係から、調査区を細かく1区～5区に分けて、まず南側の1区から始め、北側の5区に向けて調査を進捗させていった。

調査地点は、角田川右岸に位置し、従来、水田及び畑（標高27m）として耕作され、西方の角田川に向けて段々に低くなっていく（標高21m）。

調査の結果、各区を通じて1次調査で検出された遺構は、竪穴住居3軒、掘立柱建物1棟、溝2条、土壇1基、ピットなどがあり、それぞれは1区、2区に集中するように分布している。それらは、出土した土器等から弥生時代後期、終末期、古墳時代後期、鎌倉時代の複合集落であることがわかった。なお、2次調査では、残り部分7,700㎡を調査対象としたが、実際には2,700㎡を調査した。その結果、弥生時代後期の竪穴住居6軒、土壇5基、掘立柱建物4棟、その他柱穴群及び溝、ピット等が検出されている。

第2節 遺構と遺物

1. 竪穴住居

竪穴住居は、2区で3軒検出されたのみである。それぞれ時期を異にしている。

1号竪穴住居（図版2-2・4・5・12-2、第3図）

1号竪穴住居は2区北側中央端に位置していて、北側に開くU字形の溝を有する。またその一部は北側調査区域外に伸びている。

この住居は、略方形プランで、ベッド状遺構、屋内土壌、屋内溝等を有する。

その大きさは、南北長5.3m、東西長5.95m、壁体高10～15cmを測る。柱穴は主柱穴が住居内に4本、その他補助柱が住居外に各辺2本、四隅に1本を配するようである。主柱穴はP1、P2、P3、P4の4本で、その直径はP1が20cm、P2が25cm、P3が20cm、P4が30cm、深さはP1が46cm、P2が43cm、P3が30cm、P4が55cmを測る。各柱間距離はP1-P2間2.7m、P2-P3間3.4m、P3-P4間2.5m、P4-P1間3.1mを測る。

炉跡は中央部にあり、径65cm、深さ15cmを測る。

屋内土壌は南側壁体中央にあり、長軸1m、短軸70cm、深さ25cmを測る。また、両長軸端からベッド状遺構に沿いながら、北側壁体に向け伸びる屋内溝幅10～30cm、深さ6～11cmを測る。

さらにベッド状遺構は東西壁体に沿って設置される。東側は壁体全体に設置され、幅90～110cm、高さ7～12cmを測る。西側は南側に片寄って設置され、長さ2.85m、幅95cm、高さ5～11cmを測る。

主軸はN-30°-Wをとる。

出土遺物

土器（図版12、第4図）

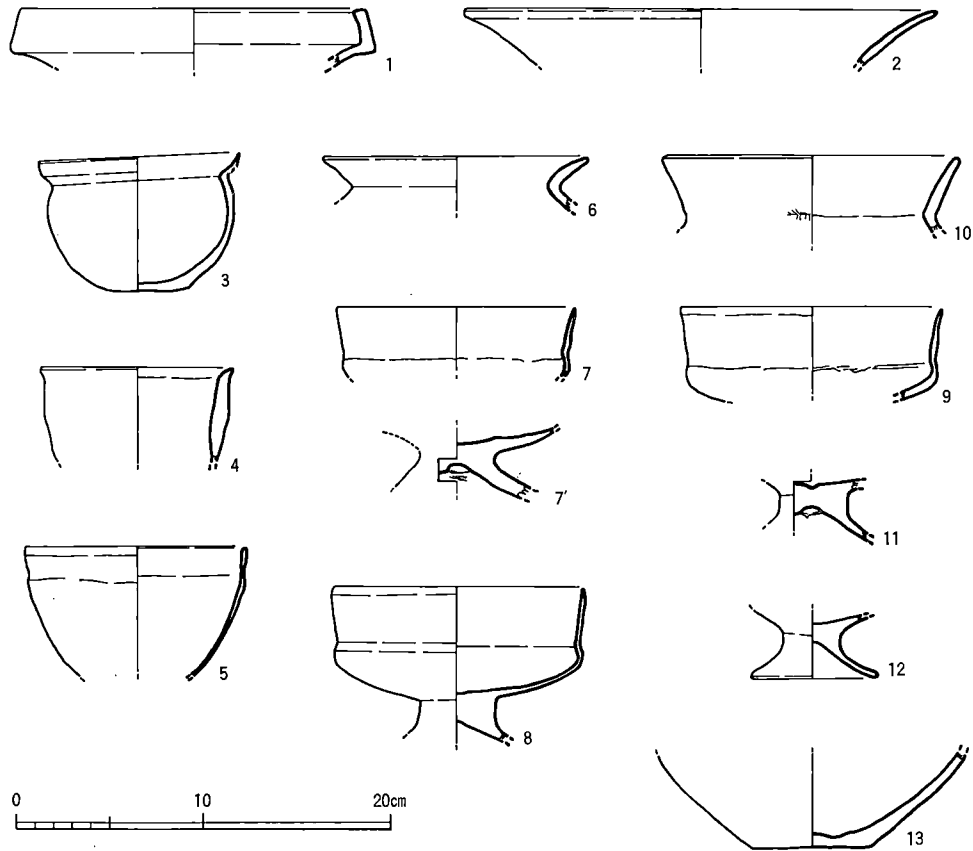
1 複合口縁部片である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンを含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径18.5cmを測る。

2 朝顔型に大きく開く口縁部片である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は細粗砂粒が混在する。色調は橙褐色を呈する。復元口径25.4cmを測る。

3 「く」の字に強く外反する口縁部をもつ小型甕である。口縁部は「く」の字に屈曲した後、さらに端部に向けて上方に立ち上がる。底部はやや丸みを帯びる。調整は不明である。また焼



第3图 1号·2号竖穴住居实测图 (1/80)



第4図 1号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)

成は良好である。胎土は緻密で、マンガン、金雲母を含む。色調は外面黄褐色、内面黄白色を呈する。復元口径10.8cm、器高7.5cmを測る。

6 「く」の字に屈曲する口縁部片である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒で、マンガンを含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径14.2cmを測る。

7 脚付き小型壺である。杯部と脚部は直接接合できないが、胎土や焼成などが同じであることから一つの個体とみなした。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、金雲母を含む。色調は橙褐色を呈する。

8 脚付き小型壺である。脚裾部を欠失している。形態は瀬戸内系のものであるが、胎土など

は在地系である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は白橙褐色を呈する。復元口径は13.5cmを測る。

10 脚付き小型壺である。脚部を欠失している。形態は瀬戸内系のものであるが、胎土などは在地系である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。復元口径は14cmを測る。

11 脚付き小型壺の脚柱部である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄土色を呈する。

12 脚部片である。脚部は裾部へ向け、短く「ハ」の字に開く。端部は丸くおさめる。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが混じる。復元脚裾径6.3cmを測る。

13 平底の底部片である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は細粗砂粒を混在し、マンガンを含む。色調は外面橙褐色、内面黄灰色を呈する。底径6.4cmを測る。

土製品 (第14図)

土製品5は土玉である。土玉は長さ1.7cm、幅2.2cm、重さ10gを測る。中央部に穿孔がみられる。

1号堅穴住居周溝 (図版2-2・4・5・12、第3図)

周溝は2次調査と照合すると、1号堅穴住居を最大径幅約8mのU字形に巡っていて、厳密には周溝と言う呼称は適当ではない。北側では段落ちになっているため、ほぼ南側(25.549m)から北側(25.282m)に向けての排水用の溝と考えた方が適応と思われる。幅20~45cm、深さ15~40cm程を測る。

出土遺物

土器 (図版12、第4図)

4 鉢状のものである。器壁は肥厚で、口縁端部は外方につまみ上げられる。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石を含む。色調は橙色を呈する。復元口径10.4cmを測る。

5 鉢状のものである。底部は欠失している。口縁部やや下方では強めのヨコナデのため、壁面が薄くなり、その部分からやや屈曲して立ち上がる。調整は、口縁部ヨコナデ、その他不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、角閃石を含む。色調は橙色を呈する。復元口径12cmを測る。

9 「く」の字に明瞭に屈曲する口縁部片である。調整は不明である。また焼成は良好である。

胎土は緻密である。色調は橙色を呈する。復元口径16cmを測る。

2号竪穴住居 (図版6-1、第3図)

2号竪穴住居は2区の北西側に位置し、ほぼ中央を1号周溝に切られている。この住居は北東隅角と北西隅角にベッド状遺構を有するものであるが、上面がほとんど削平されているために10cm程しか残存していない。北西部分は削平が著しく、プランの確認ができなかった。その大きさは長軸5.2m、短軸4mを測る。支柱穴は不明である。

出土遺物

土器 (第5図)

14 「く」の字に短く外反する口縁部片である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄土色を呈する。

15 「く」の字に短く外反する口縁部片である。内面「く」の字に明瞭に屈曲する。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。

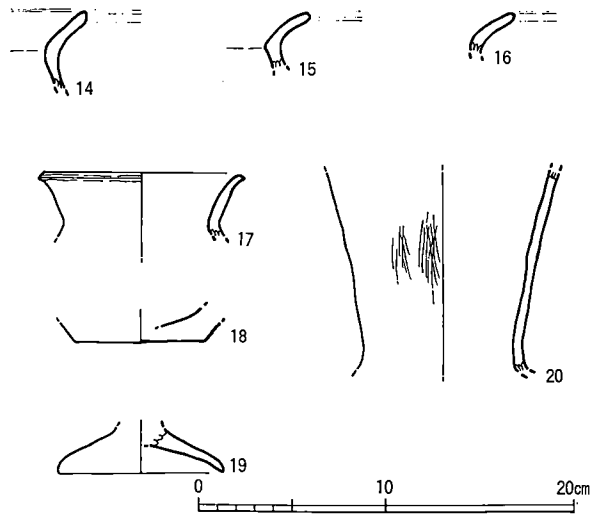
16 「く」の字に短く外反する口縁部片である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄褐色を呈する。

17 「く」の字に外反する口縁部片である。端部は面をもち、やや垂下する。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙色を呈する。復元口径11cmを測る。

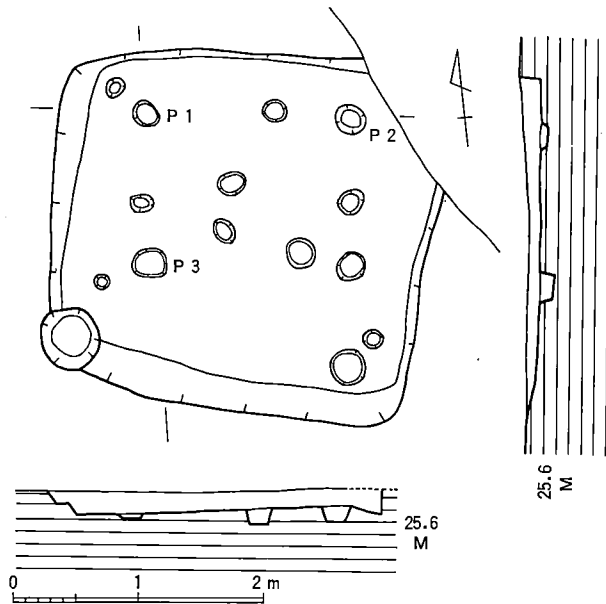
18 平底の底部片である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、角閃石を含む。色調は黄褐色を呈する。復元底径7cmを測る。

19 脚部片である。やや内弯気味に「ハ」の字にひらく。端部は丸くおさめる。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙色を呈する。復元底径9cmを測る。

20 長頸壺の頸部片である。頸部は直線的に外反する。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙色を呈する。



第5図 2号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)



第6図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

3号竪穴住居 (図版6-2、7、第6図)

3号竪穴住居は、2区北東隅角付近に位置している。発掘調査時点では不整形な形状をした土壇4と呼称していた。しかし、調査を進めていくに従って、形状が略正方形で、底面に焼土部分を伴うカマド状の広がりを検出したため、3号竪穴住居と変更した。東南隅角は調査区域外にでているが、その大きさは南西側2.6m、南東側2.75m、深さ0.2mの略正方形を呈している。支柱穴は把握しがたいが、南東壁体にほぼ平行になるP1、P2、P3を確認した。P1-2間1.2m、P1-P3間1.65mを測る。

出土遺物

土器 (図版13、第11図)

44 杯身である。身受けは短くやや斜め上方に伸びる。底部は平坦である。調整は底部回転ヘラ削り、その他ヨコナデである。また、焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は灰色を呈する。口径9.2cm、器高3.2cmを測る。

45 高杯脚部である。「ハ」の字に開いた脚部は、端部で面を作り、下方に拡張する。調整は

ナデで、内面にタテ方向に絞り痕がある。また焼成は堅固である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は灰色である。底径は9.1cmを測る。

46 高杯である。杯部は椀状をなす。脚部は「ハ」の字に開き、端部で面を作り、下方に拡張する。調整はナデで、脚部内面に絞り痕がある。また焼成は堅固である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は灰色である。復元口径12.4cm、底径8.8cm、器高9cmを測る。

47 杯蓋である。天井部は丸く、口縁端は丸くおさまる。天井頂上部が欠失している。調整はヨコナデである。また焼成は堅固である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は暗灰色を呈する。口径9.7cmを測る。

48 「く」の字に短く外反する鉢の口縁部片である。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ、内面ナデである。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。復元口径17cmを測る。

49 鉢状のものである。口縁部片のみ残存する。口縁部は「く」の字に短く外反する。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデである。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は茶褐色を呈する。復元口径22.6cmを測る。

50 口縁部片である。頸部と肩部の境からやや内弯気味に外反して、口縁部に達する。調整はヨコナデである。また焼成は堅固である。胎土は緻密でマンガンを含む。色調は灰色を呈する。復元口径15cmを測る。

51 皿である。調整は不明である。また焼成は軟質である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は外面灰色、内面灰黄色を呈する。復元口径28cm、器高3.7cmを測る。

52 胴部片である。胴部最大径はやや上半にある。調整は上半がヨコナデ、下半がヘラで削りである。また焼成は堅固である。胎土は緻密でマンガンを含む。色調は灰色を呈する。胴最大径18.8cmを測る。

土製品 (第14図)

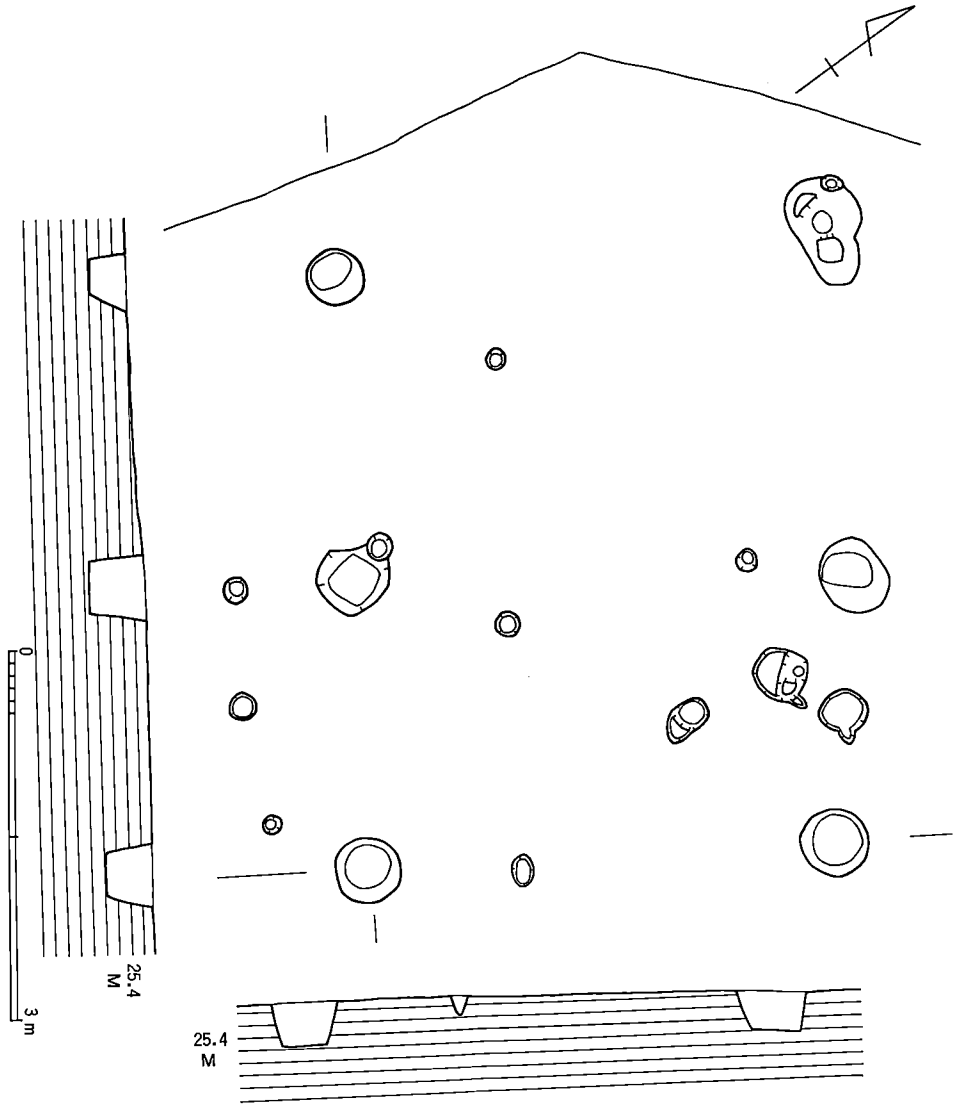
土製品 3 は土玉である。形状は三角形おむすび状で、色調は茶褐色を呈する。幅2.6cm、高さ2.2cm、重さ5gを測る。穿孔はみられない。

2. 掘立柱建物

調査区からは2区で1軒の掘立柱建物を検出したのみであった。

1号掘立柱建物 (図版11-1、第7図)

1号掘立柱建物は、2区北西側、2号竖穴住居西側に位置している。この建物は1間×2間



第7図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

の長方形のもので、その大きさは桁行4.9m、梁行3.9mを測る。
柱数は6本で、掘り方の直径45～60cm、深さ28～50cmを測る。
出土遺物はなかった。

3. 土 壙

調査区からは、1区、2区及び5区で土壙3基を検出した。

1区土壙1 (図版8、第8図)

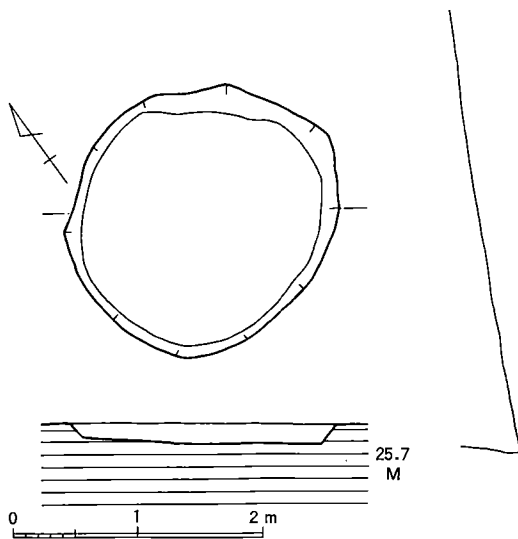
土壙1は1区の溝1と溝2の間に位置している。直径2m、深さ15cm程を測る。拳大～人頭大状の礫石が無造作に投げ込まれる。

出土遺物

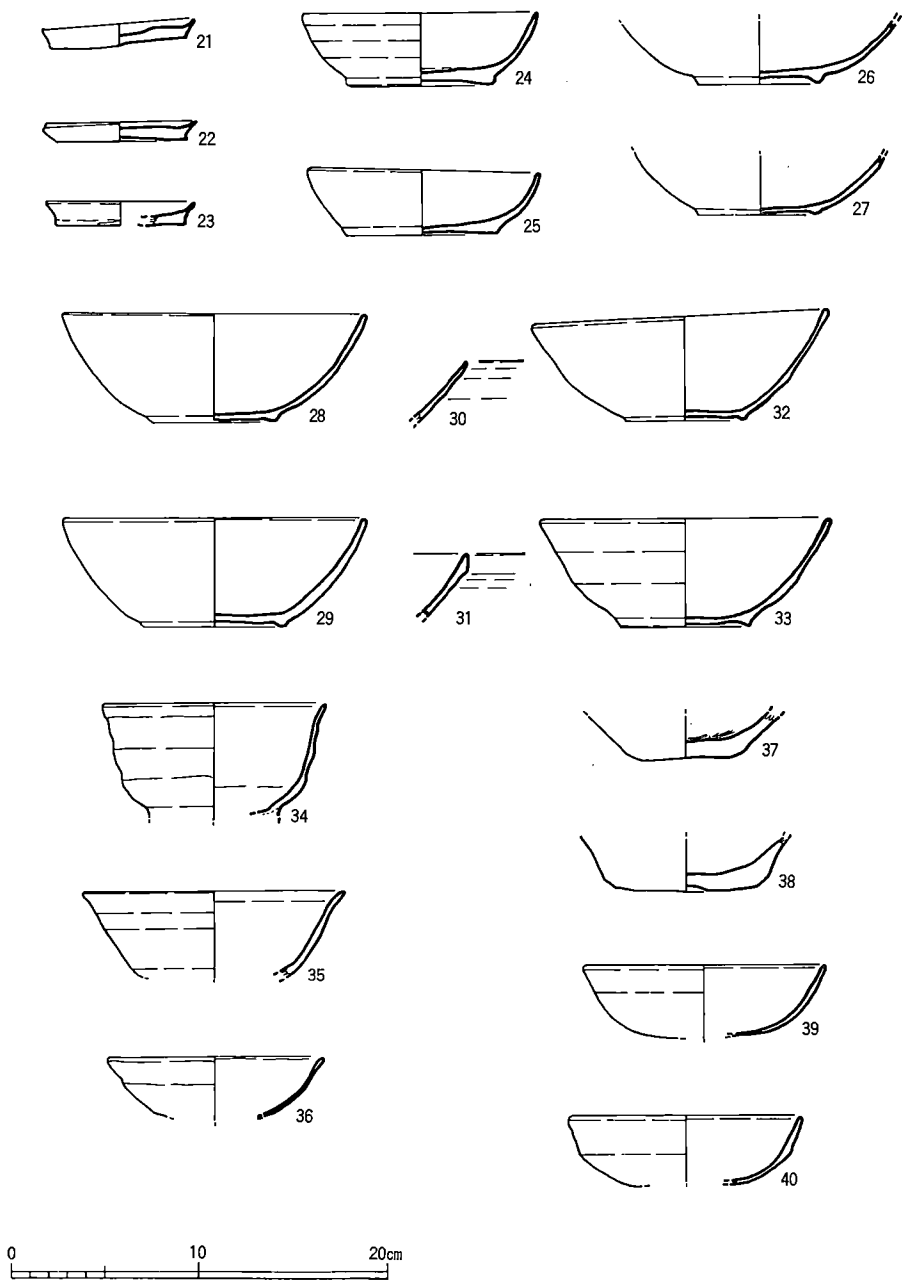
土 器 (図版14、第9図)

21 皿である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。復元口径8.2cm、器高1.4cmを測る。

22 皿である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。復元口径8.2cm、器高1.1cmを測る。



第8図 1号土壙実測図 (1/60)

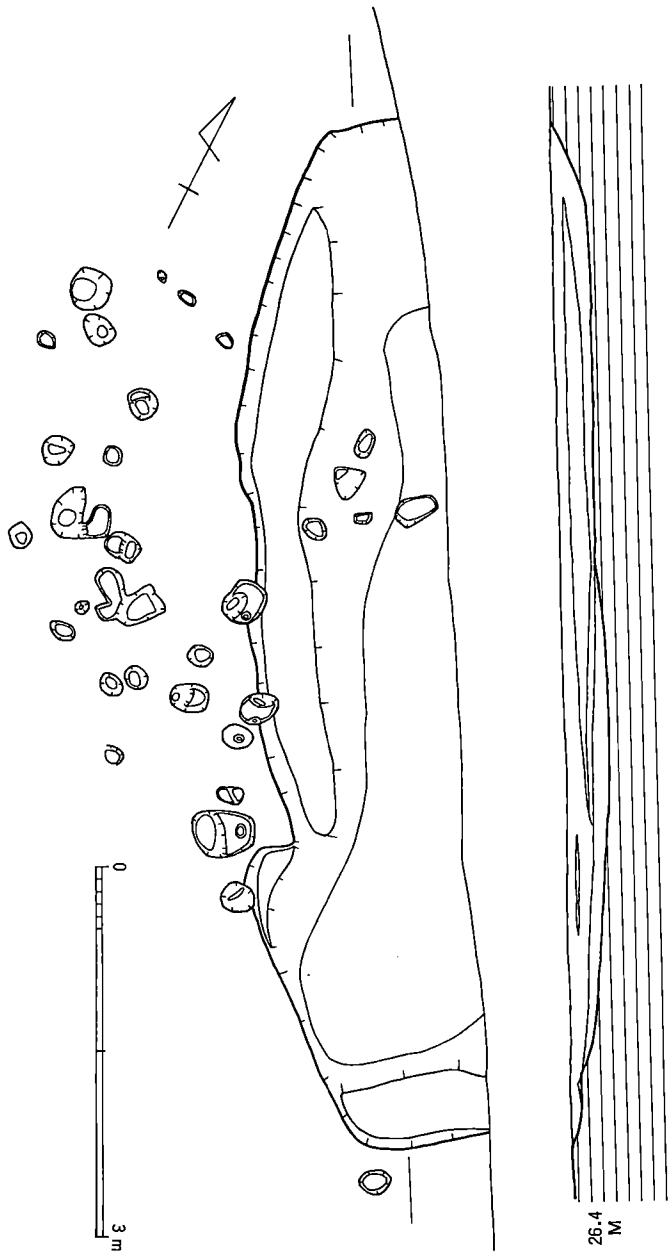


第9图 1号土坑·沟2出土遗物实测图 (1/4)

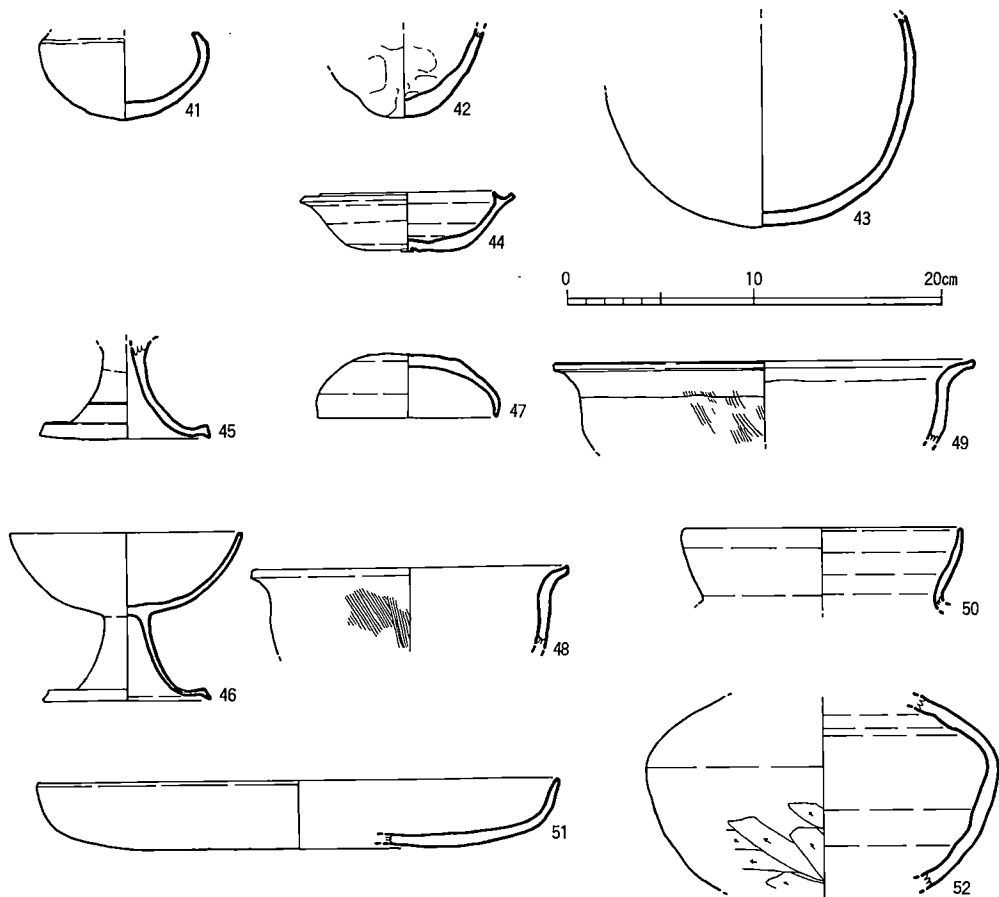
- 23 皿である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。復元口径8cm、器高1.3cmを測る。
- 24 皿である。底部がやや突出する。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。復元口径12.6cm、器高は4cmを測る。
- 25 皿である。底部がやや突出する。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。復元口径12.5cm、器高は3.4cmを測る。
- 26 瓦器椀である。低い高台を付ける。胴中央部から口縁部を欠失している。調整は不明である。また焼成はやや軟質である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は灰黒色を呈する。底径6.6cmを測る。
- 27 瓦器椀である。低い高台を付ける。口縁部付近を欠失している。調整は不明である。また焼成はやや軟質である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は灰色～灰白色を呈する。底径6.4cmを測る。
- 28 瓦器椀である。低い高台を付ける。調整は不明である。また焼成はやや軟質である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は黒色、口縁部付近が黄灰色を呈する。口径16.2cm、器高6cmを測る。
- 29 瓦器椀である。低い高台を付ける。調整は不明である。また焼成はやや軟質である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は黒色、口縁部付近が灰白色を呈する。口径16.2cm、器高5.9cmを測る。
- 32 瓦器椀である。低い高台を付ける。調整は不明である。また焼成はやや軟質である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は灰黒色、口縁部付近が淡灰色を呈する。口径15.9cm、器高5.2～5.9cmを測る。
- 33 瓦器椀である。低い高台を付ける。調整は不明である。また焼成はやや軟質である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は灰色、口縁部付近が黒色を呈する。口径15.6cm、器高5.8cmを測る。
- 30 白磁の口縁部片である。胎土は精良で、色調は灰色を呈し、灰色の釉薬を施す。
- 31 白磁の口縁部片である。胎土は精良で、色調は灰色を呈し、灰色の釉薬を施す。

2区土壌2（図版9-1、第10図）

土壌2は、2区北側、3号堅穴住居と1号堅穴住居周溝の間に位置している。その大半を発掘調査区域外に伸ばしている。2次調査と照合すると、不整楕円形を呈していることが判明した。長軸8.5m、深さ0.4mを測る。その中にはぎっしりと礫石が投げ込まれている。



第10图 2号土城实测图 (1/60)



第11図 3号竪穴住居・2号土壙出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物

土器 (図版13、第11図)

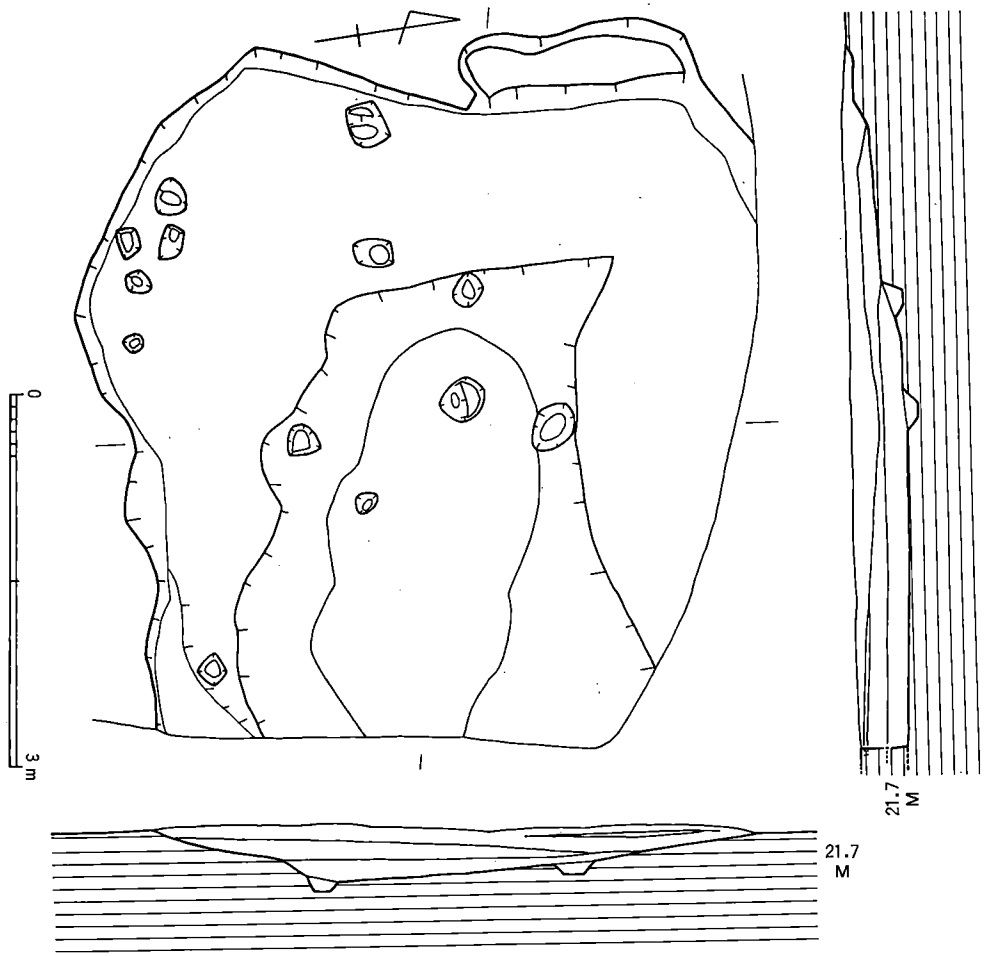
42 手捏ねの土器である。丸底の底部片が残存する。内外面とも指頭圧痕がある。調整は、ナデである。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄土色から灰色を呈する。

5区土壙3 (図版10、第12図)

南東側隅角に位置している。二段掘りになり、外側は南北約5.2m×東西約5mの不整形を呈し、内側は長径約3.5m×短径約2.9mを呈する。

出土遺物

土器 (図版15・16、第13・15図)



第12図 3号土城実測図 (1/60)

55 杯蓋である。天井部は丸く、口縁端は丸くおさまる。調整は剥落が著しく不明である。また、焼成はやや脆い。胎土は緻密である。色調は外面黄白色、内面灰白色を呈する。口径14.3cm、器高4.4cmを測る。

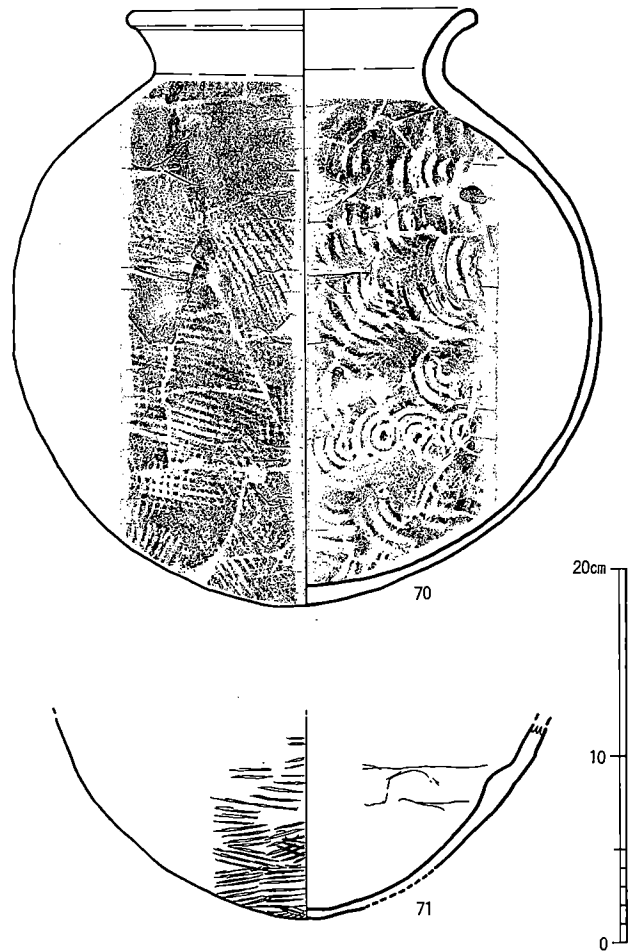
56 杯身である。身受けは短くやや斜め上方に伸びる。底部は平坦であるが、その中央部を欠失している。調整は底部回転ヘラ削り、その他ヨコナデである。また、焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は外面灰黒色、内面灰色を呈する。口径11.7cmを測る。

57 杯身である。身受けは短くやや斜め上方に伸びる。底部は平坦で、やや上げ底になる。調整は底部回転ヘラ削り、その他ヨコナデである。また、焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は灰色を呈する。口径12.3cm、器高3.6cmを測る。

58 杯身である。身受けは短くやや斜め上方に伸びる。底部は平坦であるが、その中心部は欠失している。調整は底部回転ヘラ削り、その他ヨコナデである。また、焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は灰色を呈する。口径13cmを測る。

59 杯身である。身受けは短くやや斜め上方に伸びる。底部は平坦である。調整は底部回転ヘラ削り、その他ヨコナデである。また、焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は暗灰色を呈する。口径12.4cm、器高3.6cmを測る。

60 杯身である。身受けは短くやや斜め上方に伸びる。底部は平坦である。調整は底部回転ヘラ削り、その他ヨコナデである。また、焼成はやや軟質である。胎土は緻密である。色調は灰



第13図 3号土壙出土遺物実測図 (1/4)

色を呈する。口径12.4cm、器高4.4cmを測る。

61 杯身である。身受けは短くやや斜め上方に伸びる。底部は平坦である。口縁部を打ち欠くところがある。調整は底部回転ヘラ削り、その他ヨコナデである。また、焼成はやや軟質である。胎土は緻密である。色調外面灰色、内面橙褐色を呈する。口径11.6cm、器高4.6cmを測る。

62 高杯の杯部である。身受けは短くやや斜め上方に伸びる。脚部が欠失している。調整は磨滅が著しく不明である。また、焼成はやや軟質である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は灰色を呈する。口径15.2cmを測る。

63 高杯の杯部である。62と異なり、身受けをもたず、脚部が欠失している。調整は内外面ともナデである。また、焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は灰色を呈する。口径9.2cmを測る。

64 椀である。丸底の底部から直線的に伸びて、口縁端部に達する。調整は内外面とも剥落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は灰黒色を呈する。口径10.5cm、器高6.2cmを測る。

65 椀である。丸底の底部からやや内弯気味に立ち上がる。調整は内外面とも剥落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は橙褐色を呈する。口径11.8cm、器高5.5cmを測る。

66 長頸壺である。胴部中央から下方は欠失している。頸部はやや外方に広がり、直線的に伸びて端部に達する。調整は内外面とも剥落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄褐色を呈する。復元口径8.7cmを測る。

67 椀である。丸底の底部から直線的に伸びて、口縁端部に達する。調整は外面底部がヘラ削り、その他ナデである。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は外面橙褐色、内面黒色を呈する。口径14.3cm、器高9.2cmを測る。

68 短く「く」の字状の口縁をもつ小型甕である。胴部は椀状に張り出し、底部は丸底である。調整は内外面とも剥落が著しく不明である。また、焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。口径15.1cm、器高18cmを測る。

69 椀状のものである。丸底の底部からやや内傾して直線的に伸びて、口縁端部に達する。調整は内外面とも剥落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は橙褐色を呈する。

70 短く「く」の字状の口縁をもつ土師質の短頸壺である。胴部は球状に大きく張り出し、底部は丸底である。調整は外面上方で磨滅が著しく不明、底部辺では叩き痕、内面では当て具痕が明瞭に残る。また、焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄褐色を呈する。口径18.7cm、器高31.9cmを測る。

71 丸底の底部片である。調整は外面に叩き痕が残る。また焼成はやや軟質である。胎土は緻

密である。色調は灰色を呈する。

土製品（第14図）

土製品1、2は大小の土製勾玉2点である。

大きい方1は長さ2.7cm、幅1cm、重さ5g、小さい方2は長さ1.8cm、幅0.6cm、重さ2gを測る。共に灰褐色を呈し、両端から穿孔がみられるが貫通していない。

4. 溝

調査区では1区で2条の溝を検出した。

1区溝1（図版2-1・11-2、付図2）

溝1は、1区の南側に位置している。南西側から東側に向け流れ、南西側で溝2と合流している。その切り合い関係は不明である。拳大から人頭大の礫石を無造作に投げ込まれ。現状では、幅70cm、深さ25cm程を測る。

出土遺物

土製品（第4図）

土製品4は土錘である。

長さ4.5cm、幅1.7cm、重さ10gを測る。中央に穿孔が貫通している。

形状は算盤型で、色調は灰褐色を呈する。

1区溝2（図版2-1・11-2、付図2）

溝2は、1区の南側に位置している。南西側から北東側に向け流れ、南西側で溝1と合流している。拳大から人頭大の礫石を無造作に投げ込まれる。現状では、幅70cm、深さ40cm程を測る。

出土遺物

土器（第9図）

34 椀状のものである。底部は欠失しているが、その端部に高台らしきものを付ける。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は赤暗橙色を呈する。口径12cmを測る。

- 35 椀状のものである。口縁部はやや外反する。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。口径14cmを測る。
- 36 底部を欠失する椀である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙色を呈する。口径11.6cmを測る。
- 37 平底の底部片である。調整は内面にハケ目を残す。また焼成は良好である。胎土は緻密で、角閃石を含む。色調は黄橙色を呈する。底径5cmを測る。
- 38 底部片である。平底で、中央部がやや窪む。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は暗橙色を呈する。底径7.4cmを測る。
- 39 皿状のものである。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。復元口径12.6cmを測る。
- 40 皿状のものである。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は橙褐色を呈する。復元口径13cmを測る。

5. その他

ピットからは以下のものが出土している。1区から順次説明していく。

P 102 (第14図、付図2)

P 102は1区北側に位置している。西側にP 120がある。

75 龍泉窯系の椀片である。縞蓮弁が施される。胎土は精良で、色調は灰色を呈し、うぐいす色の釉薬を施す。

P 120 (第14図、付図2)

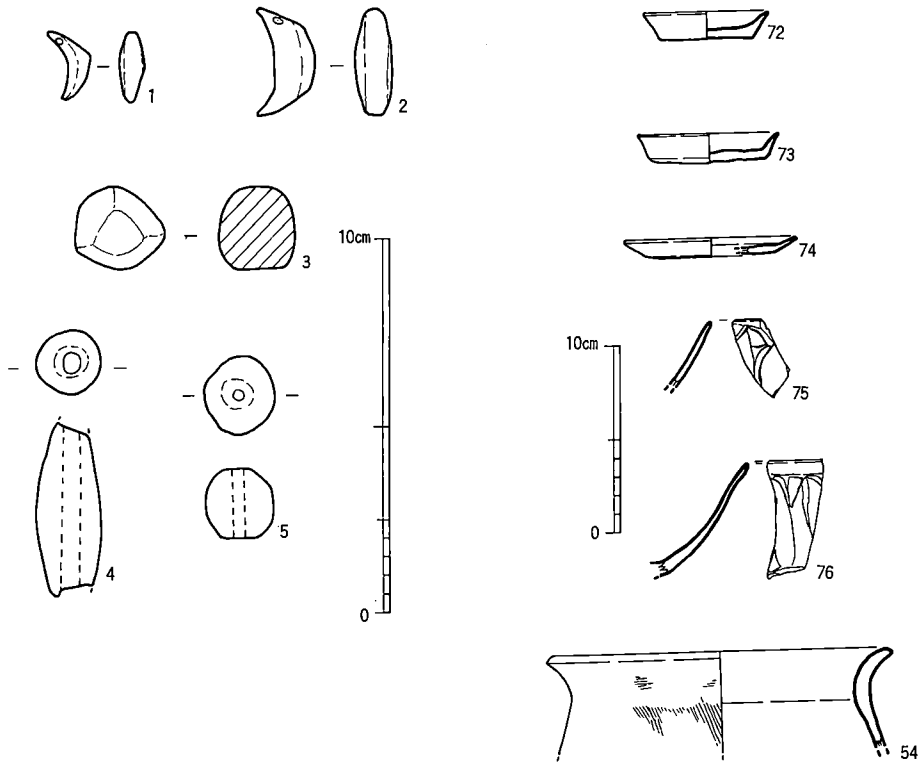
P 120は1区北側に位置している。東側にP 102がある。

72 皿である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄褐色を呈する。復元口径6.8cm、器高1.5cmを測る。

P 129 (第14図、付図2)

P 129は1区の南西側溝2の上方に位置している。

76 龍泉窯系の椀片である。縞蓮弁が施される。胎土は精良で、色調は灰色を呈し、うぐいす色の釉薬を施す。



第14図 各遺構出土土製品及び土器実測図 (1/2、1/4)

P 151 (第14図、付図2)

P 151は3区北側に位置している。

54 「く」の字に緩やか外反する甕の口縁部片である。調整は、口縁部ヨコナデ、体部にたてハケが残る。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母を含む。色調は外面黄褐色、内面黄灰色を呈する。復元口径は18.4cmを測る。

P 37 (第14図、付図2)

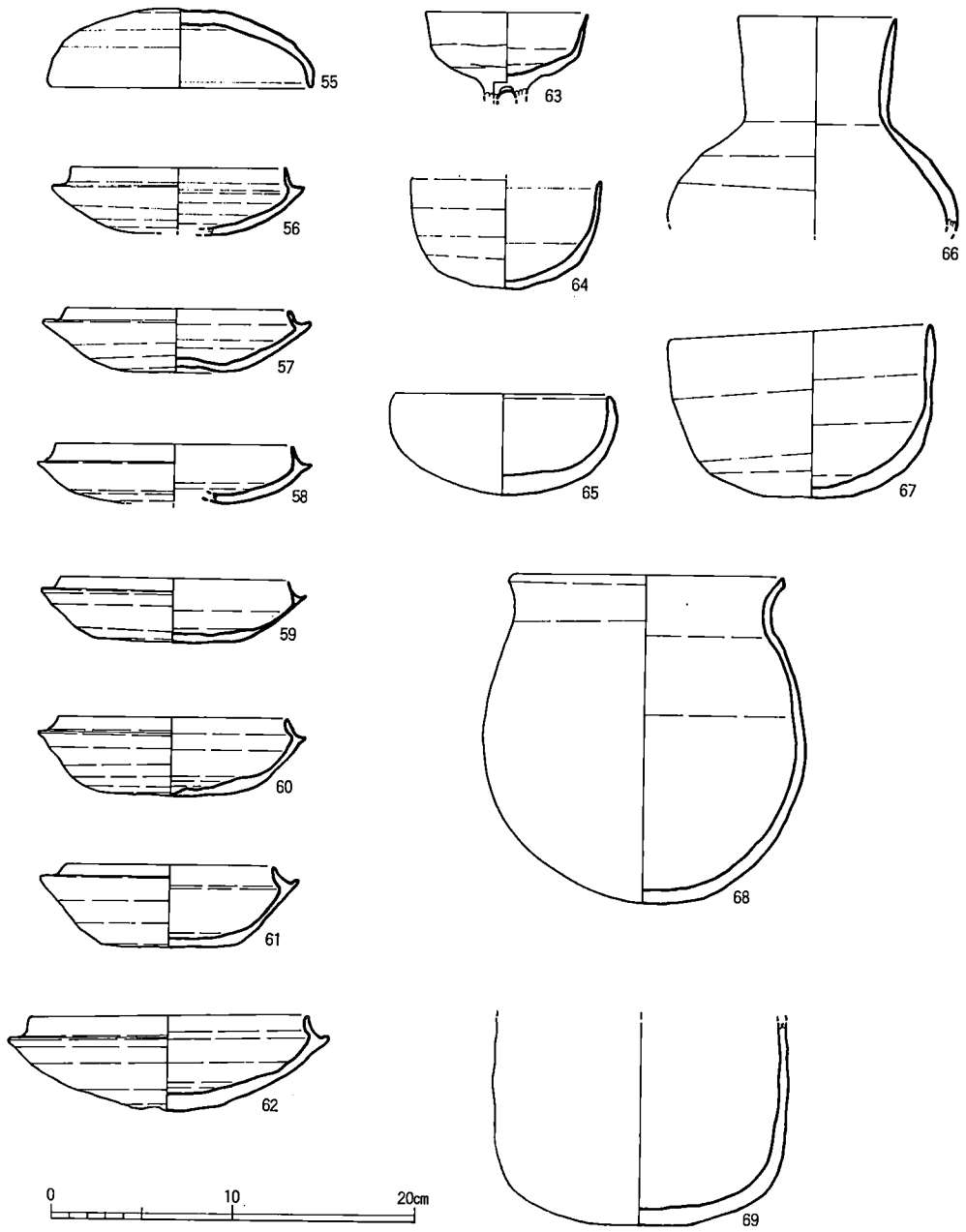
P 37は5区中央に位置している。

73 皿である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄褐色を呈する。復元口径7.6cm、器高1.7cmを測る。

P 50 (第14図、付図2)

P 50は5区北西隅角付近に位置している。

74 皿である。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄褐色を呈する。復元口径9.4cm、器高1cmを測る。



第15图 3号土坑出土遗物实测图 (1/4)

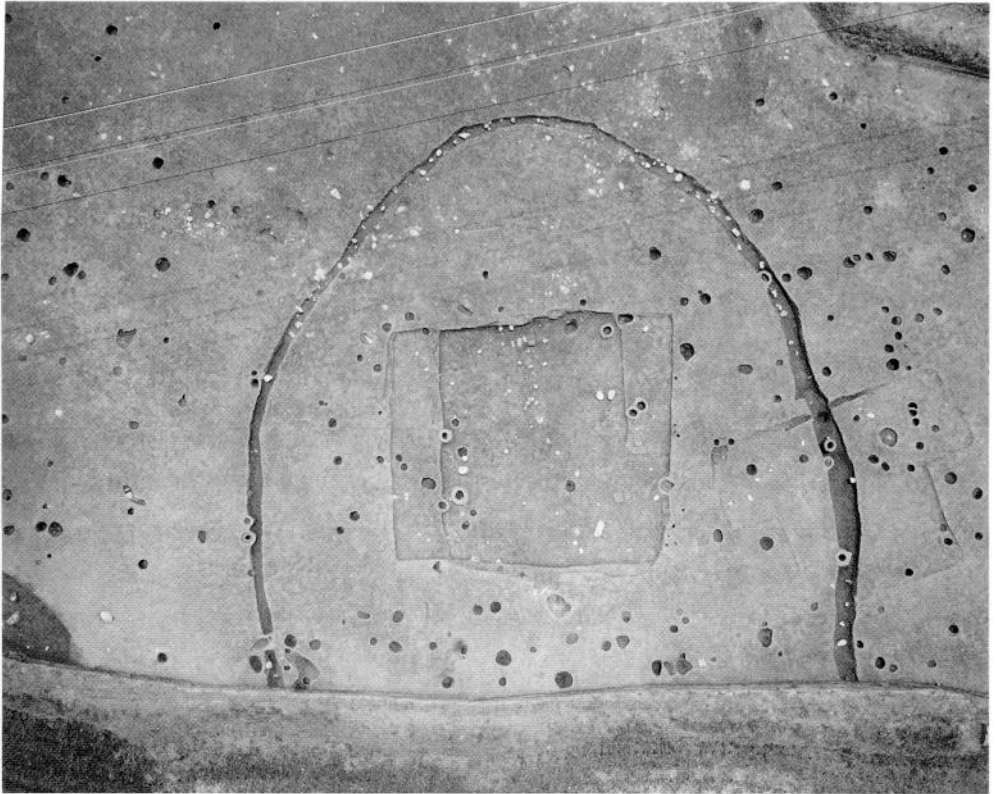
6. 小結

以上が、第1次調査の報告である。この調査で特に注目されることは、1号竪穴住居である。

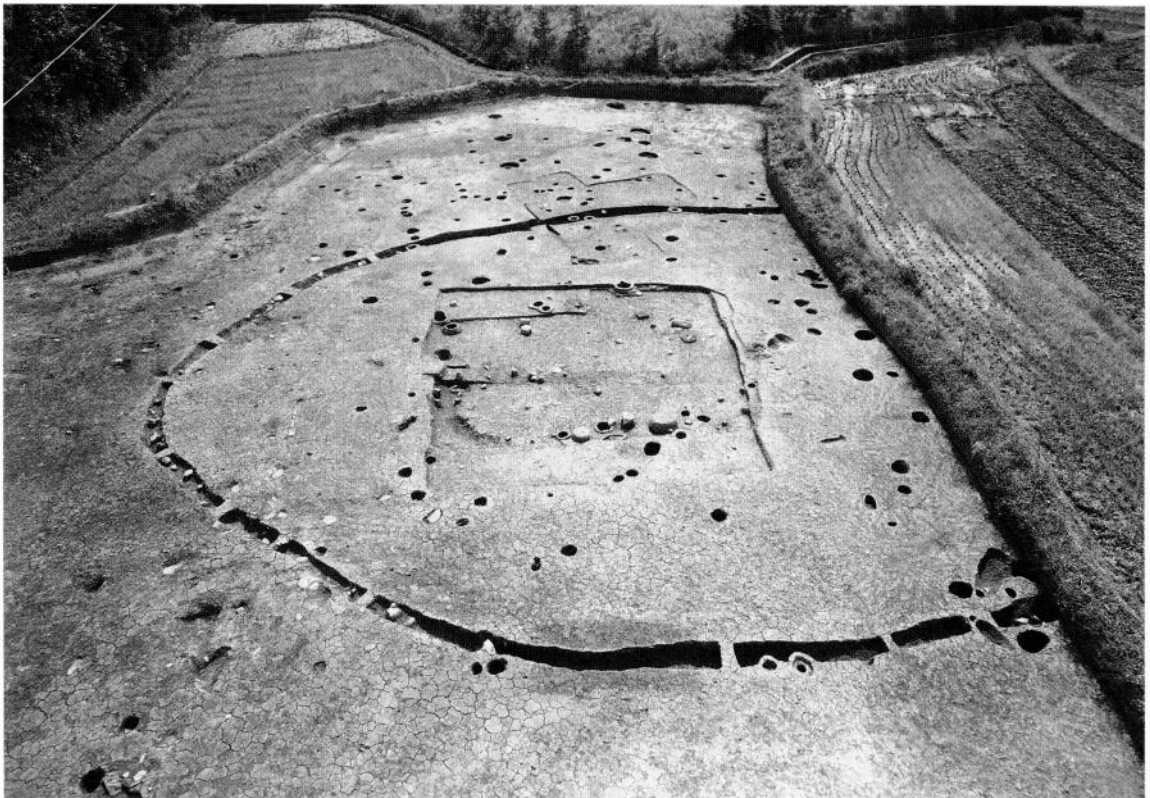
この竪穴住居は、略方形プランで、ベット状遺構を有する。この住居跡には、直径8 m前後のU字形の周溝（幅20～45cm、深さ15～40cm）がまわる。また、柱穴は住居跡内に4本、住居跡外側には各辺2本、四隅に1本を配するようである。ただ、入り口と思われる南側では、柱穴の直径が小さく壁体に近接して3本ある。

さて、このように周溝を有するタイプは、丘陵上の傾斜面に立地する場合よく見ることが出来る（山地型タイプ）。ところで、団後遺跡は標高25 m前後の微高地に立地している（平地型タイプ）。こうした平地型タイプは、静岡県登呂遺跡をはじめ、富山県江上A遺跡、滋賀県針江川北遺跡、福岡県屏賀坂遺跡で検出されている。しかし、これらは、その周溝の幅が大きかったり、深さが深かったり、さらには直径が大きかったりで、明らかに区画を意味する溝であろうと思われる。団後遺跡の場合、壁体から周溝までの距離が1.5 m弱であること、支柱穴および住居跡外の柱穴の存在から、周溝にむけて葺下ろした天井の高さが5 m強の竪穴式住居だったとも考えられる。このようなことから、この周溝は雨樋としての機能を推測させる。つまり、床面積30㎡弱の竪穴式住居跡は、周溝内側までその生活空間を広げることにより、約5倍の面積を持つことが出来る。今後、このようなタイプの住居跡の事例の増加を待つしかないが、古代住居の建築構造、古代人の生活様式などを探る上で貴重な資料となり得るだろう。

その他、この住居跡内からは、山陽地方の上東式の高坏、筑前地方の西新式の高坏が出土しており、当時の地域間の交流、細かくは土器編年の併行関係を見る上で、大いに注目されよう。



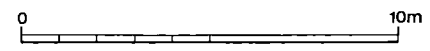
1号竪穴住居全景（真上から）



1号竪穴住居全景（東から）



凡例
 J = 竖穴住居跡
 D = 土壇
 H = 掘立柱建物
 M = 溝
 P = 柱穴



第16図 団後遺跡第2次調査遺構配置図(1/200)

第3節 第2次調査の遺構と遺物

1. 発掘調査の概要 (第16図, 図版17・18)

2次調査は昭和63年12月以後に用地が解決した部分2700㎡について、全面発掘調査を実施した。椎田道路の10工区にあたり、第7地点である。第1次調査を実施した下の段の水田三枚分の発掘調査を実施した。

調査期日は、平成元年4月1日から同年5月31日までの2ヶ月間を充てた。埋め戻し等が6月上旬までかかった。

当該地は、福岡県豊前市大字中村字団後で、小字名をとった。(第1図参照)

第2次調査で、検出された遺構は下記の通りである。

竪穴住居跡	6軒
掘立柱建物	3棟
土 壙	6基
溝状遺構	10本
柱穴群	

次節より各遺構と遺物の説明を行う。

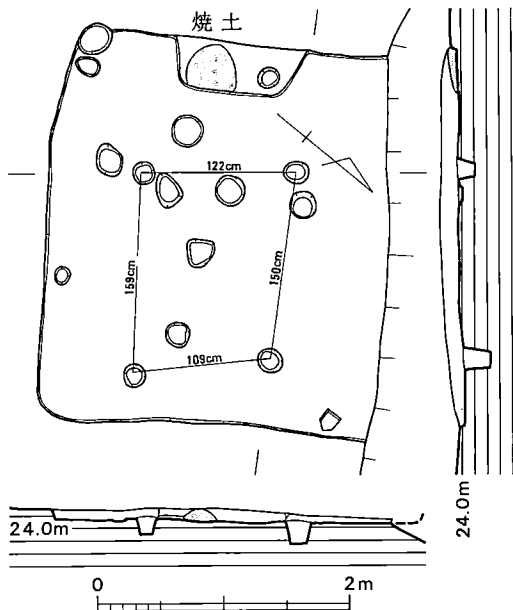
2. 生活遺構と遺物 (第17図～第39図, 図版17～30)

検出された遺構は竪穴住居跡6、掘立柱建物3棟、土壙6、溝状遺構と柱穴群等であった。生活の場としては、住居としての位置付である。

まずは竪穴住居跡から説明を付加しよう。

1号竪穴住居跡 (図版3、第17図)

平面形は長方形を呈し、大きさは2.65m×3.05mで北側の1辺は削平されて、西側にカマドをもっている。主柱穴は4本柱である。壁高の高さは7～10cmで辛うじて残っていた。出土遺物は土師器の高台付椀の高台の部分が床面直上から、石器として砥石と石鏃が各1点ずつ検出されている。時期的には土師器の高台付椀のころと考えた方が妥当である。7世紀後半から8世紀代と考えたい。



第17図 1号竖穴住居跡実測図(1/60)

まれている。軽量で98gを計る。鉄器を砥いだものと考えられる一部に鉄分の付着が見られる。

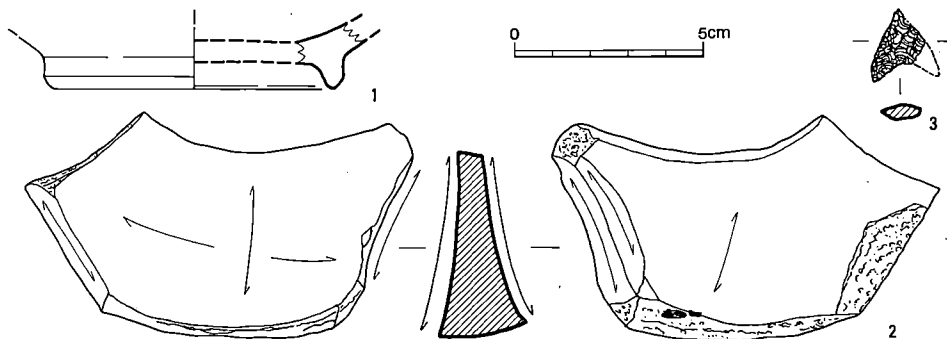
石鏃 (③) 姫島産の黒曜石製で、脚部が大きく欠損している先端部側縁にも小さな欠けがある。重量は0.7gで、この住居跡に伴う遺物ではない。縄文期の所産のものである。

出土遺物 (第18図、図版28)

遺物は床面より出土したもので、土師器の高台付椀の高台の部分と、石器の砥石は西辺付近で、石鏃は中央部付近で検出された。

土師器 (①) 高台付椀の高台の部分の細片である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好で、復原底径は8.0cmである。器面の調整は風化が著しく不明である。

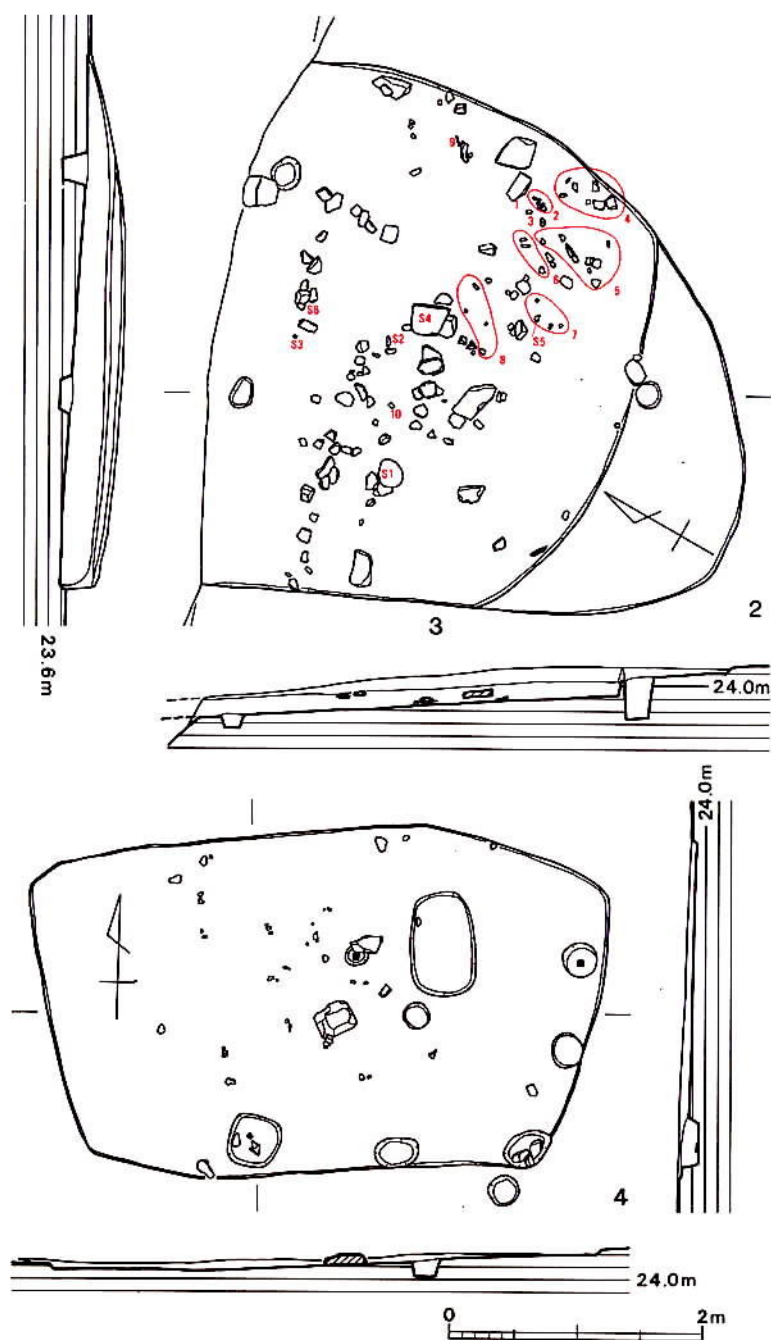
砥石 (②) 硬質砂岩製で両面及び側面は使用されている。仕上げ砥として使われ、よく使いこ



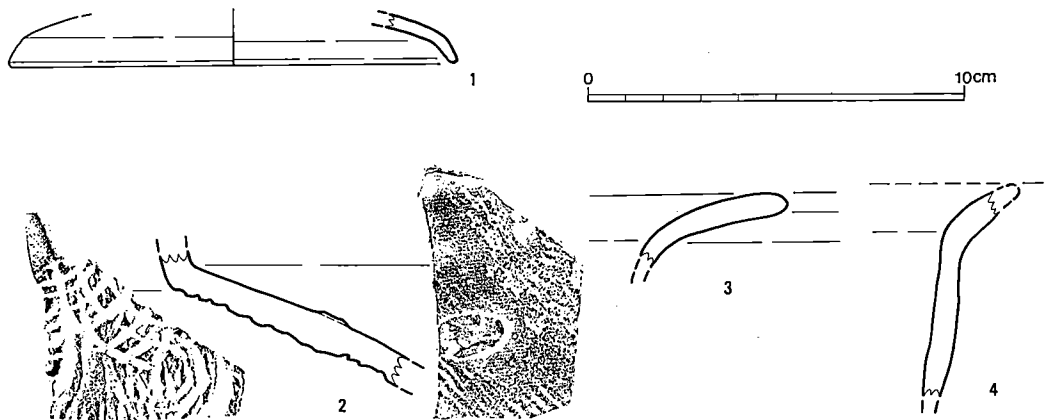
第18図 1号竖穴住居跡出土遺物実測図(1/2)

2号竖穴住居跡 (第19図、図版20・21)

平面形は不整形円形を呈するものと考えられるが、3号竖穴住居跡から切られているものである。新旧関係は3号住が古く、2号住が新しいということになる。切られているために、床面の残りは1m×2.2mほどである。柱穴が1本検出されている。出土遺物は床面よりの出土はみられず、覆土中より須恵器の細片がみられた。流れ込みと思われる。



第19图 2·3·4号住居迹实测图(1/60)



第20図 2・3号竪穴住居跡出土遺物実測図①(1/2)

出土遺物 (第20図)

覆土中より須恵器の杯蓋口縁部の細片が1点出土している。

杯 (①) 蓋の口縁部の破片で、復原口径12cm、胎土に細粒砂を含み、色調は灰色を呈し、器面調整は両面ともヨコナデ、焼成は堅固である。古墳時代の中ごろ所産のもので、流れ込みのものである。

3号竪穴住居跡 (第19図、図版21)

2号住居跡を切っている住居跡で、床面からは縄文晩期の土器が出土している。平面形は楕円形に近い不整形を呈し、北側半分は削平されている。残存長は4.20m×3.30m+αを計る。床面には縄文晩期の土器片が密着して検出され、それと道具として使用された石器、石皿・石斧・石鏃・剝片等が検出された。削平面ぎりぎりのところに柱穴2本が検出されている。これが主柱穴と考えられる。また遺物については覆土中より須恵器片と土師器片が浮いた状態で検出されている。壁高は10cm前後である。

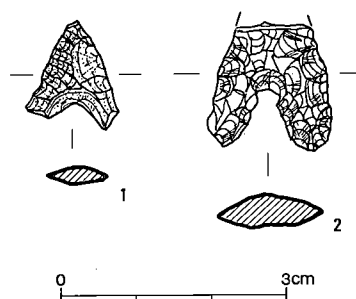
この住居跡の時期は、出土遺物から縄文晩期の時期と考えられる。

出土遺物 (第20図、図版29)

覆土中より出土したものを(第20図)と、床面より出土したものと(第21~23図)に分けて説明する。

須恵器 (第20図-②) 覆土中から出土したもので、床面より10cmばかり浮いた状態のものである。提瓶の頸部破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色で、自然釉がこびりついている。焼成は良好で、器面の調整は表面に平行線タタキがあり、裏面には同心円のタタキが見られている。古墳時代後期の所産のもの。

土師器 (第20図-③・④) 覆土中から出土した小破片で、③は口縁部破片で、胎土に細砂粒を含み、色調は黄灰色を呈し、焼成はややあまい。器面の調整は不明である。④は甕の頸部付近の小破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄白色で、焼成はややあまい。器面の調整は不明である。



第21図 3号竖穴住居跡出土遺物実測図②(1/1)

石器 (第21・22図、図版28)

床面より出土したもので、石鏃2点と石皿・砥石等の作業台と石斧・剥片である。

石鏃 (①・②) ①は安山岩製の小型のものである。加工は押圧剥離である。重量は0.3g。②は乳白色の黒曜石製で姫島産のものである。先端部が半欠している。加工は押圧剥離である。重量は0.5g。

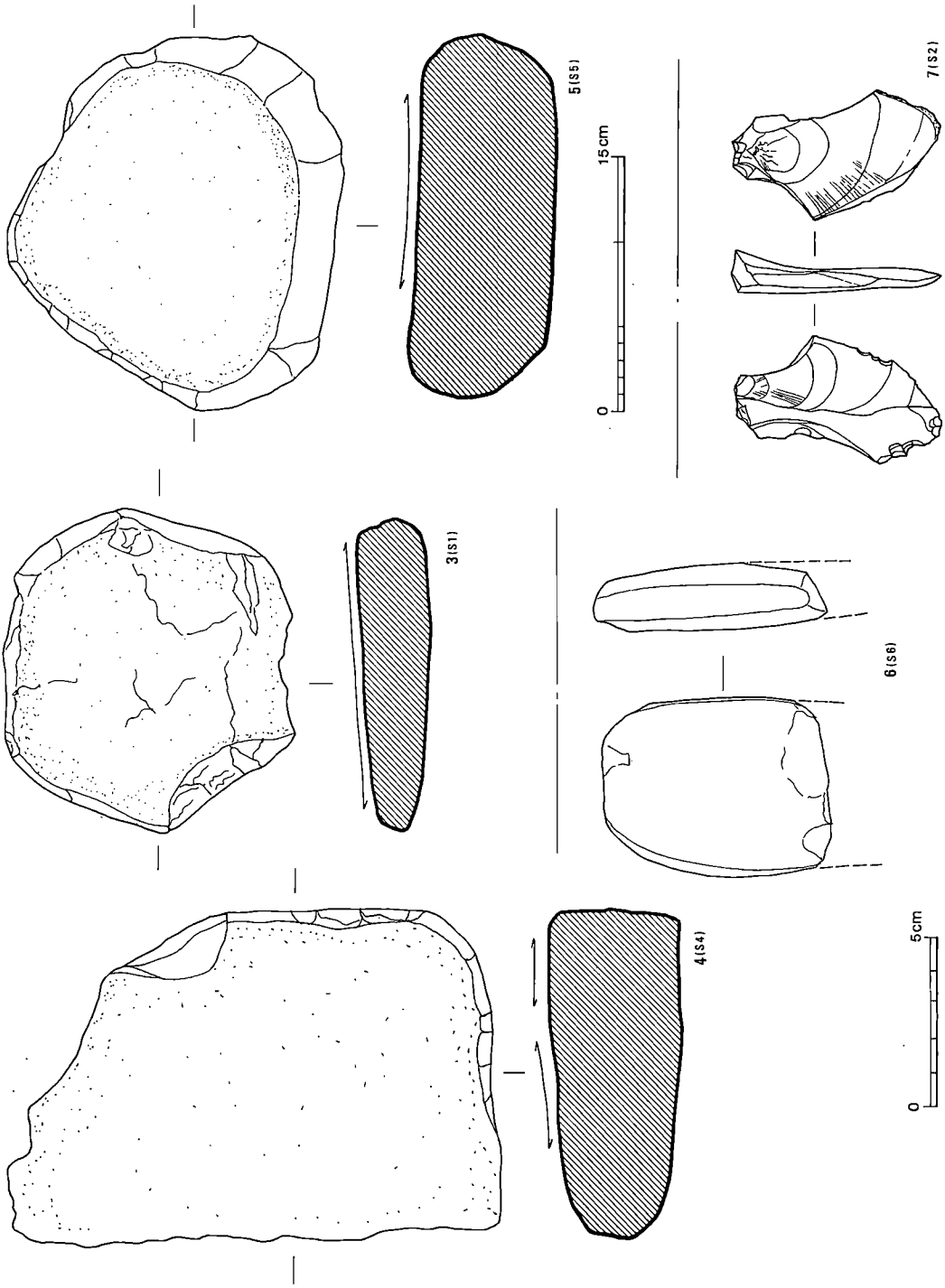
石皿 (③・⑤) ③は床面より出土したもので、S-1で取り上げた。石質は安山岩で、表面は凹状に磨かれている。剥離が走っている。充分に使用されているものである。重量は2420gで手ごろな河原石を使ったものと考えられる。⑤は床面に密着したような状態で出土したもので、S-5で表示している。石質は安山岩で表面は凹状に磨かれてよく使用されている。これも河原石を使用したものである。重量は5860gを計る。両者とも作業台として使用されたものである。

作業台 (④) 床面に密着して出土したもので、石質は安山岩で表面は磨かれている。半欠品と思われるが、重量は7500gを計る。S-4で取り上げている。これは石皿というよりも、作業台として考えた方が妥当である。

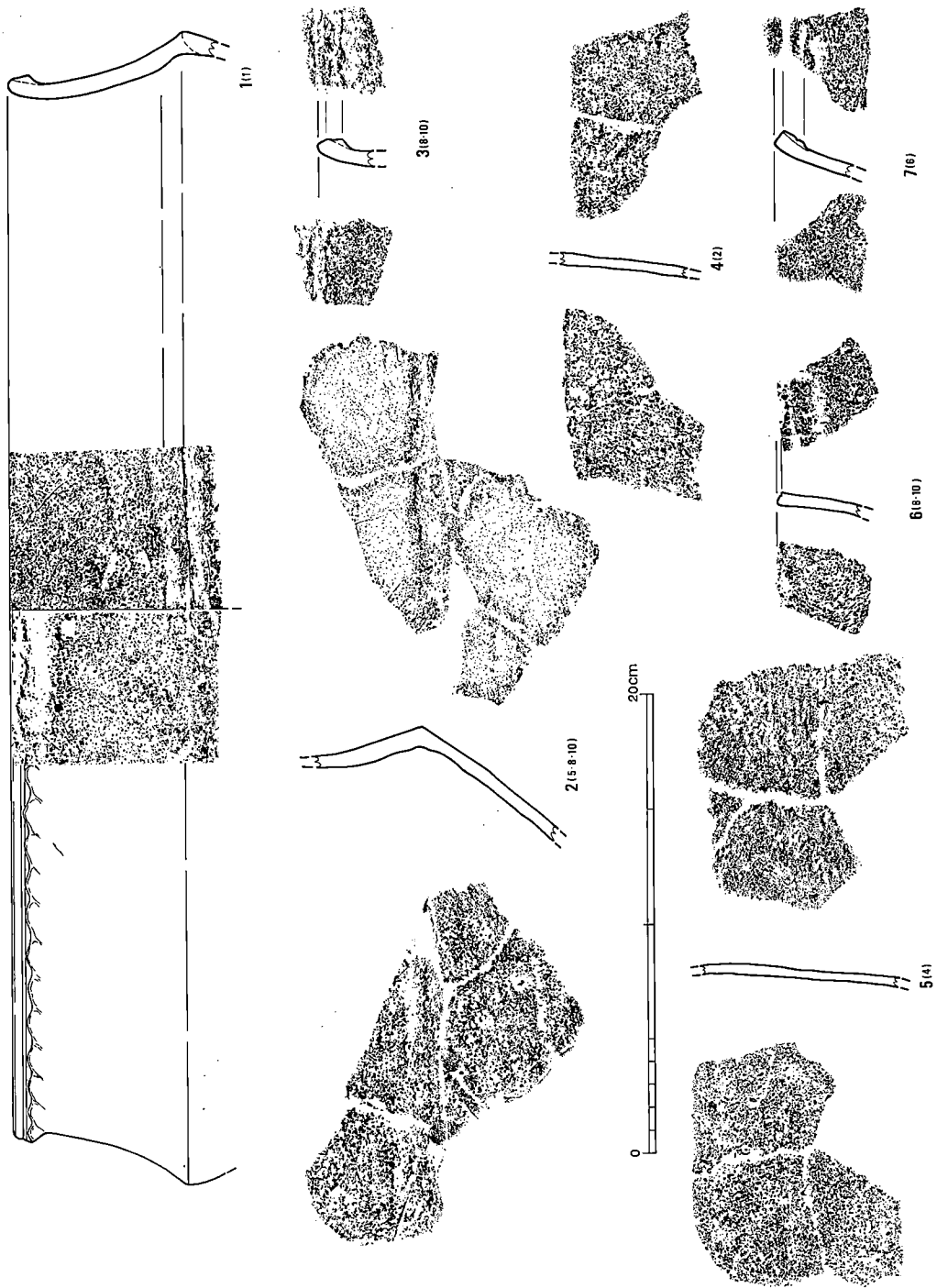
石斧 (⑥) 石材は玄武岩製で、小型の石斧の基部の破片である。重量は76.3gを計る。転用されて叩き石として使用されたと思われるが、両端面以外も使用されたものである。ここでは石斧として取り上げる。S-6が取り上げ番号で表示している。

剥片 (⑦) 石質はチャートで、色調は飴色を呈し、母岩から剥離したもので、プラットホームも残っている。石器をつくるために住居跡に打ち込んだものである。重量は19.7gで、S-2の番号で取り上げている。

この他に、石皿と思われる作業台(S-1)があるが、安山岩製で、重量が3470gを計る。表面は磨かれている。断面が厚い方から薄い方へ使用されている。



第22图 3号竖穴居出土遗物实测图③(1/2、1/4)



第23图 3号竖穴住居跡出土遺物実測图④(1/3)

縄文土器 (第23図、図版29)

住居跡の床面より出土したもので、取り上げ番号を()の中に数字で表示した。

①は粗製土器の深鉢で口縁部破片で、辛うじて復原口径は46.1cmを計る。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黒味をおびた茶褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部の造りは玉縁状にまき上げて、口唇裏面をナデ上げ、表面から指で押えつけている。中央部に凹線が1条入り、指圧痕が口縁部の文様と自然飾りになっている。煮こぼれたものが炭化物として付着している。胴部はなだらかに「くの字」状の屈曲分をもち、若干の稜をもっている。口唇裏面は丸味をおびながら内傾させる。最大径は胴部にある。

②は①と同一個体と思われるもので、色調が若干相違する。胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰黒色から茶褐色で、器面の調整は風化のため不明である。焼成は良好である。

③は①と同一個体と思われるもので、口縁部破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良で、口唇部付近に炭化物が付着している。

④は胴部下半の破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は磨滅気味で不明。①とは個体が異なる。

⑤も胴部下半の破片で、胎土に小砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良である。器面の調整は磨滅気味で不明である。①とは個体が相違する。

⑥は口縁部破片であるが①とは異なるものである。玉縁状の凸体がつくもので、口唇部に一条の線が入る。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良で、器面の調整は磨滅して不明である。

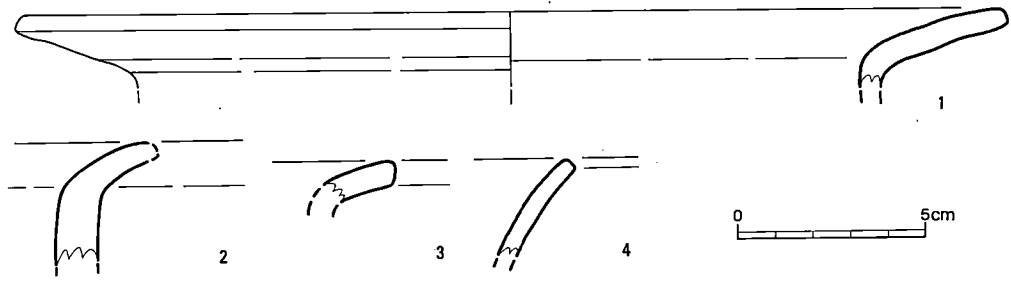
⑦も口縁部破片で、①と同一個体と思われるが、若干、口唇部先端が異なる。胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色で、焼成は良好である。表面は指圧痕もみられるが、1条の沈線が施文されている。縄文土器は2個体である。

本住居跡から出土した縄文土器は晩期中葉の粗製の深鉢土器が2個体検出された。

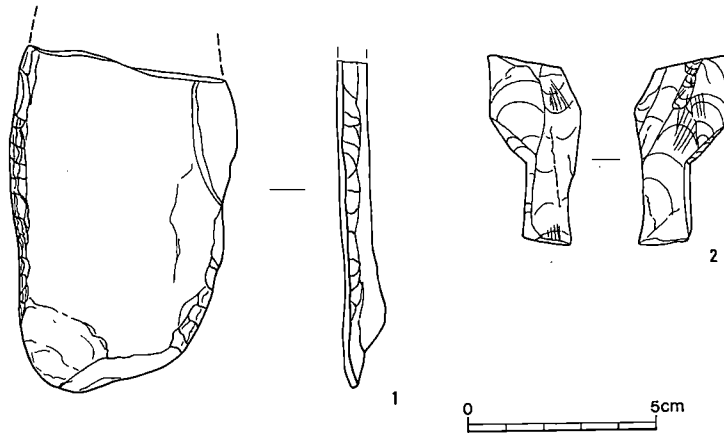
出土遺物から3号竪穴住居跡は縄文時代晩期中葉の住居跡で、切り合い関係から2号竪穴住居跡もほぼ同時期と考えられる。

4号竪穴住居跡 (第19図、図版23)

当該地区の西側の中央部に位置し、平面形は不整長方形を呈するもので、大きさは450cm×210cmで、床面には中央部に深さ10cm前後の浅い土壙と東側辺に柱穴が4本みられ、中央部に1本と南辺に2本ということになるが、この組合せでは、■印がついた柱穴ピットを主柱穴として捕らえたい。2本柱ということになる。出土遺物は石斧・黒曜石の剥片が各1点で土器は古式土師器の小破片が床面に密着して検出されている。



第24図 4号竖穴住居跡出土遺物実測図①(1/2)



第25図 4号竖穴住居跡出土遺物（石器）実測図

出土遺物（第24・25図、図版30）

床面から出土したものを図示してみた。

土師器（①・②・③・④） ①は壺の口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄白色で、焼成はやや軟質である。器面の調整は風化著しく調整不明である。

②は口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄白色で、焼成は良好で、器面の調整は風化して不明。

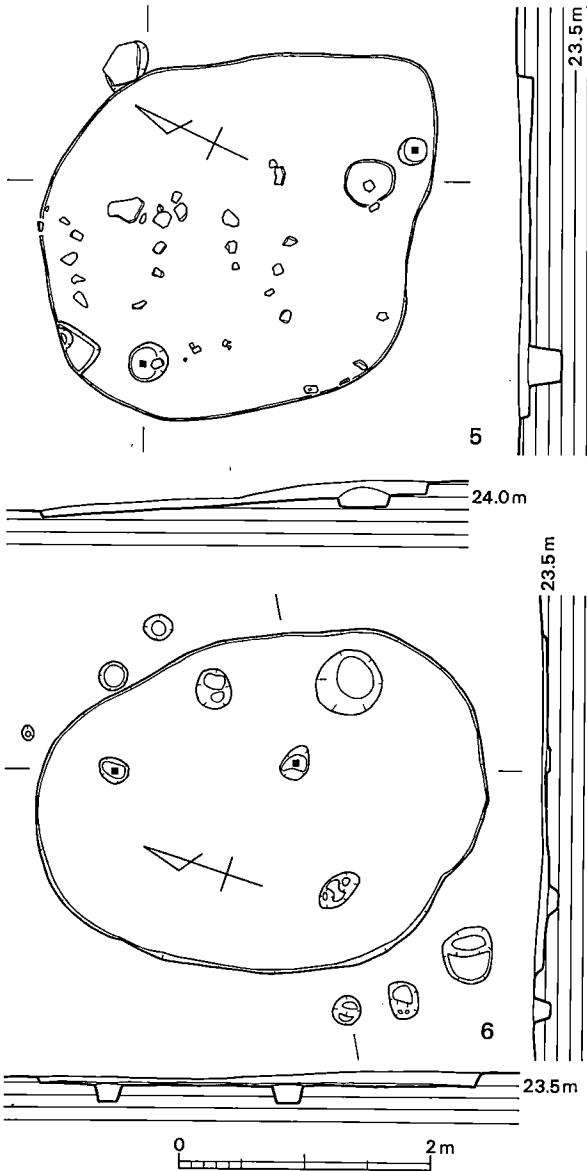
③は口縁部の小破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良好である。調整はナデである。

④は口縁部の小破片で、胎土に細粒砂を含み赤色粒子も混る。色調は黄褐色で、焼成は良好で、器面の調整はナデ仕上げである。

石器 (第25図)

石斧 (⑤) 床面より出土したもので、石質は緑泥変岩で半欠品である。重量は93.6g。側縁部に剝離がみられる。打製のものである。

剥片 (⑥) 床面より出土したもので、石質は黒曜石で、腰岳産のものと見られる。重量12gで、使用痕は見られない。石材として搬入したものと考えられるが、この住居跡に伴わないものと考えた方が妥当である。



第26図 5・6 竪穴住居跡実測図(1/60)

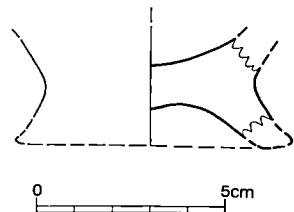
住居跡の時期は出土遺物から古墳時代前期と考えられる。しかしながら一応住居跡と捕らえたが、若干疑問の点がある。

5号竪穴住居跡 (第26図、図版23)

平面形はやや歪な隅丸方形を呈するもので、大きさは285cm×280cmで、壁高は10cm前後を計測する。床面には3本の柱穴があるもので、■印を付したものが主柱穴と考えたい。いわゆる2本柱の住居である。出土遺物は小破片が床面から若干出土しているが、図示できるものは底部破片が1点であった。

出土遺物 (第27図)

住居跡の南辺の西側の床面から出土した底部破片である。他の者



第27図 5号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/2)

は土師器の細片であった。

土器 (第27図) 胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成はややあまい。底部破片で上げ底になっている。器面の調整は風化が著しいため不明。弥生終末期の土器である。

住居跡の時期は、古墳時代初めごろとしておく。

6号竪穴住居跡 (第26図、図版23)

北側の末端地区に近い位置にあるもので、平面形は不整円形を呈する。大きさは350cm×260cmの楕円形に近い。出土遺物は検出されず。壁高は5～10cm前後を計測するが、床面には5本の柱穴があるが、支柱穴にあるのは■印のついた2本で、2本柱の住居跡で、5号住居跡に近い時期と考えられる。古墳時代初めごろか？

1号掘立柱建物 (第28図、図版24)

遺構は中央部の東側にあつて、2間×2間のべた柱の建物であつた。北東隅の柱穴(■印)には土師器の椀が1点出土している。柱間は154～195cmである。深さは20cm～60cmを計測する。

出土遺物 (第29図、図版30)

土師器 (①) 北東隅の柱穴の中より出土した椀形土器で、所謂土師質土器と称するもので、焼成は良好、器高は5.5cm、復原口径は16.6cm、胎土に細粒砂を含み緻密で、色調は白黄褐色。器面の調整は内外面ともナデ仕上げである。高台の造りは、高台部分だけ粘土をまるめ紐状に張り付けたものを指ナデしたもので、断面が三角形を呈している。造りは雑で、底面に板目痕が残っている。

この掘立柱1号建物の時期は11世紀後半代の建物である。

2号掘立柱建物 (第30図、図版25)

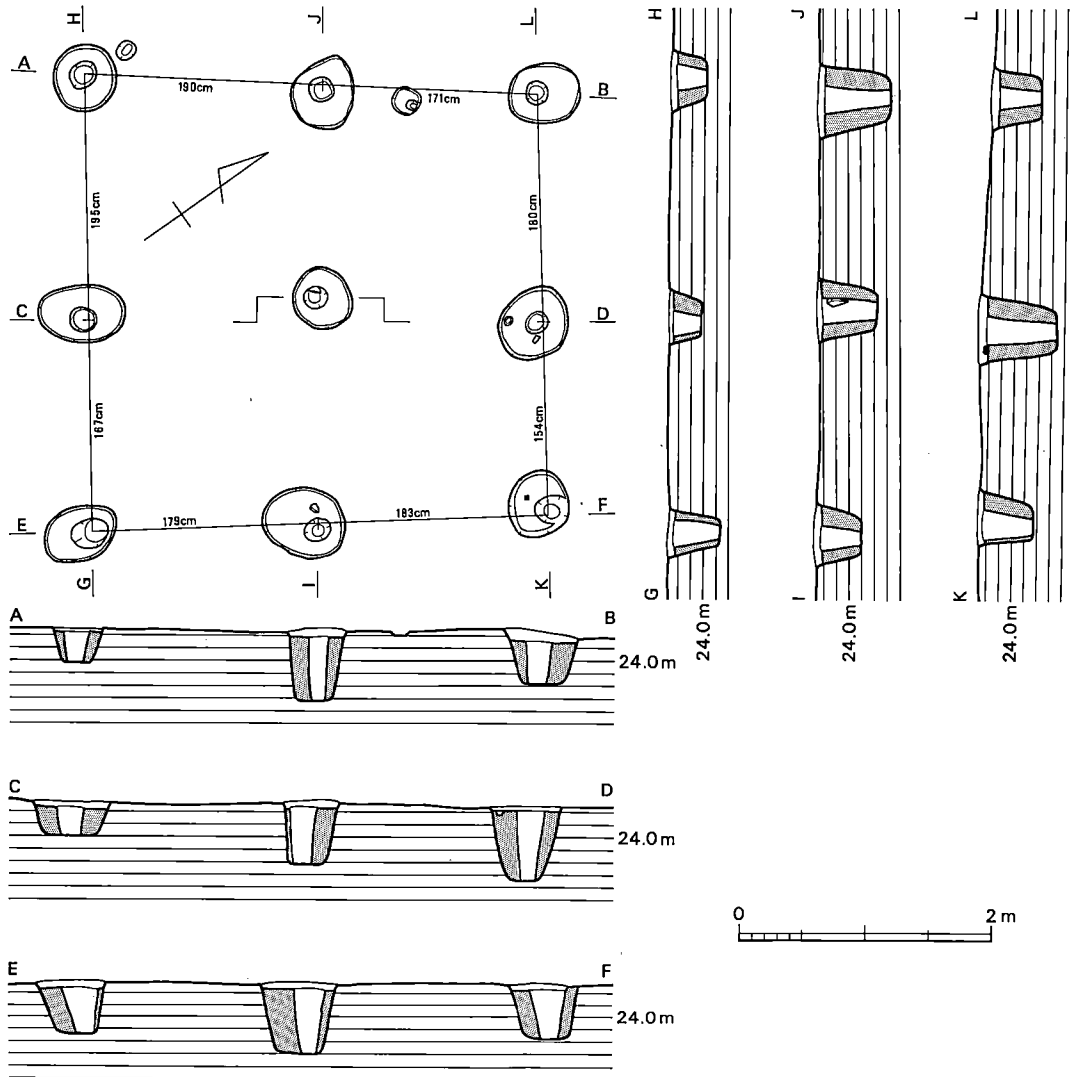
2棟の建物が切り合っているもので、2号建物は東西に長く2間×3間の建物である。

柱間間隔は135cm～207cmで、半間分西側に張り出している。出土遺物は■印のついた柱穴の中から出土している。3号建物と同じ柱を使用するものであるため疑問点がある。

3号掘立柱建物 (第30図、図版25)

2号建物と重複しているもので、2間×4間の建物と思われるが、南北に建つものである。

柱間間隔は113cm～206cmで、半間分南側に張り出しているものである。出土遺物は■印のつ



第28図 1号掘立柱建物跡実測図(1/60)

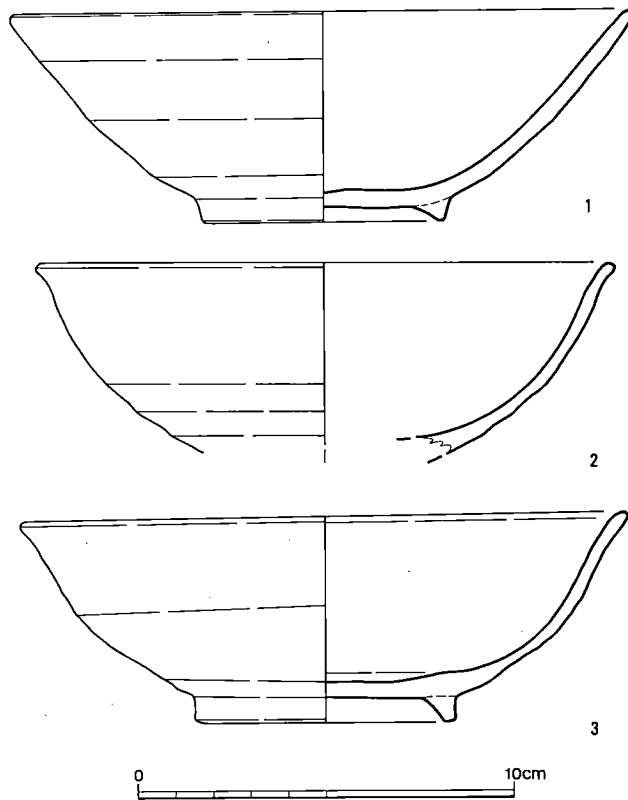
いた柱穴の中から検出されている。2号建物と柱を共有するため疑問点がある。

出土遺物 (第29図、図版30)

2号・3号建物に共有する柱穴中より出土したもので、内黒土師器と土師器が出土している。

土師器 (②・③) ②は碗形土器で、胎土に細粒砂を含み緻密な粘土を使用し、色調は白黄色で復原口径は15.4cmである。口縁部を外反させて薄手に造られている。焼成はやや軟質である。器面の調整は内外とも風化が進んで不明である。

③は内黒土師器で1/3が欠損している。胎土に細粒砂を含み緻密な粘土を使用し、色調は内



第29図
1～3号掘立柱建物遺構
出土遺物実測図(1/2)

面は黒色、外面は黄褐色で口縁部から胴部にかけて黒変（斑）がみられる。器面の調整は風化が著しいため不明。口径は16.2cmで、高台の造りは1号建物より出土した椀形土器より丁寧である。

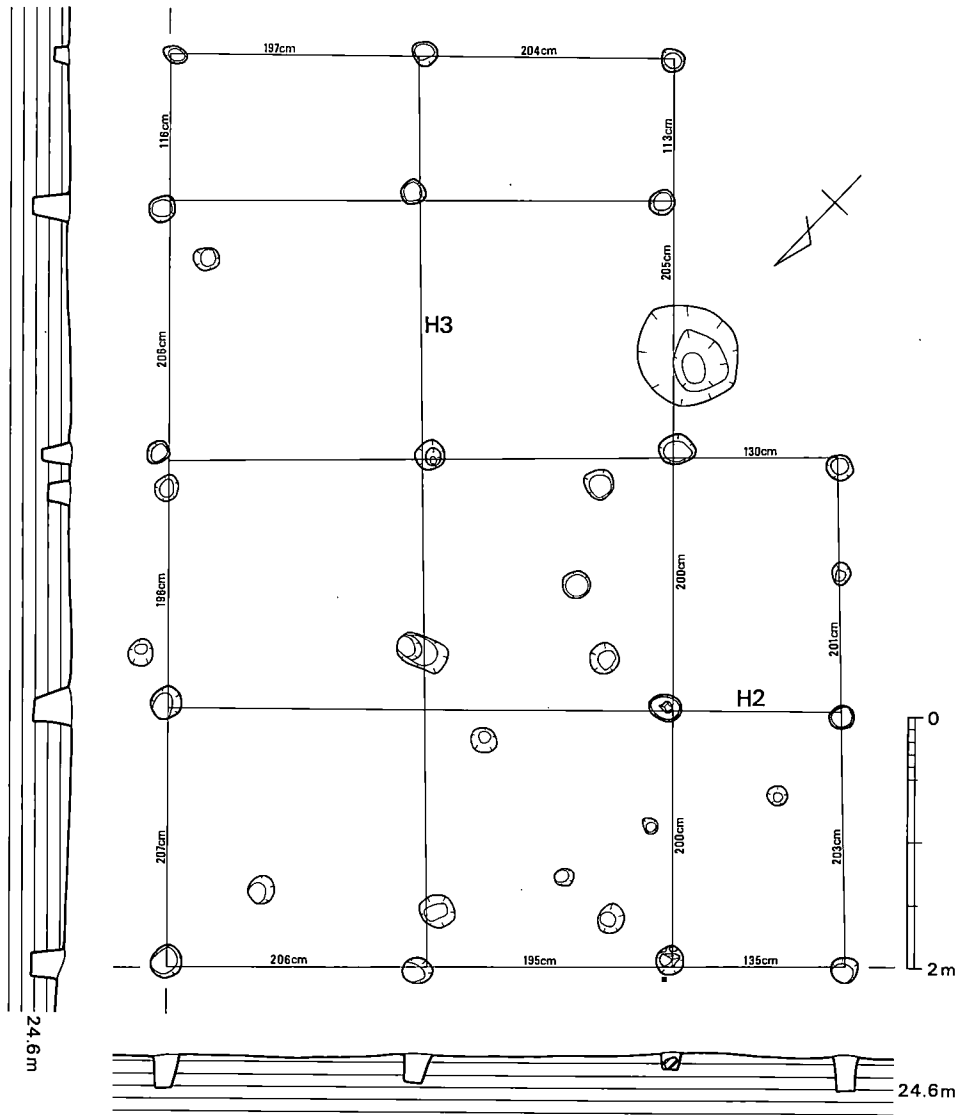
時期的には遺物からは12世紀代と考えられるが、2号・3号建物の新旧関係は不明である。しかしながら建物が存在した時期は時間差がないものと思われる。

土壌（第31～37図、図版26・27）

発掘地区からは6基の土壌が検出された。第16図の遺構配置図を参照。Dで表示されているのが土壌である。

1号土壌（第31図、図版26）

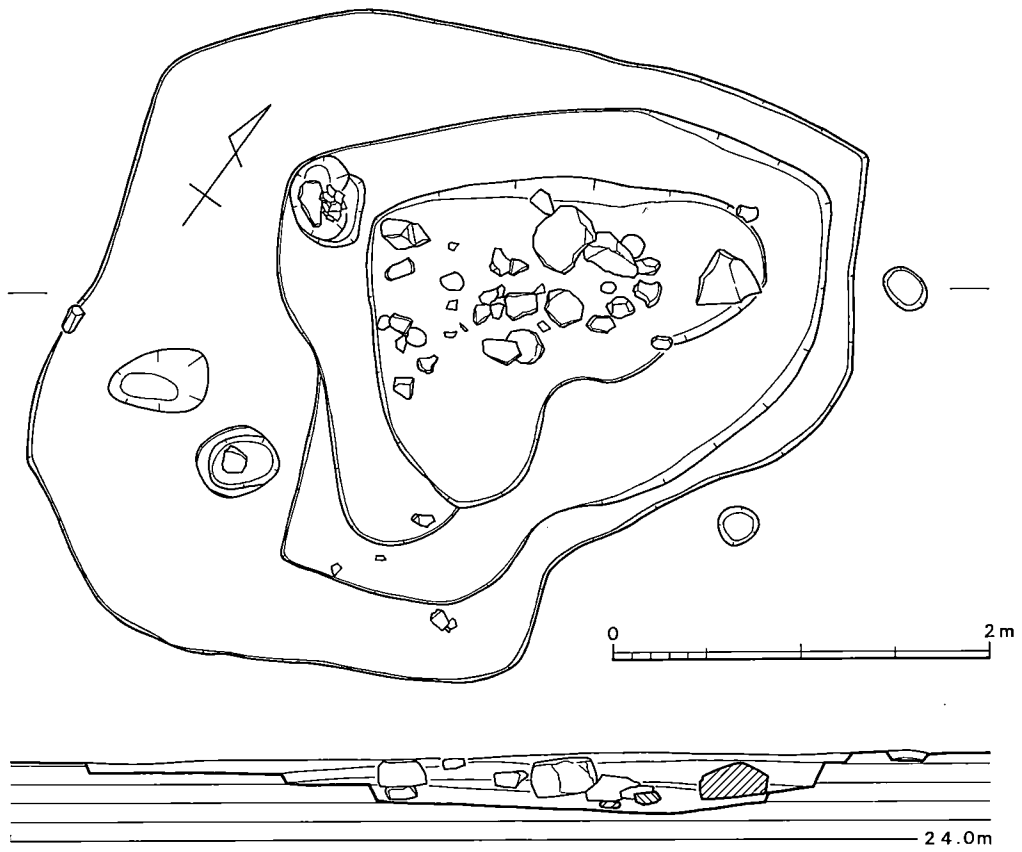
平面形は不整形を呈し、大きさは350cm×410cmで、深さ30cm弱を計測する。遺構は床まで2段となっている。主体部と思われる位置に大小の河原石がみられている。出土遺物は細片が若干検出されているが、図示できるのは1点のみであった。



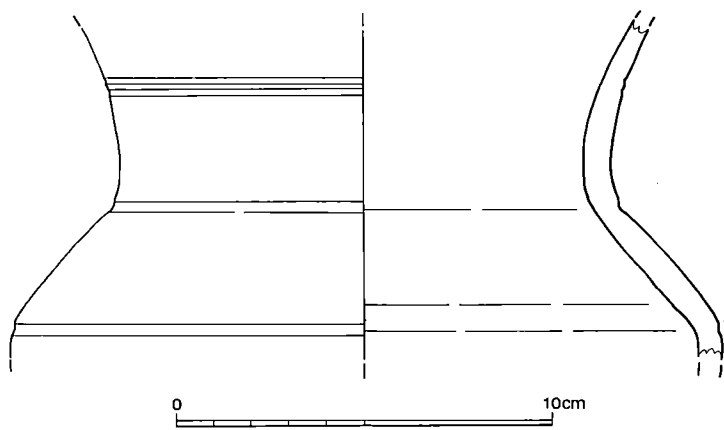
第30図 2・3号掘立柱建物跡実測図(1/60)

出土遺物 (第32図、図版30)

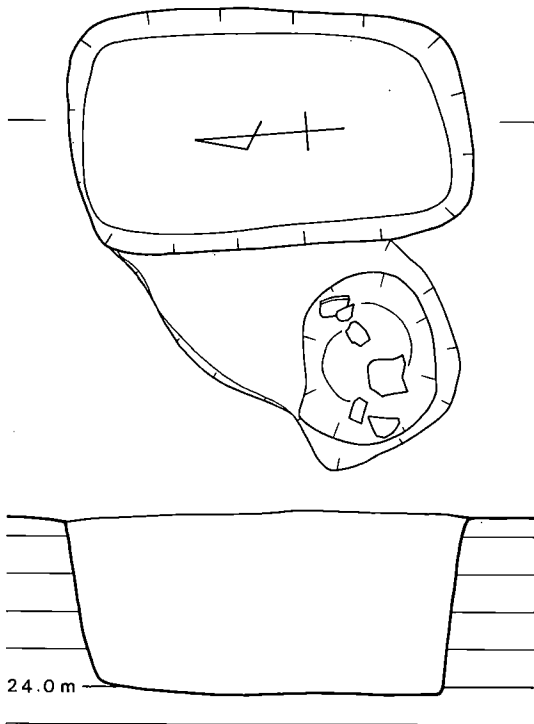
須恵器 (第32図) 長頸壺の頸部破片で、胎土には細粒砂を含み、色調は灰色を呈し、内面は鉄分が付着しているためか灰黄褐色である。器面の調整はナデ仕上げで、頸部には2条の沈線を持ち、胴部上半に1条の沈線を有している。焼成は良でやや軟質である。



第31図 1号土壙実測図(1/40)



第32図 1号土壙出土遺物実測図(1/2)



第33図 2号土壙実測図(1/20)

1号土壙の時期は古墳時代後期である。

2号土壙 (第33図、図版27)

1号土壙の西側にあるもので、平面形は長方形で隅丸である。深さは50cmで、大きさは105cm×65cmである。覆土から遺物が検出されている。

出土遺物 (第34図)

弥生土器 (第34図) ①は複合口縁の壺の口縁部破片で、珍しい器形をしている。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、復原口径は13.8cmである。器面調整は頸部にハケメを施している。器壁があられているため他は不明。焼成は軟質である。弥生後期後半の土器片である。

②は甕の口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色を呈し、復原口径は22.8cmで、焼成は良で、器面の調整は風化が著しいため不明。

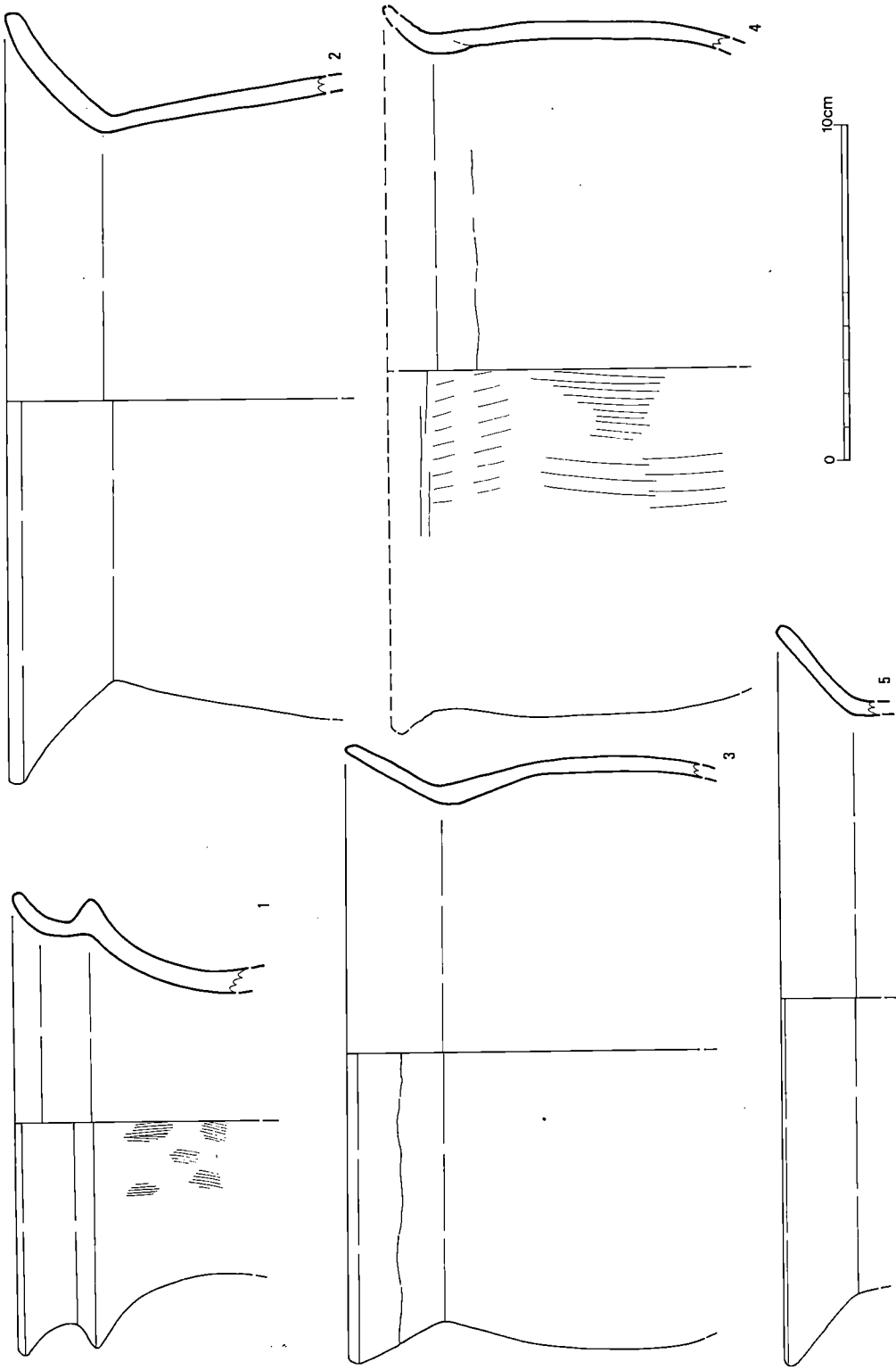
③は甕の口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、復原口径は18.4cmで、焼成は良い。頸部に黒斑がある。口縁部は「くの字」に外反している。器面の調整は風化が著しいため不明である。

④も甕の口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み色調は外面は黒褐色、内面は黄褐色を呈している。焼成は良好で、器面の調整は頸部以下を縦位ハケメで、口縁直下はナデ、内面はナデである。

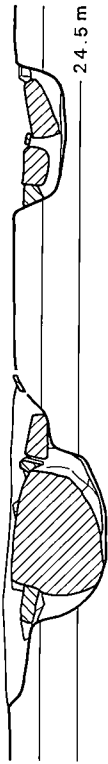
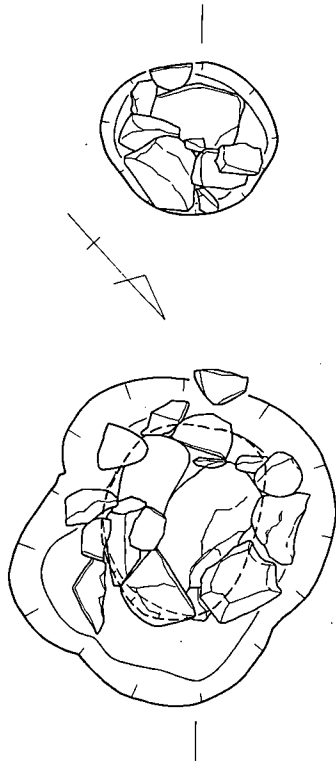
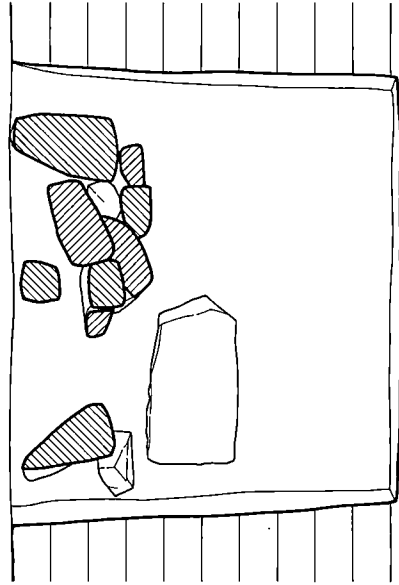
⑤は甕の口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は白黄色で、復原口径は22.0cm、器面の調整は内外とも風化が著しく調整不明である。口縁部は「くの字」状を呈するもので、焼成はあまり良くない。

②～⑤は弥生終末期から古墳時代初頭に位置するものである。一応ここでは弥生土器でまとめてみた。

2号土壙の年代は出土遺物から弥生終末から古墳時代の初頭に位置付けたい。



第34图 2号土墩出土遗物美测图(1/2)



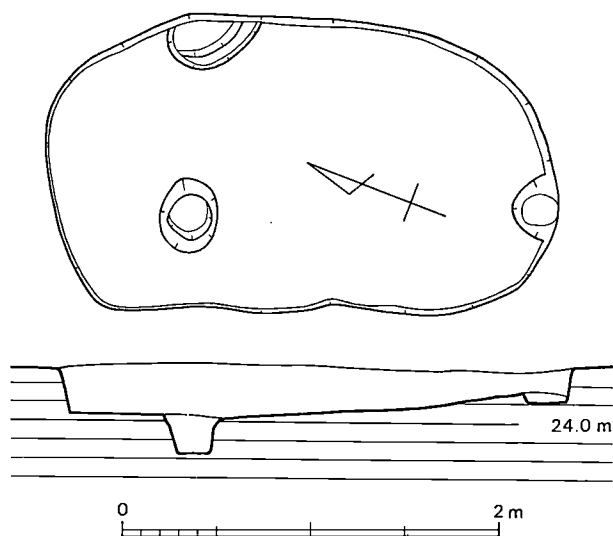
第36图 4号土坑实测图(1/20)

第35图
3号土坑实测图(1/20)

3号土壙 (第35図、図版17)

発掘の南東部にあつて、4号土壙の南側に位置するものである。平面形は正方形に近い長方形を呈し、125cm×104cmで深さ110cmを計測する。素掘りのもので、上面に人頭大の河原石が見られる。組み方は乱雑である。地山の面を掘られているもので、掘る工具は鉄製の道具を使用したものと考えられる。壁は直角に下げられている。床面には湧水が出てくる。

使用目的は水溜めに利用したもので、井戸状のものと考えた方が妥当である。



第37図 5号土壙実測図(1/40)

4号土壙 (第36図、図版27)

3号土壙の北西にあつて、石がつまった不整形の土壙である。遺物の出土は見られず、基礎石として使用されたものである。石の面はほぼ水平に座している。大きさは75cm×95cmで深さ25cmを計測する。小さい方は直径が45cmで、深さ15cm前後である。時期は不明である。

5号土壙 (第37図)

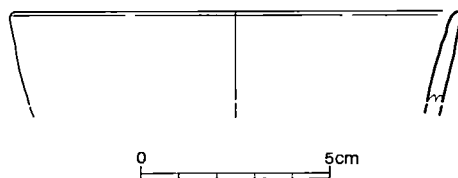
発掘ほぼ中央にあつて、4号溝状遺構が南側をとおっている。平面形は不整形で楕円形をなしている。床面には柱穴が3本みえる。大きさは155cm×265cmで、深さは45cmで、北側が低くなっている。出土遺物はみられず、時期は不明である。

6号土壙 (第16図)

発掘区の南側の一段落ち際ほぼ中央部にあるもので、田畑を造成時の杭列もある。その傍に平面形が円形を呈し、2段掘りのものが6号土壙である。大きさは150cm×180cmで、深さ40cmを計測する。検出された遺物はなかった。時期については不明である。

溝状遺構（第16図、図版17）

発掘区全域に10本の溝状遺構を検出した。その大半は近世から近代にかけての田圃の排水路である。M1～M10の記号で示している。



第38図 1号溝状遺溝出土遺物実測図(1/2)

溝1（第16図）

調査区の下段面にあつて東西方向に蛇行しながら流れているもので、堆積土が相違するもので、溝中より須恵器の破片が出土している。長さ15m、幅30cmと計測する。深さは15～20cmである。

出土遺物（第38図）

須恵器（第38図）溝の中より出土したもので口縁部の小破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄褐色で、復原口径は12.0cm、焼成は良好で器面の調整は両面ともヨコナデである。高台付碗になるもので、時期的には歴史時代（9～10世紀）にはいるものと考えられる。

溝2（第16図、図版17）

溝1の南側にあるもので、前者より高位置にある。長さ3m、幅40cmで、深さ20～30cmで、堆積土は溝1と同じで他の溝のものとは相違する。

時期的には溝1と同じごろに存在したと考えられる。

溝3（第16図、図版17）

6号住居跡と5号住居跡の間にある細い溝で「ハの字」状に残っているもので、長さは10m前後で、幅20～30cmで深さは20cm前後を計測する。出土遺物なしで、溝中の堆積土は溝1・溝2と同じである。時期的には溝1・溝2と同じ時期をあててもよいであろう。

溝4（第16図、図版17）

近世の排水溝である。中央部で直角に屈曲する。残存長は16m前後で、最大幅は60cm前後で深さ10cm～30cmで、北と西側に行くほど浅くなる。出土遺物はみられない。

溝5（第16図、図版17）

溝4に併行するもので、長さ6.5m前後で、幅50cm前後を計測し、深さ20cm～30cmを計測する。近世の排水溝で、堆積土の色は黒色であった。

溝 6 (第16図、図版17)

溝 4 に落ちる溝で、近世の田圃の排水溝である。田圃区画に合って併行になるもので、長さ 23m、幅 50cm 前後で深さは 15～30cm 前後計測する。出土遺物は検出されず。

溝 7 (第16図、図版27)

溝 6 の作り替えたものである。近世の田圃の排水溝である。長さ 12m、幅が 50cm 前後で深さは一定せず。出土遺物なし。東西方向へ流れる。

溝 8 (第16図、図版27)

近世の田圃の排水溝に使用されたもので、平面形は弓状をなしている。長さ 20m で、幅が 50cm 前後である。作り替えたものと考えられる。溝 9 の排水をたすけるものである。

溝 9 (第16図、図版27)

近世の田圃の排水溝で、東西方向に流れている。長さ 50m 以上で最大幅は 70cm 前後である。深さは一定はしていない。増水した分は溝 8 に流すと考えられる。

溝 10 (第16図、図版17)

近世の田圃の排水溝で南北方向の溝で、現在も使用されていた。角田八幡宮の横の田圃の側溝につながるものと考えられる。長さ 10m、最大幅 100cm 前後を計測する。深さは一定せず、南が高く北へ行くほど低くなる。出土遺物はみられない。

柱穴群 (図版17、第16図)

柱穴は多く検出されているが、遺物が出土したものを上げてみる。第16図の中で P 番号で示されているものがそれである。北側の P 番号は若くて、南に行くほど大きくなる。遺物には小破片が多く図示できるものを上げてみた。

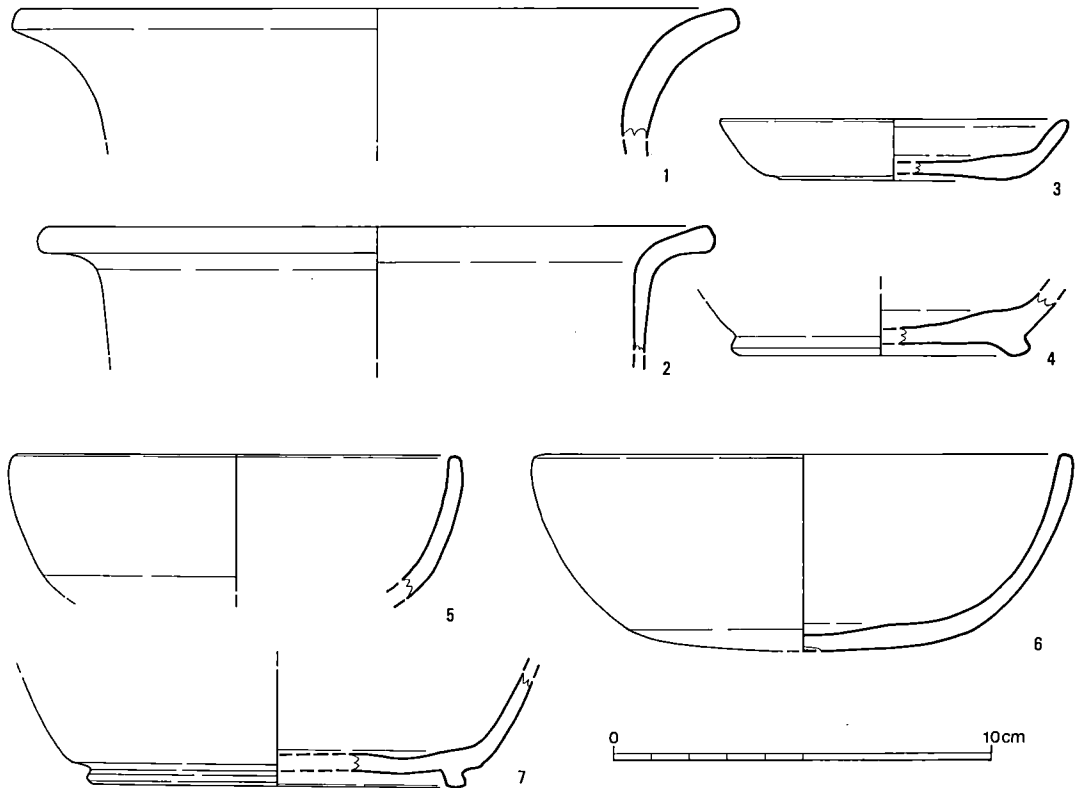
しかしながらその大半の柱穴から遺物は出土していない。

出土遺物 (第39図)

柱穴から出土したもので、新しいものから古いものまで雑多である。柱穴を P で表示する。

①は土師器の壺形土器の口縁部破片である。P 8 から出土したもので、胎土に細粒砂を含み、色調は橙褐色を呈し、器面の調整は風化著しく調整不明である。焼成はややあまい。復原口径は 18.8cm である。

②は土師器の甕の口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は



第39図 柱穴中出土遺物実測図(1/2)

内外ともに風化が著しく調整不明である。焼成は良である。復原口径は18.0cmである。P73から出土。

③は土師器の小皿の破片で、P65から出土したものである。胎土に細粒砂を含み、色調は黄橙褐色で復原口径9.2cmで、器高は1.7cmである。底部はヘラ切りである。器面の調整はナデである。焼成は良好である。

④は須恵器の碗の高台の部分である。P65付近で胎土に細粒砂を含み、色調は灰色を呈し、復原底径は8.0cm、器面の調整はヨコナデと底部ナデである。

⑤は土師器の杯の口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、復原口径11.8cm、器面の調整は内外ともに風化著しく調整不明である。焼成はあまり良くない。P56より出土している。

⑥は土師器の碗の破片で、P51より出土したもので、復原口径は14.4cm、器高5.4cmである。胎土に細粒砂を多く含み、色調は茶褐色を呈し焼成はややあまり。器面の調整は内外ともに風化が著しい。

⑦は須恵器の高台付椀底部の破片で、P 7より出土している。胎土に細粒砂を含み、色調は灰色を呈し、器面の調整はヨコナデを中心とするナデ仕上げである。復原底径は10.0cmで、焼成は良好である。

時期的には雑多であるが、次のように考えている。①・②は古墳時代前半ごろ。④・⑦は須恵器の編年ではⅥ期で7世紀後半ごろ。⑤・⑥は8世紀ごろ。③が一番新しく9世紀～10世紀ごろと考えたい。

しかしながら、小破片をもって復原したものであるから若干の疑問はあるものと思うが一応ここで提示しておこう。



第40図 文化課椎田事務所周辺

3. 小 結

団後遺跡の第2次調査で判明したものを箇条書きにしてまとめてみたい。

1. 第2次調査では縄文時代晩期から近世までの5期の遺構が検出された。
2. 検出された遺構の内容は、竪穴住居跡では縄文時代晩期住居跡が2軒、古墳時代初頭期が2軒、古墳時代後半から奈良時代にかけての2軒である。
3. 掘立柱建物については11世紀後半代1棟と12世紀代が2棟検出された。
4. 土壌は弥生終末から古墳時代の初頭と古墳時代後期のもの、時期不明のもの3大別される。
5. 溝状遺構は、北端部のものについては歴史時代の9～10世紀のものと近世の溝に分類できる。その大半は現在までつづく。
6. 多くの柱穴を検出したが、時期的に雑多である。柱穴中より出土した遺物について、時期差があった。

以上が、第2次調査の発掘調査の成果である。発掘調査・整理報告作業に協力された方々に感謝しつつ、筆を置く（H6. 2）。

野帳より

島根大学理学部の時枝助教授が南極学術調査夏隊に参加された。その時の土産品として、南極の氷を送っていただいた。それを囲んで宴を開いた折に2句

南極の

氷をなめて

夏日かな（久仁 89.4/20）

南極の

氷は泣くや

琥珀海（久仁 89.4/20）

遺構実測図の中に書き記録す一句

かみまつり
御神祭

雨も一時の

休みかな（久仁 89.05）

中村角田八幡宮にて

第3章

団後遺跡の総括

第3章 団後遺跡の総括

前章までが、第1次調査と第2次調査の発掘調査の記録である。

それぞれの調査については、総括されて、若干のまとめが示されている。

多くの新しい、また確実な事実が明らかになった。その中には、いままでの考えられていた事柄と異なった事実や、将来さらに検討を必要とする問題を提起することとする。

前章までのことを踏まえながら若干の考えを述べて、まとめとした。

1. 団後遺跡の景観

当該遺跡の歴史的な景観を考えると、自然地理学的には、角田川の中流域の右岸に位置し標高は25m前後の河岸段丘に位置し、左岸の中村石丸遺跡よりも、5mほど高位置にある。

レベル的には、現在角田八幡宮の境内地と同じ標高で、神社の境内地の西側横を通っている。

角田八幡宮付近のことについて記してみると、日本地名大辞典の福岡県（註1）の中には、角田（豊前市）国見山東麓、角田川流域に位置する地区である。鎌倉一戦国期に見える荘園名、豊前国築城郡のうち、「宇佐大鏡」に「本御庄十八箇所」の一ヶ所として「角田庄四至く東限大塚 南限山 西限上松 北限海」と見える。同書によれば当荘は、平安中期の長元4年上毛・下毛・田川3郡に散在する神領封田85町5反228歩と交換して成立している。下って天文13年6月20日、大内義隆は大府宣をもって「築城郡角田庄内五町五段余地」を平盛定に宛行っている。（甲宗八幡神社文書 註2）

この荘園の中心が角田八幡宮付近である。

団後遺跡と微視的にみると（付図2を参照）標高の高位置に弥生終末期の竪穴住居跡で両辺にベッドをもっているものである。その住居跡を囲むように直径8m前後の略円形の排水用の周溝がめぐっている。この周溝によって、弥生後期中葉の方形竪穴住居跡が中央部で切られている。この排水溝は北側の田圃の段落（崖面）で切られていた。

住居跡の雨水の排水としての機能を、もたされたものと考えられているが、若干疑問をもつ。それは住居跡の床面からの屋根高さや傾斜である。5m以上の高さをもたないと雨水の排水としては考えることはできない。私的な考えであるが、周溝は雨水等の排水を考えるよりも、その住居跡に住む人のテリトリー（家と庭を含めた地域いわゆる地所）と考えた方が妥当性がある。雨水・湧水等排水をも含むもので、屋根よりも雨水排水としては疑問をもつ。周溝から出土した遺物をも含めて、立地及び住居跡の構造等を考慮して、周溝の解釈については今後としたい。

しかしながら、報告者が記述されたことについて再度考察する必要性を帯びるものと考えて

いる。

遺跡としては、縄文期の住居跡は下位置にあって、中世の遺構面については、弥生時代の面より、下位となっている。このことは角田八幡宮との関係を考慮することが必要である。

発掘の全域には古墳時代後期の生活遺構が広がっているわけである。住居跡は7軒となる。一村落の一部を構成しているわけである。

他にたたら跡が見られることは、中世期頃のものと考えられ、13～14世紀の中世期頃の角田は荘園経済の中で、角田八幡宮を中心とするものの中に含まれて、多くの掘立柱の建物が存在したことが発掘調査によって理解される。

角田八幡宮の創建は、鎌倉時代のはじめ頃で、それを裏付けるように、棟札、貞永4年銘(1235年)が豊前市指定有形文化財となっている。(註3)

それ以後、この地域は宇都宮氏の領国として成立していく。地頭職から守護大名へ、そして戦国大名へと移向の時期でもある。その中の一部に団後遺跡が存在し、中世荘園の一部で、鎮守としての角田八幡宮の位置付は大きい。

註

註1 『角川日本地名大辞典40 福岡県』角川書店 1988

註2 註1に同じ

註3 『福岡県文化財目録』福岡県教育委員会 1991

版 圖



1) 団後遺跡全景 (東から)



2) 団後遺跡全景 (南から)



1) 1区全景 (東から)



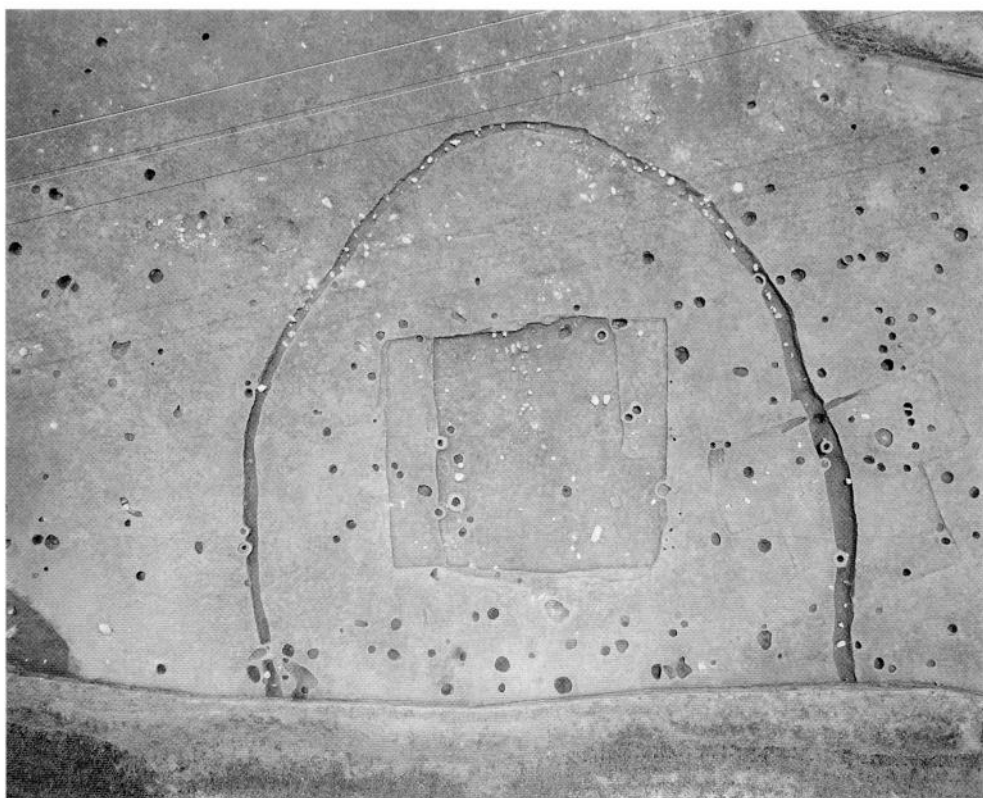
2) 2区全景 (南から)



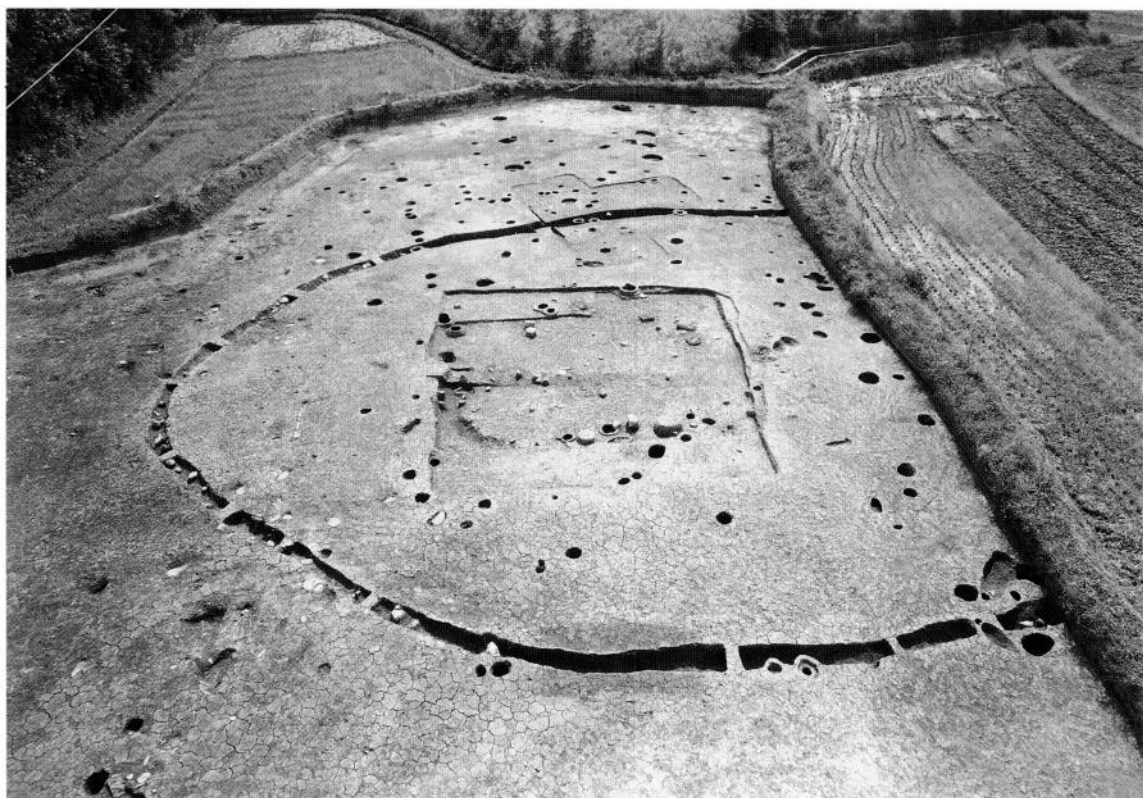
1) 3区全景 (真上から)



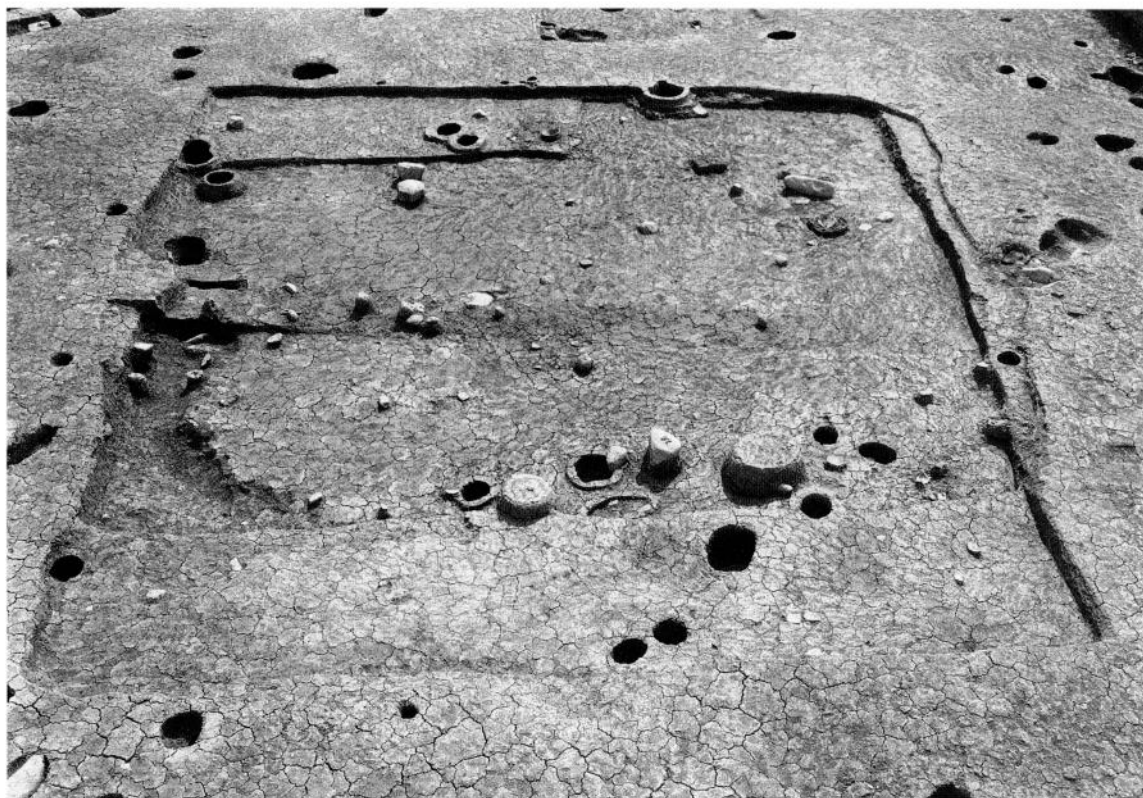
2) 4、5区全景 (真上から)



1) 1号竪穴住居全景 (真上から)



2) 1号竪穴住居全景 (東から)



1) 1号竪穴住居全景 (南から)



2) 1号竪穴住居と作業員のみなさん (南から)



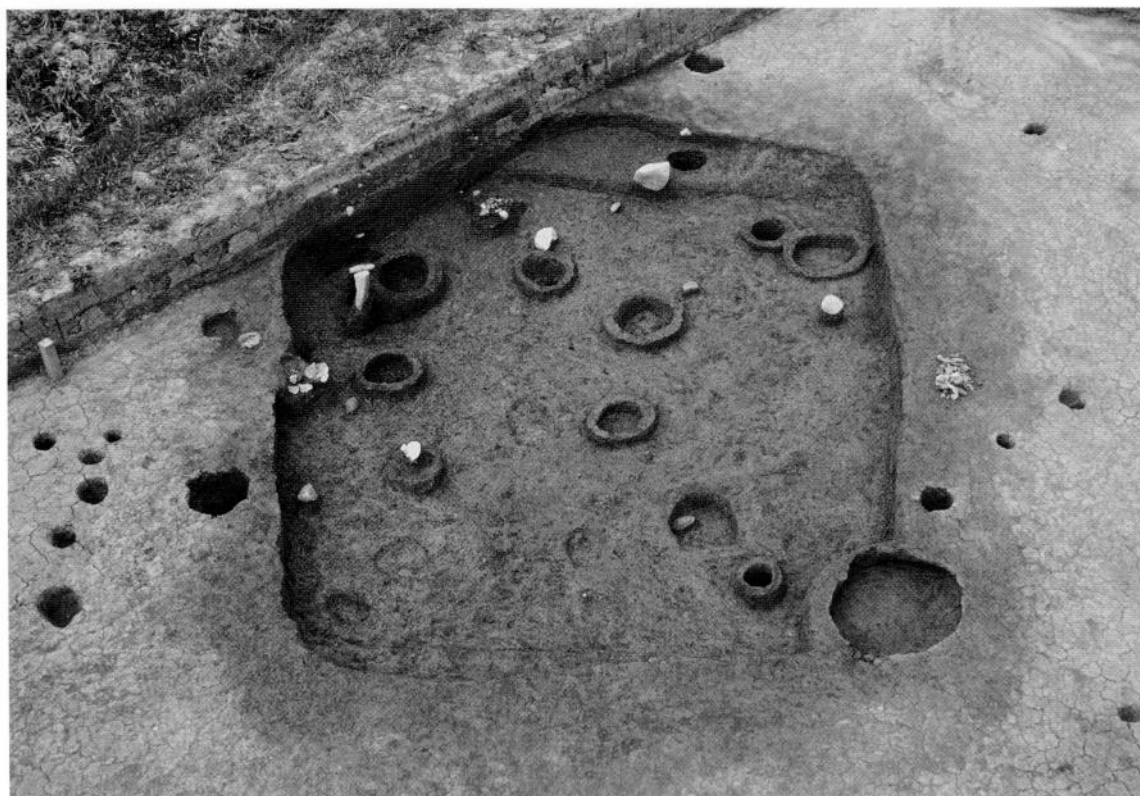
1) 2号竖穴住居全景 (南から)



2) 3号竖穴住居発掘作業風景 (西から)



1) 3号竖穴住居全景 (南から、完掘前)



2) 3号竖穴住居全景 (南から、完掘後)



1) 1号土壙全景 (南から)



2) 1号土壙遺物出土状況 (南から)



1) 2号土壙全景 (南から)



2) 気球写真撮影準備風景



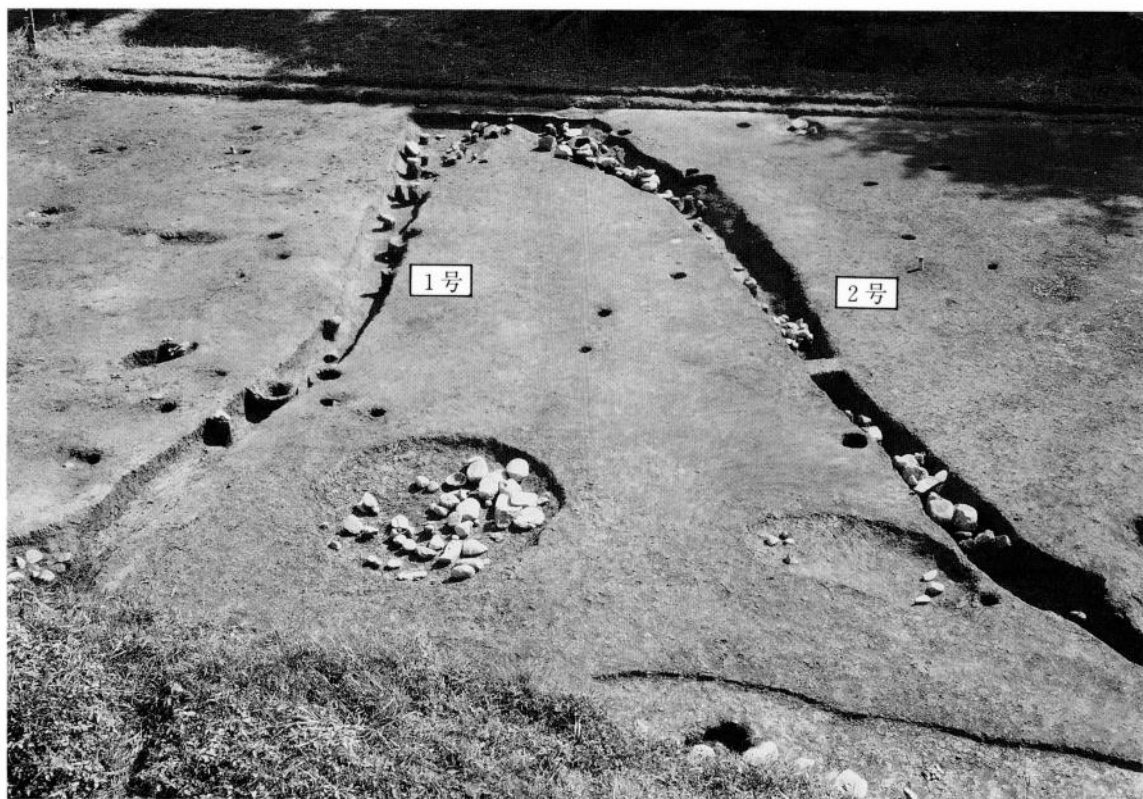
1) 3号土壙全景 (南から)



2) 3号土壙近景 (西から)



1) 1号掘立柱建物全景（東から）

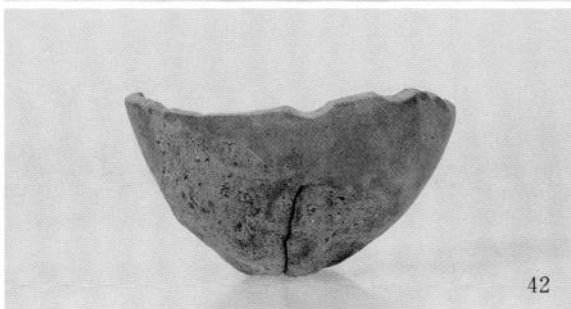


2) 1号及び2号溝状遺構（東から）

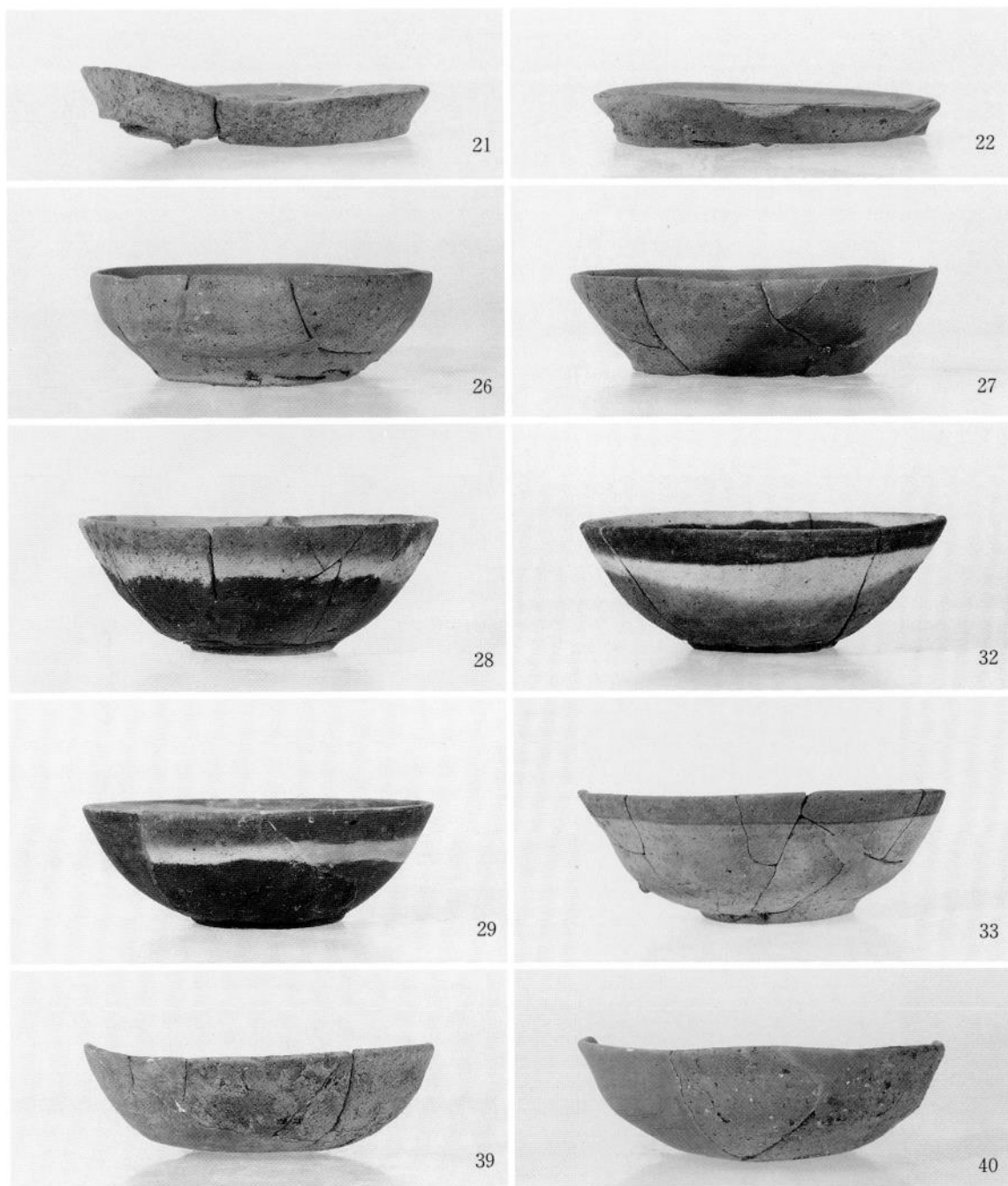


団後遺跡出土土器①
(番号は図面番号と一致する)

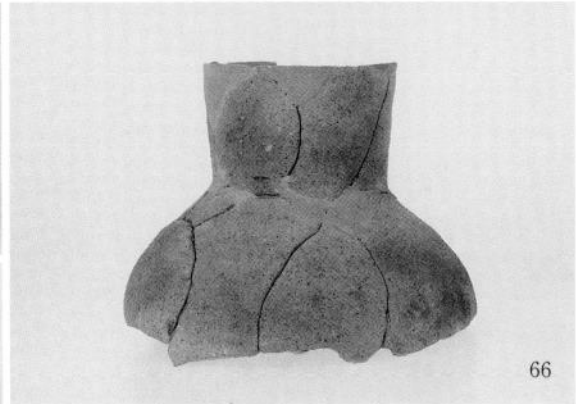
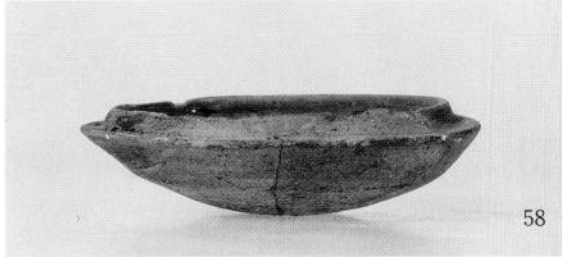
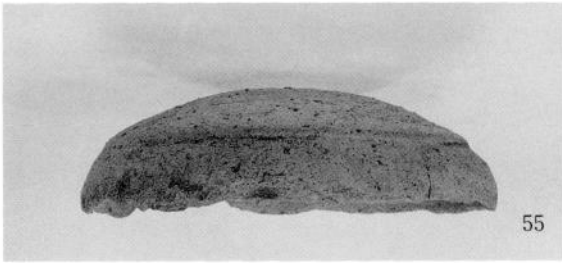




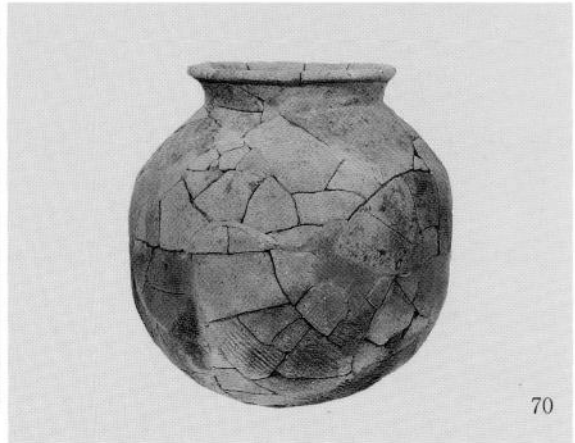
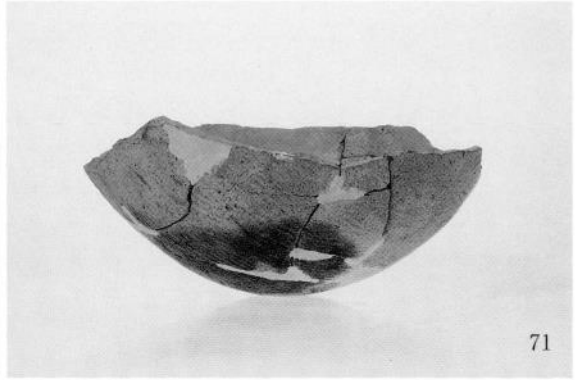
团後遺跡出土土器②



団後遺跡出土土器③



団後遺跡出土土器④



団後遺跡出土土器⑤



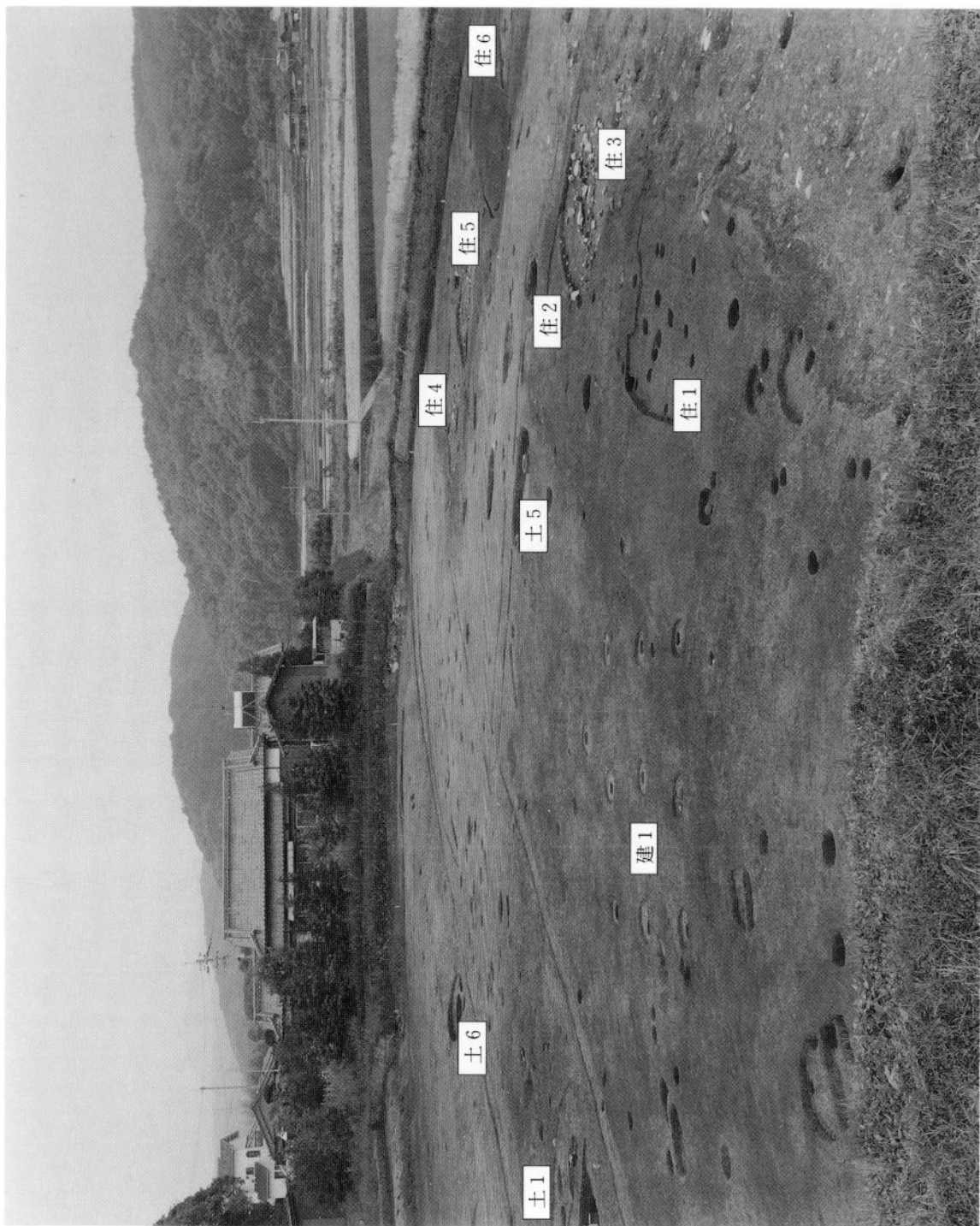
角田小学校6年生見学風景



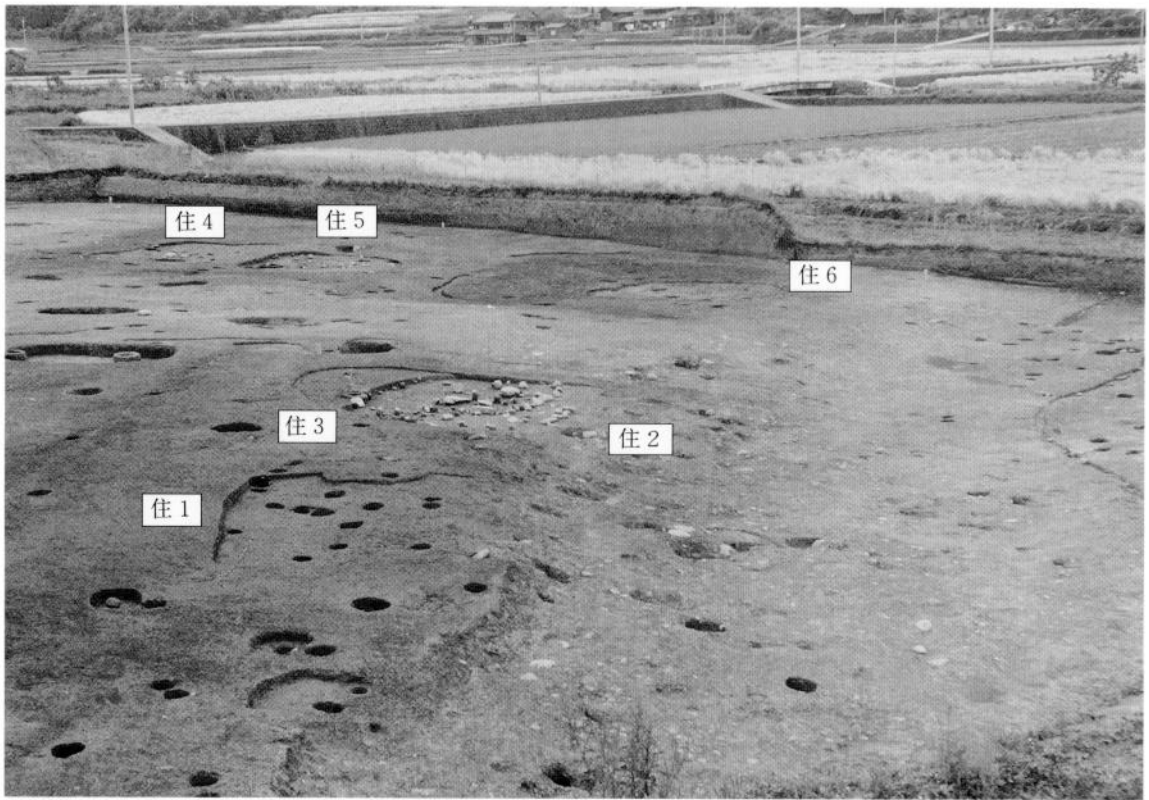
1) 発掘区全景 (南西から)



2) 発掘区全景 (南から)



遺構全景 (東から)



1) 住居跡群全景



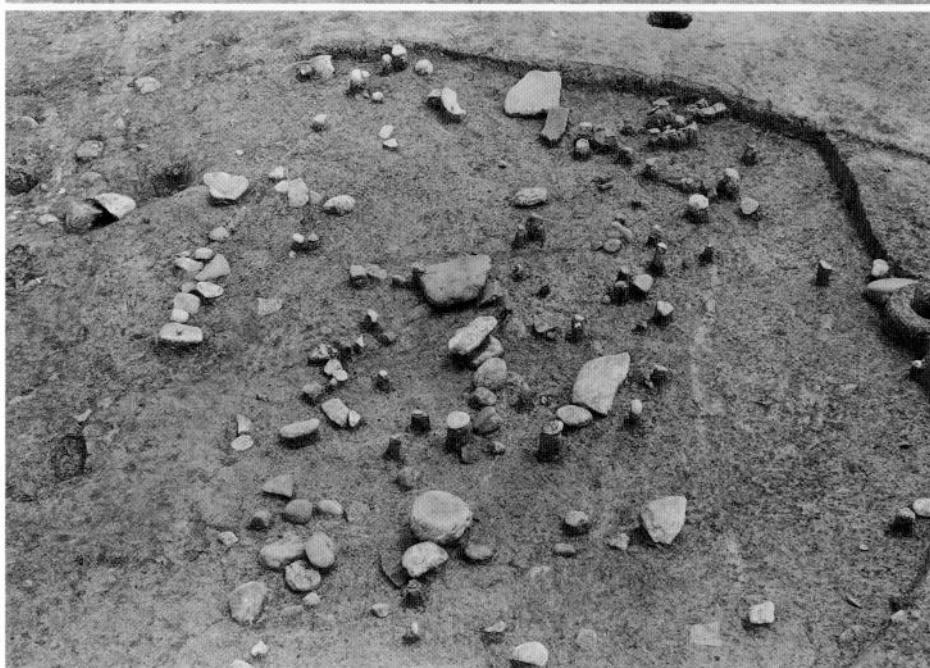
2) 1号住居跡 (西から)



2号住居跡（西から）



1) 2·3号住居跡 全景



2) 遺物出土状況



3) 2号住居跡近景



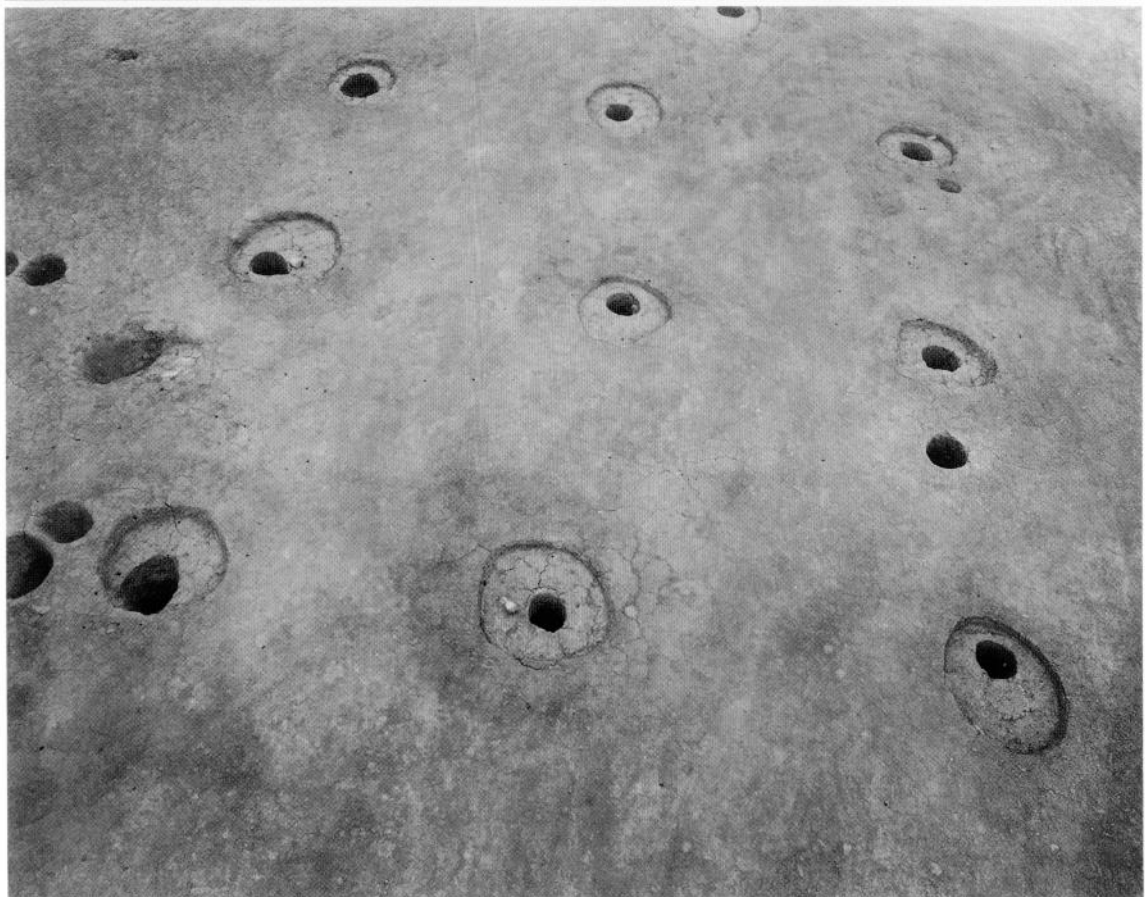
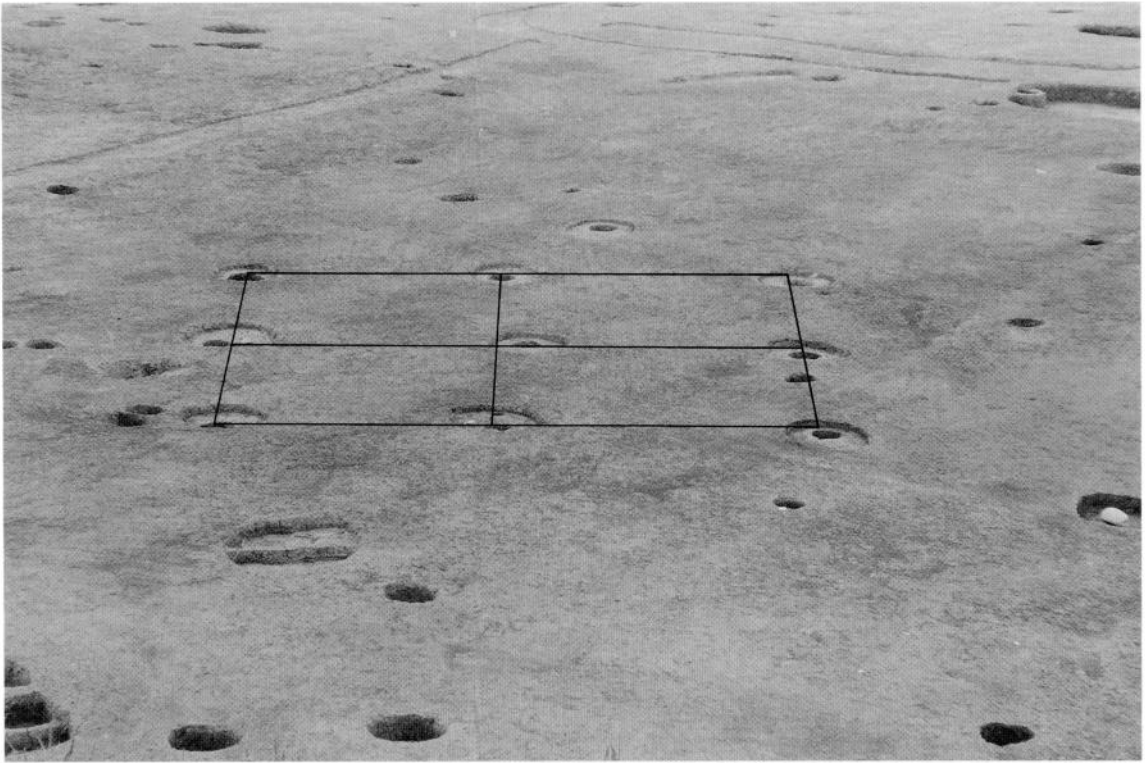
西側住居跡群全景



1) 4・5号住居跡全景 (南から)

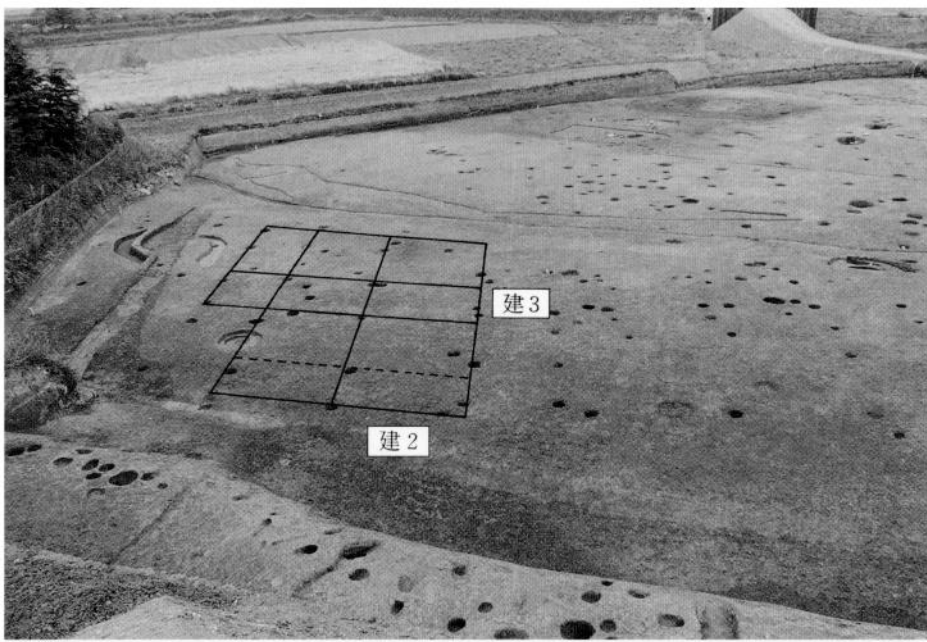


2) 6号住居跡全景 (東から)



1) (上) 1号建物遺構全景 (東から)

2) (下) 1号建物遺構近景 (東から)



1) 2・3号建物遺構全景



2) 土塙・溝状遺構全景



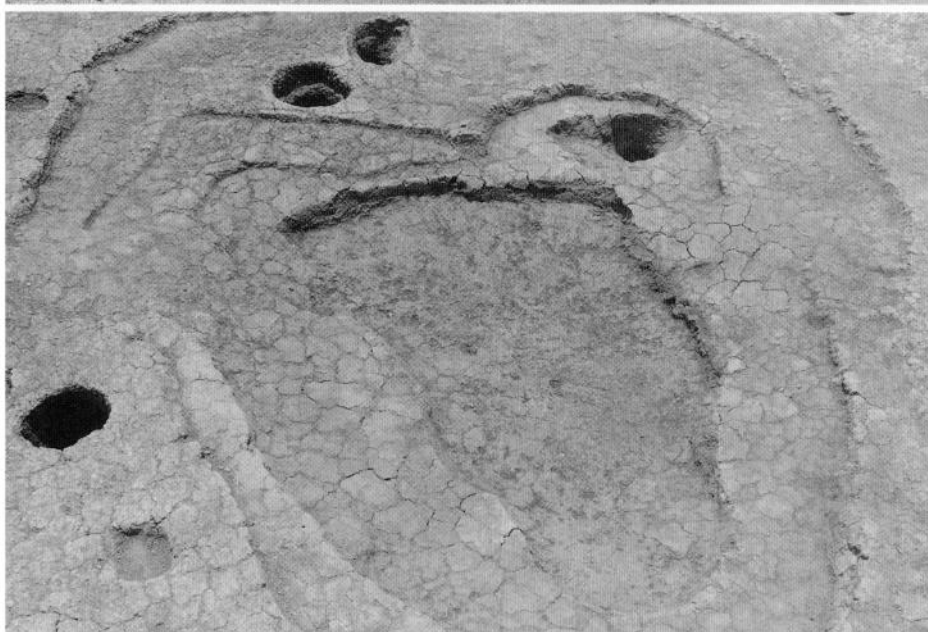
3) 溝状遺構近景



1) 1号土坑全景



2) 同上
畦をはずした状況



3) 同上
浮き石をはずした状態



1) 7号溝状遺構 (排水溝?) (北から)



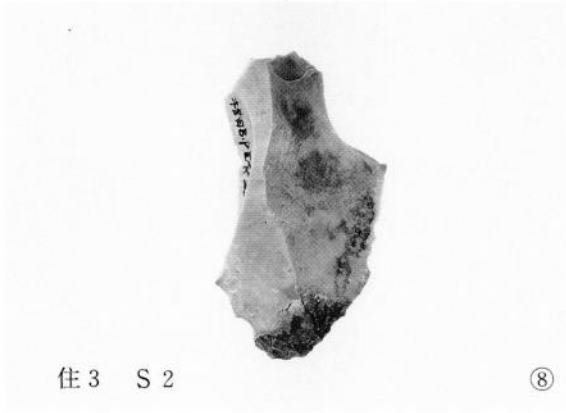
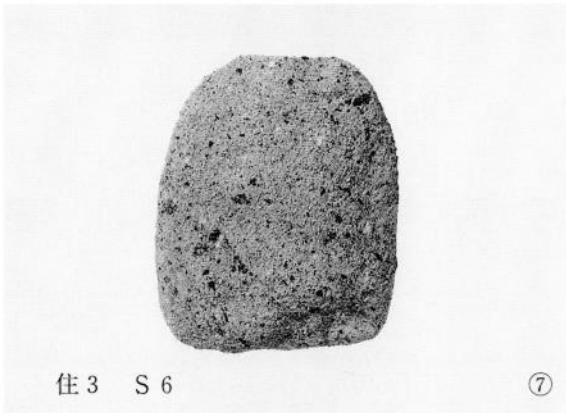
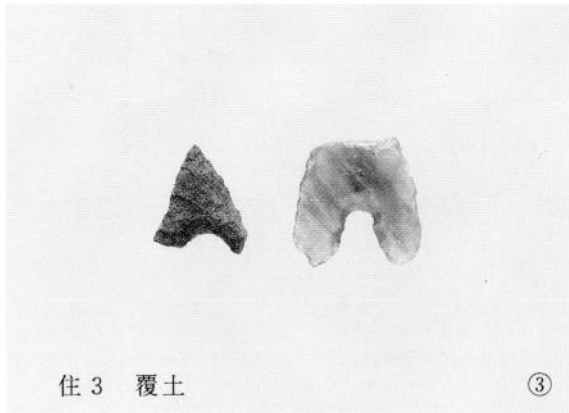
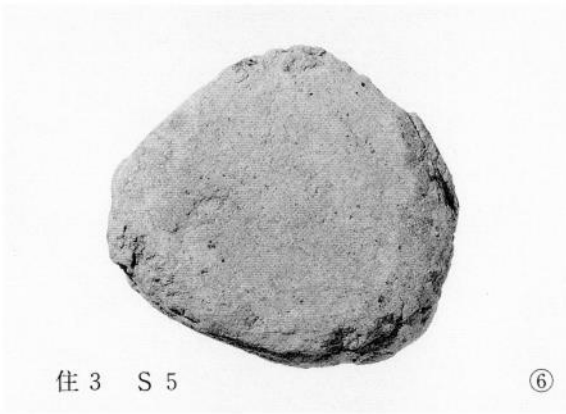
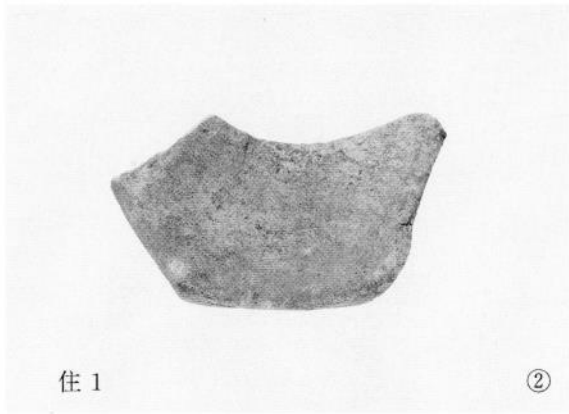
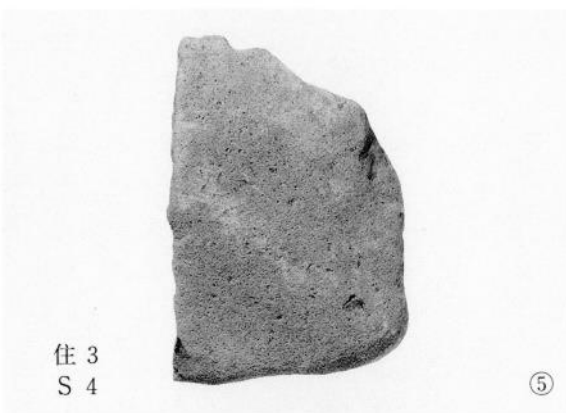
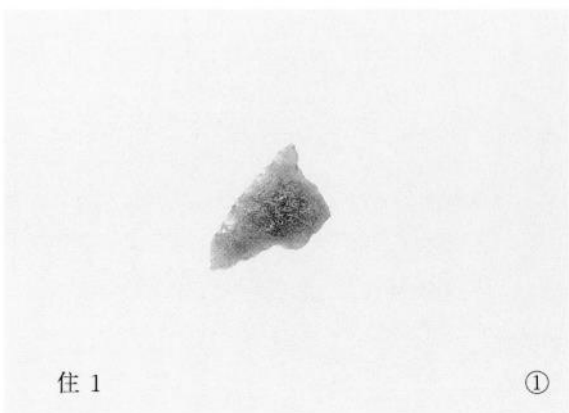
2) 柱穴75号遺物出土状態 (北から)

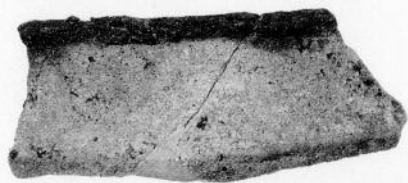


3) 2号土壙 (井戸?)



4) 4号土壙 (石を除いた状態)





住 3

①



住 3

⑤



住 3

②



住 3

⑥



住 3

③



住 3

⑦



住 3

④



住 3

⑧



住 4 (12)

①



H 1 土師器

⑤



住 4 (11)

②



H 2・3 内黒土師器

⑥



土城 1

③



P 51 土師器

⑦



P 65 土師器

④

出土遺物③

第4章

西一町田遺跡の調査

第1節 はじめに

第2節 遺構と遺物

1. 遺構

2. 遺物

第3節 おわりに

第4章 西一町田遺跡の調査

第1節 始めに

当初、椎田バイパス第5地点と仮称していた西一町田遺跡は、築上郡椎田町大字上の河内1192-1番地外に所在する。この付近は英彦山・犬ヶ岳から放射状に派生する丘陵が周防灘に接するところで、まとまった可耕地に乏しく、小河川が開析した細く長い谷が幾筋も入りこむという相似た地形が続いている。

発掘調査対象地は現水田地から丘陵に移行する変換点にあり、この斜面を登り詰めた地点に先年報告を行った頭無古墳群が位置していた。現状は荒地となって一面に藪が生い茂っていたが、小規模な畑地を数段にわたって開墾しており、そのためか遺構面は深い部分で約1mの深度を有していた。発掘調査対象面積は約1,000㎡である。

なお、現水田は試掘調査の結果遺構・遺物を検出できなかったために調査地から除外した。また、調査区の北西を限る道路の法面にあるいは横穴墓が存在する可能性があるとして試掘を行おうとしたが急傾斜であり、道路に悪影響が生じる恐れがあったために確認を行っていない。しかし、調査区内に横穴墓を思わせるような遺構は無く、地盤も軟弱であり、存在しないであろうと考えている。発掘調査は平成元年10月5日より作業員を投入し、同11月4日にすべてを撤収して終了した。

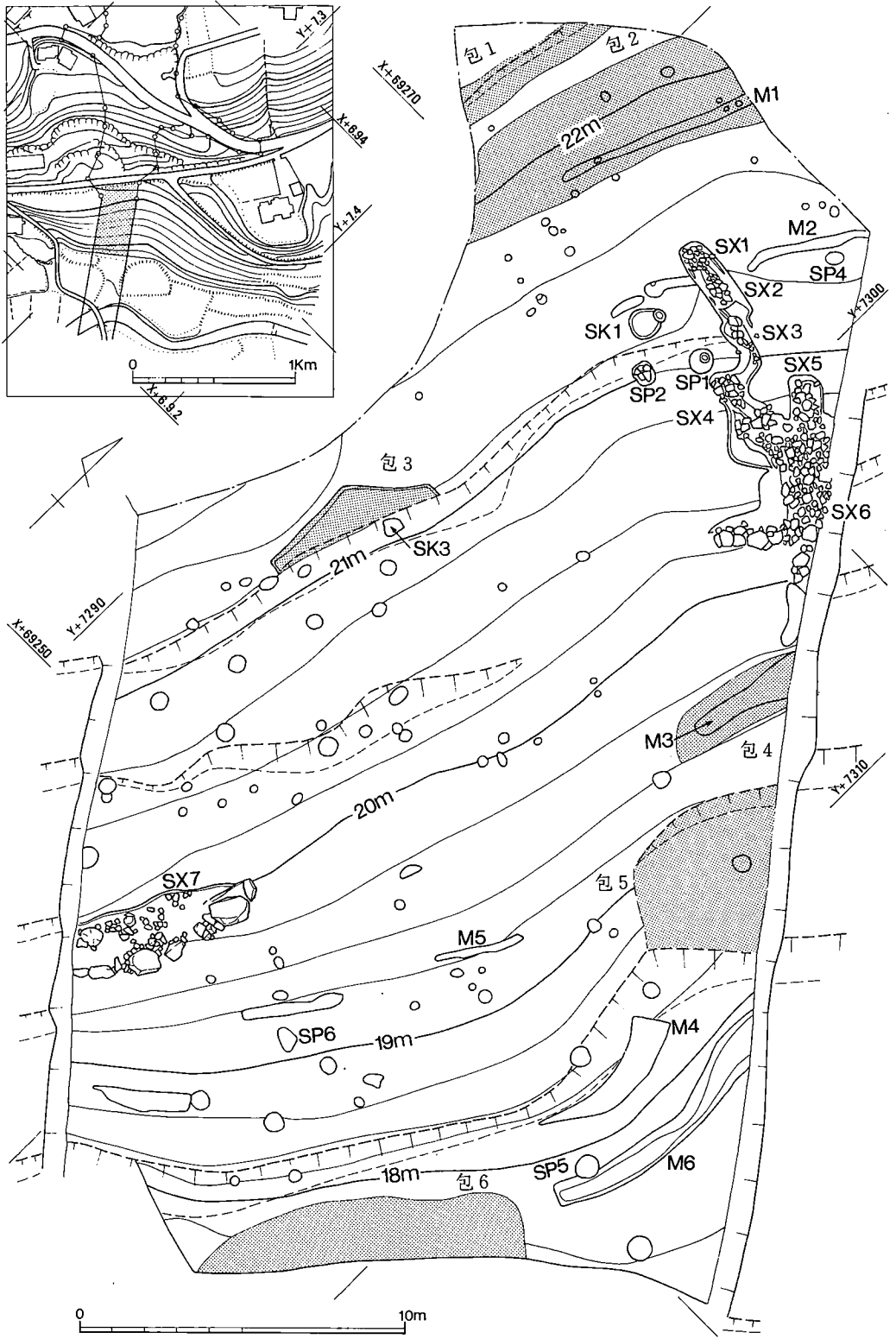
第2節 遺構と遺物

1. 遺 構

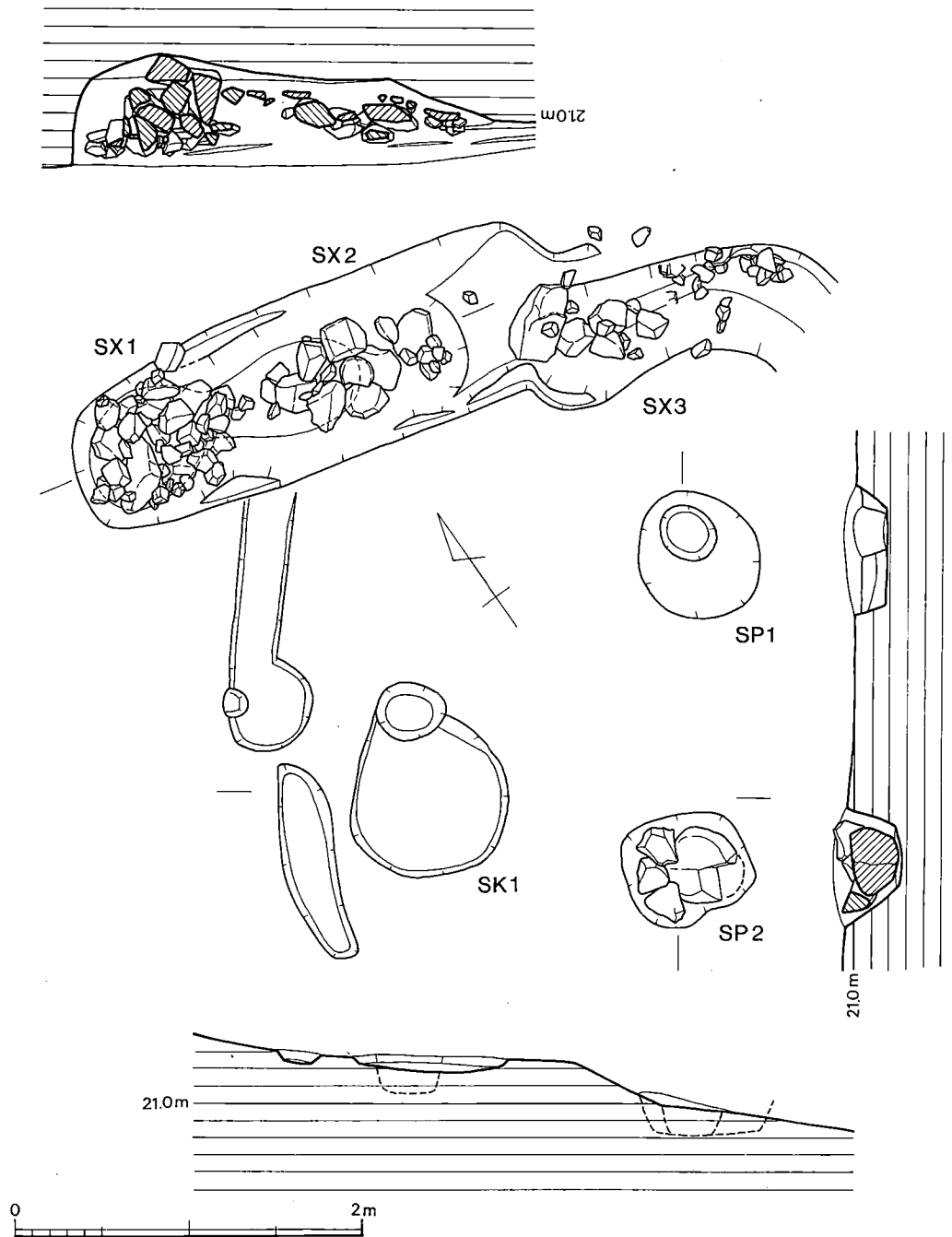
検出した遺構には数基の石組・柱穴・小規模な溝等がある。また、部分的に残存していた包含層にも各々番号を付した。石組遺構はまとまりを判別できないものもあるが、便宜的にSXの略号を冠した。

SX1 (図版2、第42図)

SX2と同じ掘形内にあるものの、石組が途切れることから別の名称を与えた。石組は直径0.8m内外の円形に配されており、下位により大きな石を置くが、規則性は認められない。深



第41図 遺構配置図 (1/200)



第42図 集石遺構 SX 1 ~ SX 3 ・祠状遺構実測図 (1/40)

さは0.6mである。掘形は隅丸長方形を呈する。東端の浅い部分を除いた規模は、幅1.0m、長さ2.3m強を測り、東辺を除く三辺の壁はほぼ直に立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土が一様に堆積していた。

SX 2 (図版 2、第42図)

SX 1の東側、同じ掘形内にあり、本来は一連の遺構であったと思われる。0.6~1.0mの間に大小の石が重なるが、SX 1のように積み上げた痕跡は看取できなかった。

SX 3 (図版 2、第42図)

SX 2の東に位置する。SX 1・SX 2の掘形に連続する掘形内にあるものの、形状は整わない。大小の石は乱雑にあって、まとまりはない。遺構とするにも躊躇を覚えるものである。

SX 4 (図版 3、第43図)

これも径1mほどの集石である。掘形はSX 3および後述するSX 6と一連となるが、それらとの間は掘削されたと判断できるものではなかった。石組は他と同様、大小の礫を詰め込んでいた。深さ0.4mである。

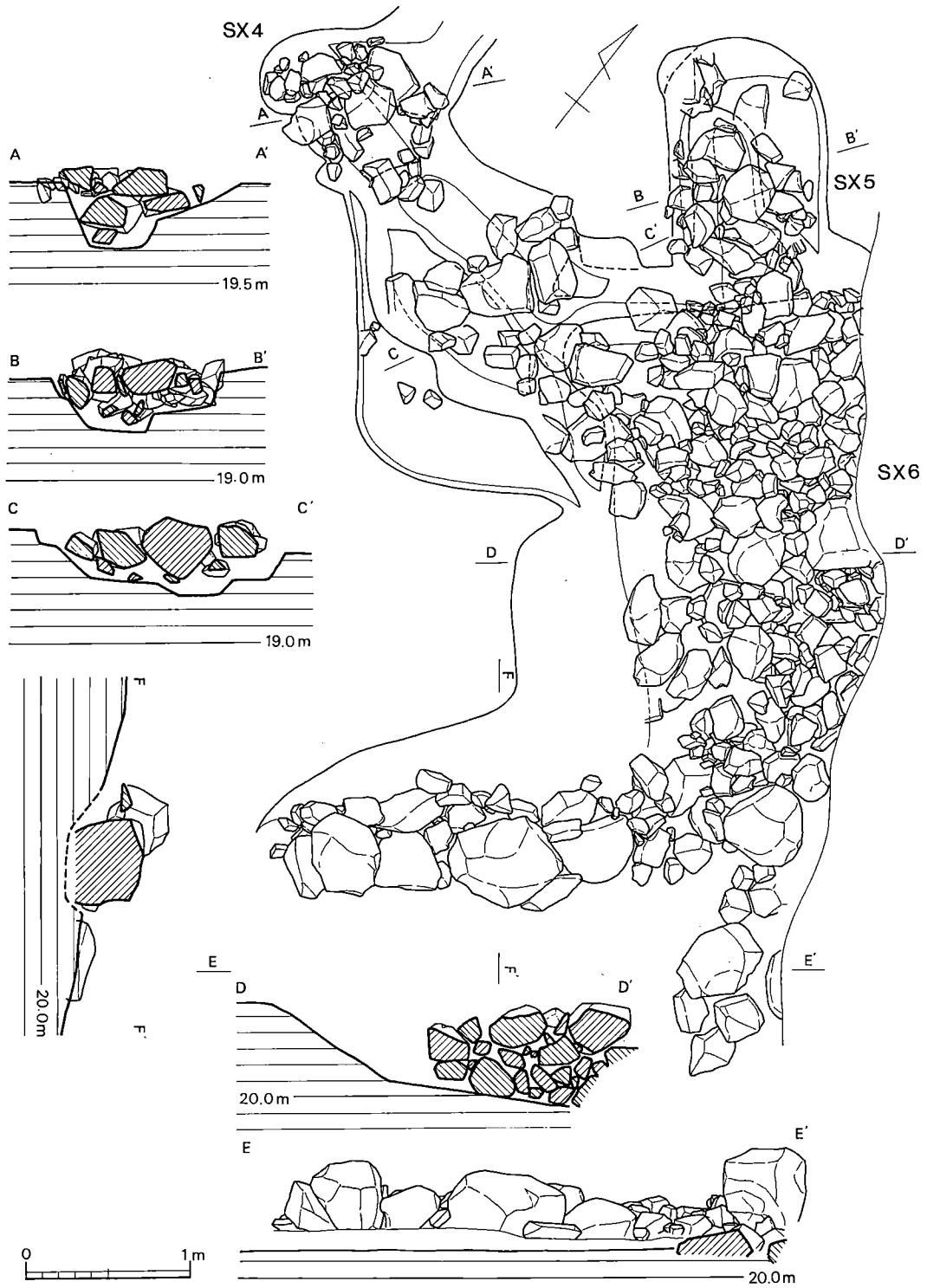
SX 5 (図版 3、第43図)

石組はSX 6としたものとほぼ一連の様を呈するが、掘形が1.1m突出することから別個の遺構とした。確認できた掘形は幅1m、深さ0.5mで西南隅がもっとも深くなっている。石材もその部分に集中する傾向が窺える。なお、SX 6の底はSX 5の最深部より0.2m低くなる。

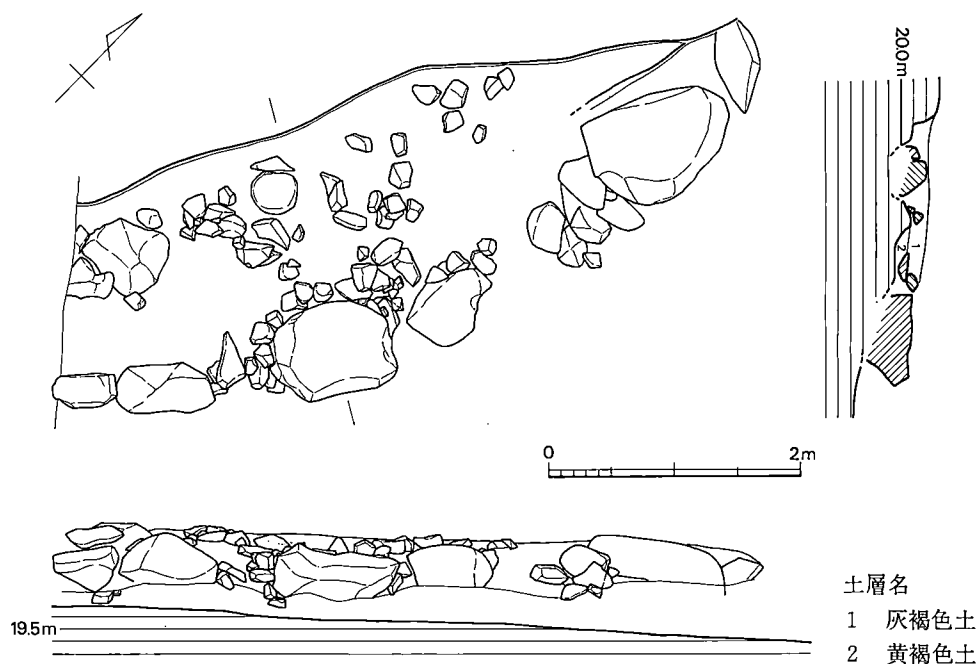
SX 6 (図版 3・4、第43図)

大きな土坑状の窪地に大小の礫を詰め込んだ部分と、北東~南西方向に並ぶ石垣状の部分とからなる。集石部は等高線に直行する方向で3m、並行する方向で2m弱を検出したが調査区外へと続いている。深さは約0.5mを測る。石材の間に土器の小片が若干入っていた。

石垣状の部分は3m強を検出した。他の集石遺構に見られない大型の石材を据え、高位斜面一背面に根固めを行っている。等高線と平行な位置にあるが、測量図(第41図)を見て判るように現状の畑地境界とは若干のずれがある。仮に現畑地境界に伴う遺構とした場合にはその途切れ方が不自然であり、畑地開墾以前の遺構としたほうが妥当であろう。なお、石垣状部分の背面埋土は茶褐色上、集石部分の埋土は暗褐色土と異なっており、元来異なる遺構であったことが推測できる。



第43図 集石遺構 SX 4 ~ SX 6 実測図 (1/40)



第44図 集石遺構 SX7 実測図 (1/60)

SX 7 (図版 5、第44図)

調査区南端近くに位置する石垣状の遺構である。長さ約 6 m の規模を検出し、幅は 2 m を測る。前面に巨石を配し、背面に小礫を置くが、あまり集中していない。これも現状の畑地境界に添わず、北端部に特別な配列はなかった。

その他の遺構

若干の柱穴、小規模な溝状遺構を検出している。遺物は乏しく、かつ建物等を構成する柱穴は確認できていない。等高線とほぼ平行に主軸にとって 2～4 個が並ぶように見える柱穴は、いずれも埋土の状況から判断して畑地開墾以降に掘削されたと考えられるものである。以下若干について説明する。

土坑 SK 1・柱穴 SP 1・SP 2 (図版 2、第42図)

SK 1 は直径 0.9 m、深さ 0.1 m 弱の浅い土坑で、通有の黒褐色を埋土とし、土器小片数点を出土したが、特徴をつかめるものではなかった。

SP 1 は直径 0.7 m、深さ 0.2 m の浅い柱穴であるが削平を受けていると思われる。内部の柱

当たりの径は0.3mである。

SP2はやはり径0.7m、深さ0.4mほどの規模を有する。中に4個の石を配置するが、中央部はやや低く、外周が高くなっている。石の配列状況は礎板とするにふさわしいもので、小さな凹凸は柱の荷重によるものと考えられよう。また、礎板がほぼ遺構検出面に位置する点は削平がかなりの規模であったことを推測させる。

上記2基の柱穴の中心距離は1.9mを測り、ほぼ1間である。古記録、遺物等の傍証を欠く恨みがあるが、調査時には直観的に鳥居状の遺構を推測させた。先の土坑SK1を小祠を祭った痕跡と憶測するならば解釈は辻褃が合う。

土坑SK3 (図版5)

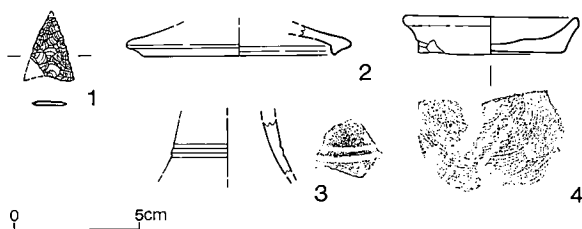
先の柱穴SP1・SP2とほぼ同レベルで、9m南にある。一辺長0.5m前後の歪な矩形平面プランを有し、深さは0.2mである。埋土に赤褐色の焼土・木炭の小片を多く含み、炉跡を思わせたが壁は変化していなかった。そのほぼ中央部、床面よりやや浮いた状態で須恵器高杯のかなり大きな残片が出土した。ほぼ6世紀後半の時期を示すものである。

遺構の性格について、西側に存在する包含層3とした遺構が問題となる。同じく包含層とした他の遺構が傾斜部分にあってまさしく包含層と呼ぶにふさわしいのに対して、包含層3は立地が異なり人為的な掘り込みのように思える。深さ0.1m前後と浅いこと、柱穴が定かでないこともあって確信は持てないが、住居のような性格も考えられる。

2. 遺物

整理箱(パンケース)一杯弱の遺物が出土している。大部分は包含層中の遺物で、打製石鏃1点の他は須恵器の甕・土師器皿等が主体である。しかし、遺物量が乏しいことが災いして行方不明となってしまった。幸いにも試掘時の採集遺物が別扱いとなって手元にあるので今回はその紹介を行う。現在所在不明の遺物については見つかり次第椎田バイパス関係の報告書に掲載したい。

石鏃(1) 残存長2.5cmの暗灰色チャート製の打製石鏃で、石材にはやや透明感がある。先端と基部の一方を欠く。身の厚さは2mmと薄い。縄文時代後期頃の製品である。



第45図 出土遺物実測図(1/3)

須恵器杯蓋（2） 復原口径7.6cmを測る残片。小さなかえりを有しており、おそらくつまみを伴っていたものであろう。7世紀前半に比定できよう。

高杯（3） これも小片。中位に2条の凹線を付す。脚部が極度に短くなるタイプであろう。7世紀前半頃に属するものである。

土師器皿（4） 約3/4が遺存する。ほぼ平らな底部には回転糸切り痕とともに板状の圧痕が残り、体部は短く外上方に延びる。単純に法量を太宰府で示された編年案^{註1}と比較すれば14世紀頃に相当し、西一町田遺跡に比較的近く、同じ旧「豊前国」に位置する宇佐市弥勒寺^{註2}の調査成果でもやはり14世紀の出土遺物と合致する。

第3節 おわりに

以上に発掘調査で得た資料を記してきたが、若干のまとめを行って終わりとしたい。

集石遺構は礫の間に古墳時代に属する可能性のある須恵器等を交えていたものの、その性格、築造時期ともにはっきりしないのが実情である。ただ、明らかに地山を掘削しており、かつ埋積していた礫も地山に含まれる風化したものとは異なっており、意図的に営まれたものと判断されるのみである。この遺跡の尾根線上には先年報告を行った頭無古墳群が位置しており、ここでは古墳時代後期に属する住居跡も確認されている。したがって、集石遺構中の須恵器は山頂からの流れ込みの可能性が高いと考えている。

焼土・炭を出土した土坑SK3も性格は把握できていないが、頭無古墳群中に住居跡が確認された点と併せるならば、一連の遺跡であったと思われる。

中世の遺物が検出されたものの、該期の遺構は特定できなかった。しかし本遺跡周辺は長元四（1031）年に成立したという宇佐八幡宮「角田荘」の範囲に属している。この遺跡の字名もそれとの関連を思わせるものである。本遺跡の南東1kmに満たない位置にある角田八幡神社は「角田荘」の鎮守として勧請されたものであり、正応二（1289）年から慶應三（1867）年にいたる10枚の棟札は豊前市指定文化財となっている。

註1. 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」（『九州歴史資料館研究論集』4、1978年）

2. 大分県立風土記の丘歴史民俗資料館「弥勒寺」（『大分県立風土記の丘歴史民俗資料館報告書』第7集、1989）

圖 版



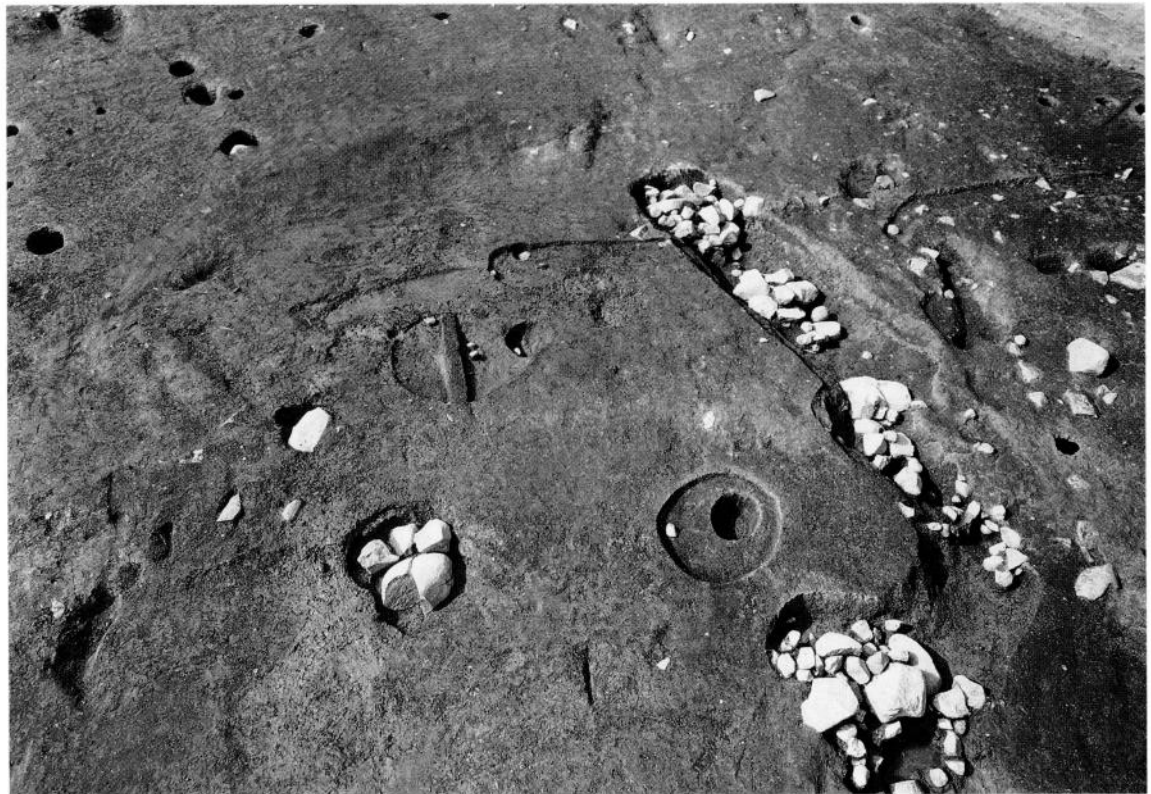
1) 調査後全景 (北西から)



2) 調査後全景 (南東から)



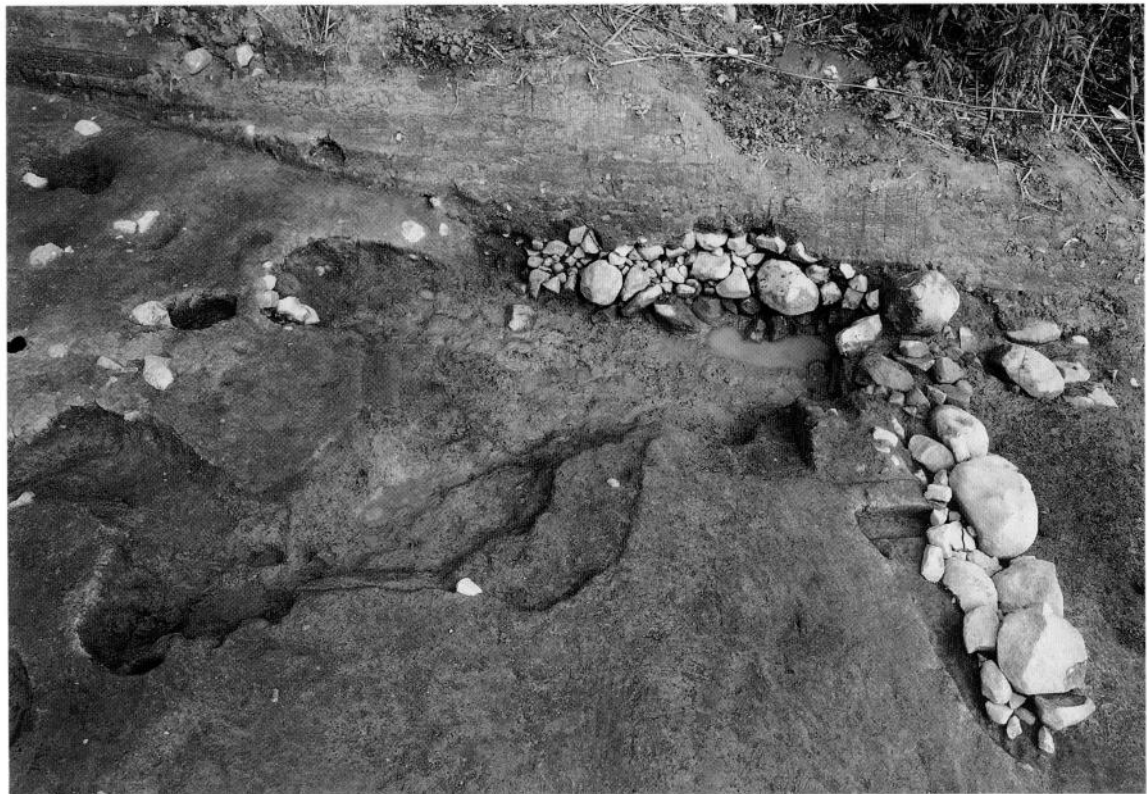
1) 集石遺構SX1～SX6 (西から)



2) 祠状遺構 (東から)



1) 集石遺構SX 4～SX 6 (南西から)



2) 集石遺構SX 4～SX 6 (南西から)



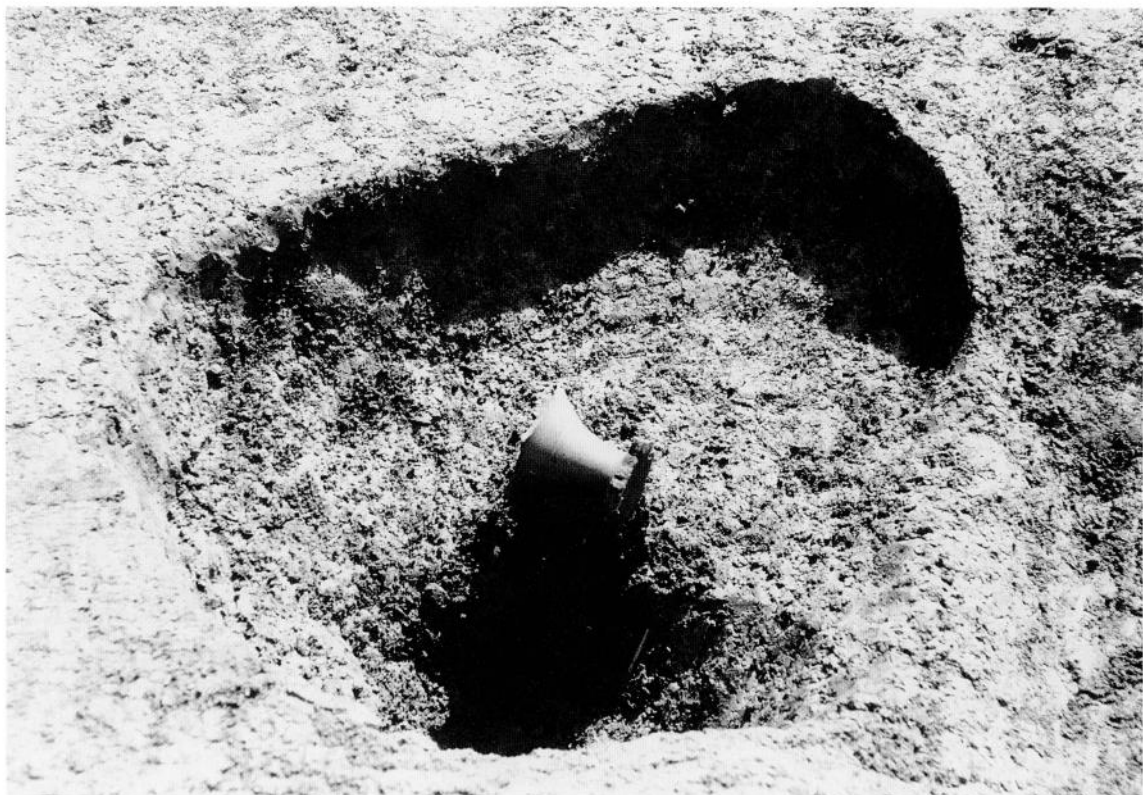
1) 集石遺構 S X 6 (南東から)



2) 集石遺構 S X 6 遺物出土状態



1) 集石遺構SX 7 (南東から)



2) 土坑SK 3 (南東から)

第5章

炭山遺跡の調査

第1節 はじめに

第2節 遺構と遺物

1. 遺構

2. 遺物

第3節 おわりに

第5章 炭山遺跡の調査

第1節 はじめに

ここに報告する炭山遺跡は、豊前市大字松江603-1・4・5、605-2、同大字中村1099-2、1098-3等の地番に所在するが、主たる遺構の位置する地名をとって遺跡名とした。

この遺跡のある丘陵は、英彦山山塊から豊前市・築上郡に多数延びる低丘陵の一つで、眼下に豊前海を望む高所にあり、当初の仮遺跡名を椎田バイパス第8-B地点と呼称していたものである。分布調査では近世墓かと思われる石組遺構が露出するのみで、周辺の試掘調査でも他の遺構は確認されていなかった。したがって、本調査も石組遺構を中心に開始したが、その過程で土塁状遺構に気付いて伐開範囲を拡張、現況の測量を行うとともに確認調査を実施した。

調査対象面積は約1,800㎡で、発掘調査は平成元（1989）年11月10日に着手、同年12月8日に終了した。

第2節 遺構と遺物

遺構としては現状で確認できる石組遺構・土塁状遺構、そして掘削後に検出した溝状遺構があり、遺物は若干が出土している。

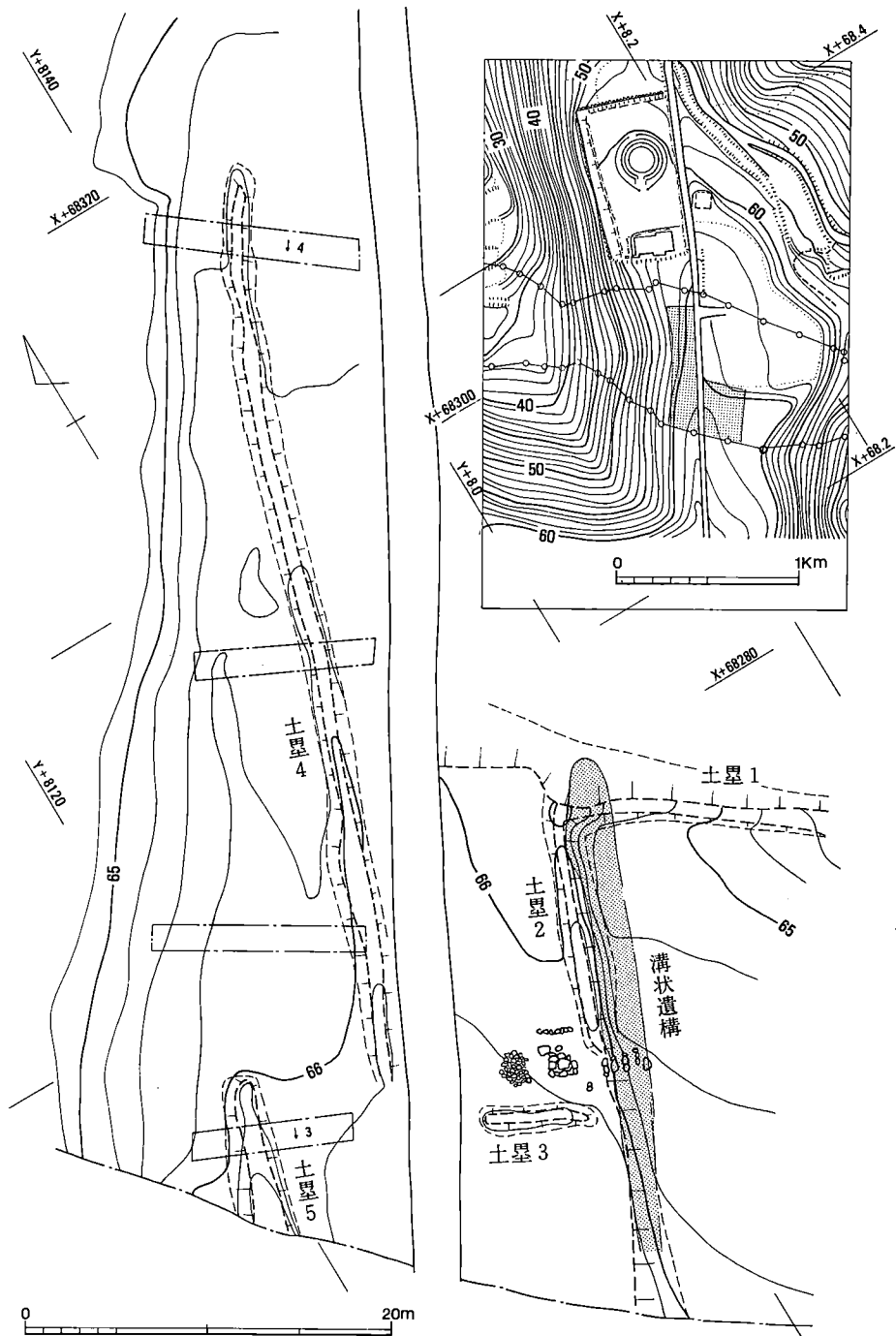
1. 遺 構

石組遺構（図版1～3、第47図）

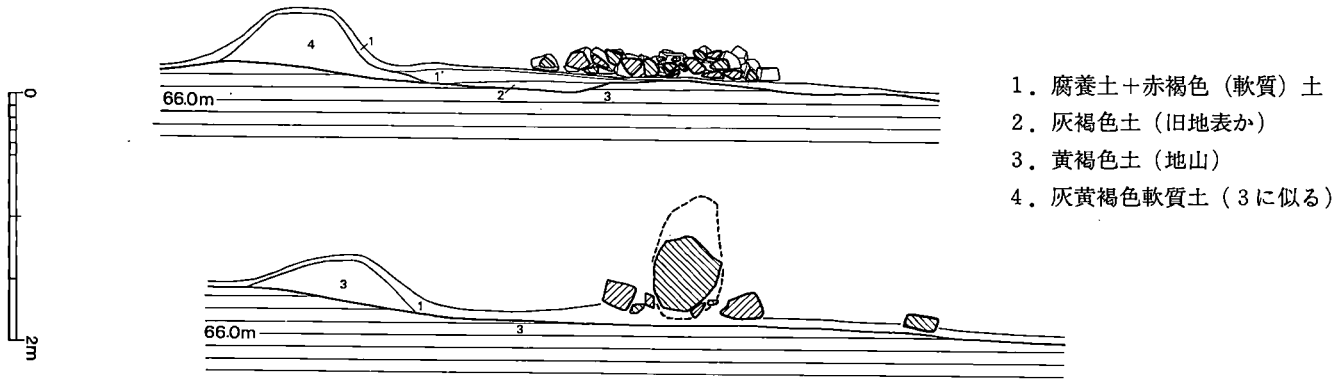
当初、近世墓と推測していたものであるが、調査の結果何等の下部遺構も確認できなかった。大きく5つの部位に分かれることから各々に説明を付す。

石段 比較的大きな自然石を並べて5段を設けるが、顕著な掘り込みを有しない。幅は約1m前後で、段差は下2段が0.1m、上の2段が0.2mを測る。最上段は基壇状石組の正面に取りつく、主軸はずれる。

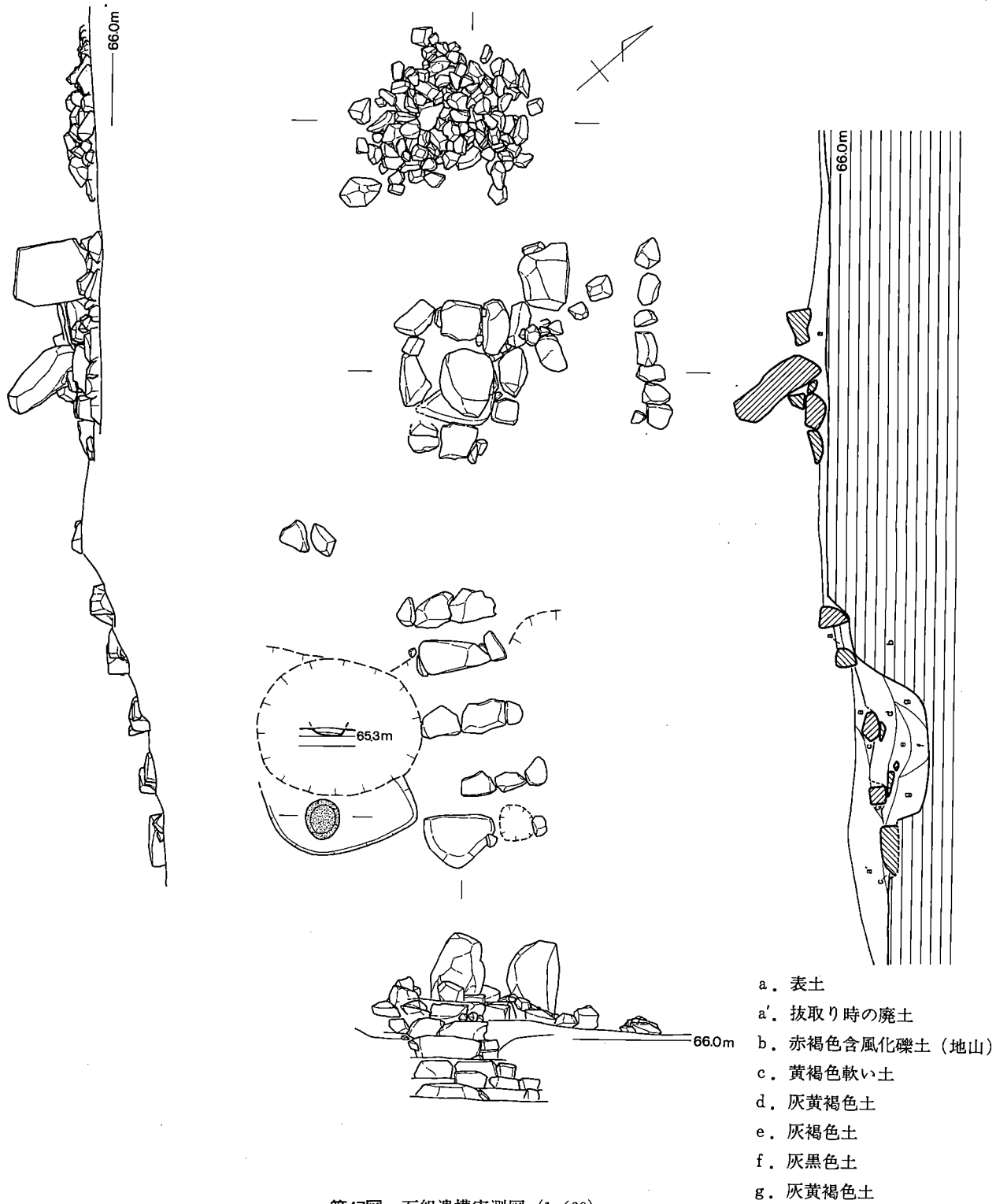
基壇状石組 中央に、平滑な面を南東に向けて高さ1m弱の柱状の自然石を立て据えるが、



第46図 現況測量図 (1/400)



- 1. 腐養土+赤褐色（軟質）土
- 2. 灰褐色土（旧地表か）
- 3. 黄褐色土（地山）
- 4. 灰黄褐色軟質土（3に似る）



- a. 表土
- a'. 抜取り時の廃土
- b. 赤褐色含風化礫土（地山）
- c. 黄褐色軟い土
- d. 灰黄褐色土
- e. 灰褐色土
- f. 灰黒色土
- g. 灰黄褐色土

第47図 石組遺構実測図 (1/60)

それはすでに大きく前傾していた。その立石の周囲に根固めと装飾を兼ね合わせたような方形石組を行う。石組の間には木株が入りこんでその一部がやや動いているが、全体の様子は窺え、一辺1.2mの正方形に自然石を配し、上面をほぼ揃えている。南東辺のみは1石で構成しており、その前面に拝石があることと石段の存在からみて明らかに正面を意識している。

なお、この石組の北隅に接してもう一つの自然石立石がある。平滑な面は北東方向に向き、背面が丸みを帯びることからこの正面は北東方向に求められよう。この立石と基壇状石組は相互に軸を揃えるが、方位に規制されてはいない。

集石 直径2m弱の不整円形に乱雑に集められた状態であり、構成する石の多くは拳大ないしは人頭大の自然石である。実測図に見るように必ずしも積み上げられたとも言えない状況で、意味は推し量れない。集積の下層に一部入りこむ赤褐色の軟質土はまったく締まりがなく、また混ざりもないなどからみて新しい時期に掘削した地山土を放置したと思われる。

列石 基壇状石組の北東にあり、1.9mの長さの石の並びを検出している。現況ではほぼ露出しており、全体が遺存しているとは考えられない。この石列は石組から1m強の位置にあるが、石組の南にもほぼ1mの距離を隔てて2個の同大の石材が存在するからである。後者の石材はわずかに2個ではあるが、北東辺の列石と直交する位置にあるように見えることから、本来は両者は一連のものであったろう。

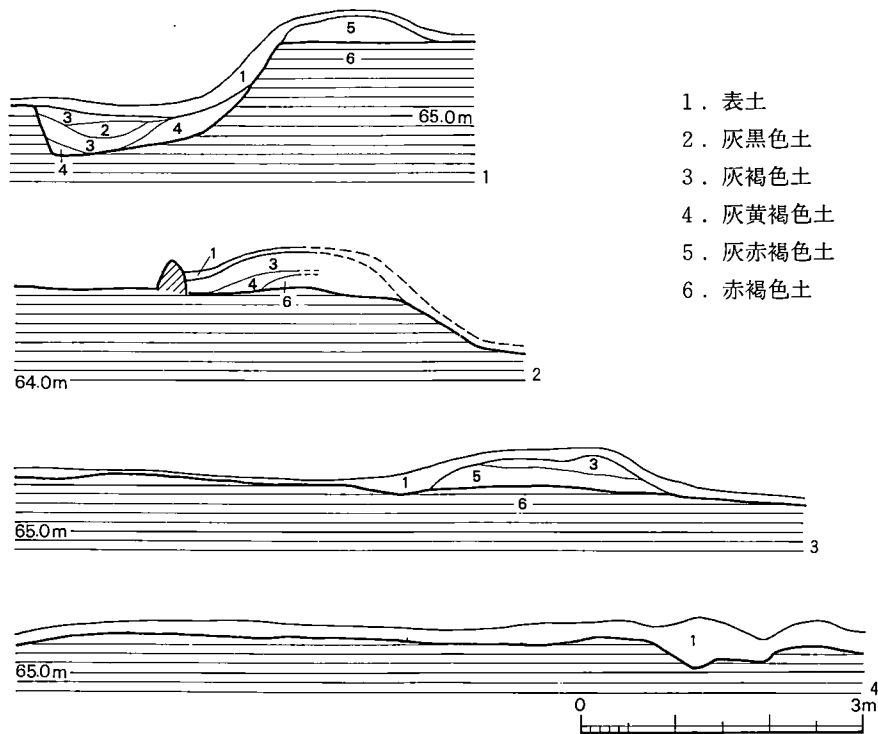
土坑 石段の左側に位置する。調査時には大きな抜根痕があり、その清掃後に検出した。直径0.3m、残存する深さは0.1mに満たないが、中に炭・焼土が詰まっていた。一連の遺構に伴うという確証はないが、無関係と考えられない。

土壘状遺構

それぞれ、1号～5号土壘状遺構と呼称する。うち、3号・4号土壘状遺構はトレンチ調査を行って、盛土・溝状遺構の有無の確認を図ったのみである。

1号土壘状遺構 (第46・48図)

2号土壘状遺構の北端から南東方向に走り、約14mの間にそれと思われる高まりが存在していた。土層の観察では3層にわたる、やはり軟質な盛土が確認できた。ただ、この遺構は他の同様な遺構と方位を若干違えており、かつ地境に添うこと、そして溝状遺構の埋土にのる点などを考慮するならば他と関連する遺構と考えることに躊躇を覚える。



第48図 土塁状遺構土層図 (1/80)

2号土塁状遺構 (図版4、第46・48図)

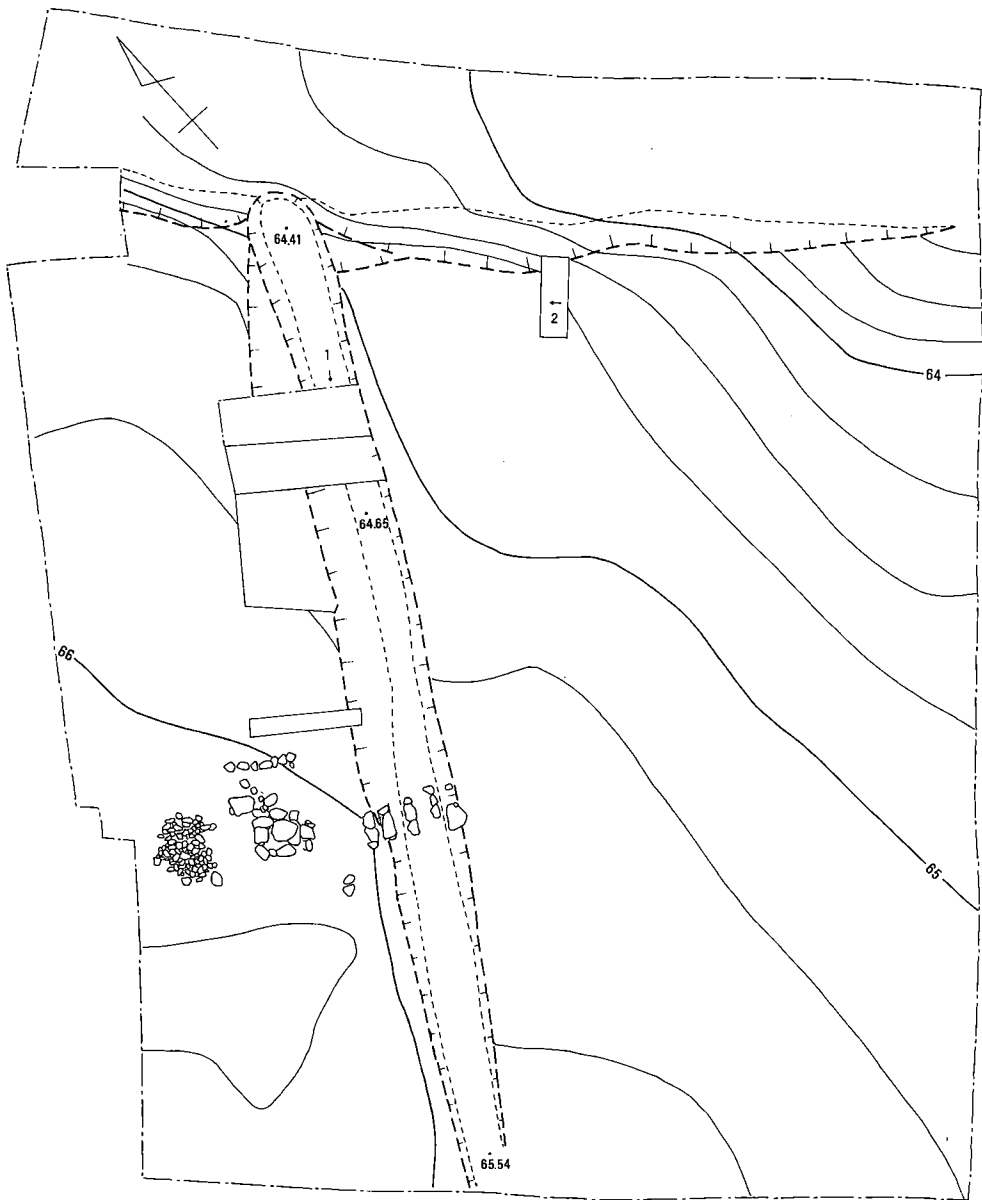
尾根線と平行に走る3基のうち、もっとも東に位置する。この土塁状遺構を境として、現地表は約0.7mの比高をもって東側が低くなっている。

土層を観察した部分では、盛土の規模は基底部幅約1.7m、高さは0.25mを測り、現状で約17mの長さに及んでいる。盛土は地山土を用いているが版築状の作業を行わず、締まりがない。

この北端では地山がすでに大きく削平されており、どこまで延びていたかは定かでない。後述する溝状遺構が途切れる部分で同様に途切れるものであろうか。南端部は上記の石組遺構によって破壊されている。これが2号土塁状遺構に接続していたのか、あるいは溝状遺構がさらに南へ延びることから同様に南へ延びていたものかも不明である。

3号土塁状遺構 (図版1～3、第46・47図)

石組遺構の南西、1m強を隔てた位置にある。基底部幅1.4～1.6m、高さ0.3～0.4mの規模の盛土が約6mの長さで遺存する。これも盛土を構成する土は地山土で、脆弱なものである。この遺構は1・3・4号土塁状遺構とほぼ直交する位置にあるが、また石組遺構の主軸にも平



第49図 溝状遺構実測図 (1/200)

行することから、いずれに伴うものか判然としない。

4号土壘状遺構 (第46・48図)

調査区内ではもっとも長い、約50mを検出している。現状で幅2m前後と見ていたが、発掘の結果では土壘と確認できなかった。土層を観察できた部分では軟質な攪乱層のような状況を呈しており、他のトレンチでも土壘との確証は得ていない。ただ、偶然にしては形状が整っており他の土壘状遺構と平行に走ること、そして現在の地籍図の境界と無関係にあることを重視して、土壘状遺構が存在する可能性を残しておく。

5号土壘状遺構 (図版5、第46・48図)

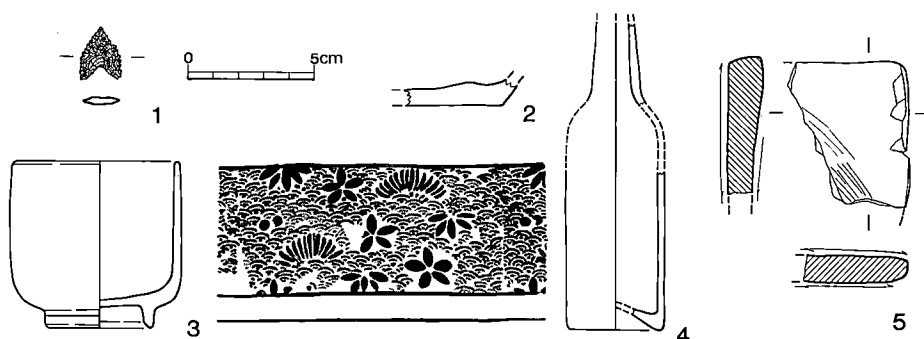
尾根線の端にあり、このあたりから北西へ向かっては急傾斜となって落ちる。現状では幅3m、長さ9mを確認できた。土層観察では、基底部幅2.4m、高さ0.4mの規模となる。よく似た土を2層に積み上げるが、これもさほど締まりがない。

溝状遺構 (図版4・5、第46・48・49図)

現状ではごくわずかなくぼみがあるものの、遺構の存在を思わせるほどではなかった。

2号土壘状遺構の西辺に添い、最大幅3m、土壘頂部から溝底までの比高は約1.5mとなる。全長27mを検出したが、北端は削平を受けているために0.1mの深さで遺存するのみであり、南端でも削平のために浅くなって終わる。

図示した2箇所の土層図をみてわかるように掘り直しが行われている。若干の土師器片が出土している。



第50図 出土遺物実測図 (1/3)

2. 遺物

1号土塁状遺構の盛り土中より石鏃1点、溝状遺構の埋土から数点の土師器、石組遺構周辺から染付磁器・ガラス瓶、そして石組遺構のある平坦地の北東端付近の表土から砥石が出土。

石鏃（第50図1） 乳濁半透明の姫島山黒曜石を使用したもので、完存する。全長2.1cm、幅1.17cmで、厚さ3mmである。刃部を鋸歯状に仕上げる、縄文時代後期の所産と思われるものである。

土師器（同2） 数点が出土したがいずれも小片でかつ摩滅が甚だしく1点のみを図示した。皿の底部の破片で、底径の1/2前後かと思われる。器表の摩滅が進行するが、糸切り痕らしき痕跡が見える。中世に属するものであろう。

染付磁器（同3） 基壇状遺構付近にあったものではほぼ完形品である。整形が雑で、口縁部が波打つ。体部外面に波文・花文をプリントしたものである。全体に黄白色透明釉をかけた上にプリントを行うが、釉調は上方で青味が強く、下方では薄くなるとともにむらがある。高台は削り出したようで、畳み付けは露胎となり、高台内の釉は気泡が弾けた痕跡を多く残す。

供物に使用されたものであろう。

ガラス瓶（同4） 集石遺構中に散乱しており、完形に復しえない。胴部は円筒形をなし、直径7.8cmを測る。底部は極度の上げ底となる。濃い緑色を呈し、内部に微小な気泡を多く含んでいる。気泡は胴部ではほぼ球形に近いが、頸部以上では上下方向に延び、かつ斜めに走るように見える。また、内面に小豆大の気泡のはじけた痕跡を残す残片もある。残存する破片の中には型造りで生じる甲張の痕跡はまったくない。

砥石（同5） 黄白色を呈する砂岩製品。表面に小孔が沢山表れる。二面を使用し、一部に擦痕が見える。

第3節 おわりに

以上のうち、当初近世墓であろうと推測していた石組の諸遺構は調査後に得た地元の年配者の御教示では明治末～大正初期頃に伝染病等で死亡した人々の供養塔で、「タレ（垂）の神」が祀られていたという。本遺跡の属していた旧角田村の「諮問議按綴」には村内に3ヶ所の避病院を設置するという議決が見られ、その一つを大字松江字塚畠に設置するという。その建築時期は明治28～29年となっている。字塚畠は北約700m付近の地点であるが、それ以前に今回調査を行った付近にその前身となる施設が存在していたという口伝がある。その避病院で死亡した人を供養したのがこの「タレの神」であったそうである。出土遺物との不都合はない。

溝状遺構については掘削・埋没時期を確定できる資料が乏しいが、出土した中世の土師器は他にまったく相応しい遺構がないことから見てその一端を示すものであろう。

本遺跡の周辺角田川流域では中世の城塞として以下のものが知られている。

○郷（畑）城（豊前市篠瀬・築上郡椎田町竜城院） 土塁・堀等が残る。記録には「応永中世良田大膳太夫在城後宇都宮氏の抱城となる。」とある。「世良田大膳太夫」は南北朝時代征西将軍懐良親王に従って下向、この城を築いたといい、応永年間までは記録に見える。

○馬場城（豊前市中村馬場） 通称城山と呼ぶ山頂にあり、土塁・空堀等がよく残る。宇都宮一族の仲蜂屋氏の居城と言う。この仲蜂屋氏はかなり記録に登場する。

・応安4（1371）年、九州探題今川了俊に従った大内義弘が鶴の港（現行橋市都留）に上陸した際に迎えたものの中に「蜂屋兵部小輔（照光）」がいた。（『応永戦覧』）

・応永6（1399）年、豊後大友氏の家督争いに乗じて大内義弘が同じく鶴の港に上陸した際にこれを迎えた武士の中にも「蜂屋兵部少輔照光」の名が見える。（同上）

以上の記録では郷城城主「世良田大膳太夫貞義」も同じ行動を取ったと記録される。

・延徳4（1492）年3月豊前国中悪銭禁過書中、上毛郡段銭奉行の1人として「仲八屋藤左衛門殿代」とある。（『大内氏実録』）

・明応6（1497）年、筑前守護大内義興が小式政資を筑前で破った際に「息孫三郎興信」が不慮の事故で死んだが、それを討ち死にと見倣して「忠賞」を与える旨の「仲八屋藤左衛門尉」宛て文書がある。（『角田則行文書』）

・天文3（1534）年、大内義隆から「仲八屋彦次郎」に宛てた書簡にも豊後での対小式戦での働きを「……軍功之次第拔群者也……」と感謝している。（同上）

・弘治2（1556）年、大内氏の内紛を機に大友義鎮は豊前へ進行し、次々と制圧、「仲蜂屋尾張守宗鎮」も松江福岡が江で戦死した。（『豊前志』）

・翌弘治3年、毛利氏と通じた秋月氏等の反大友勢力に「仲蜂屋幡十郎統重」が居り、宇佐

郡に侵入している。(『佐田文書』)

・天正14(1586)年には「中八屋」が人質を出して秀吉方に下った旨の記録がある。(『黒田家譜』)

○鳥越山城(豊前市中村平寿寺) 遺構はまったく残っていないという。一角に弘治2(1556)年、「仲蜂屋尾張守宗鎮」に従って大友軍と戦い討ち死にしたと言われる「則行主計正鎮実」の墓石がある。

○則行城(豊前市大字中村) 角田八幡神社の南西近くに屋敷跡や堀などがあるという。仲蜂屋氏の常住の地であったと言われる。

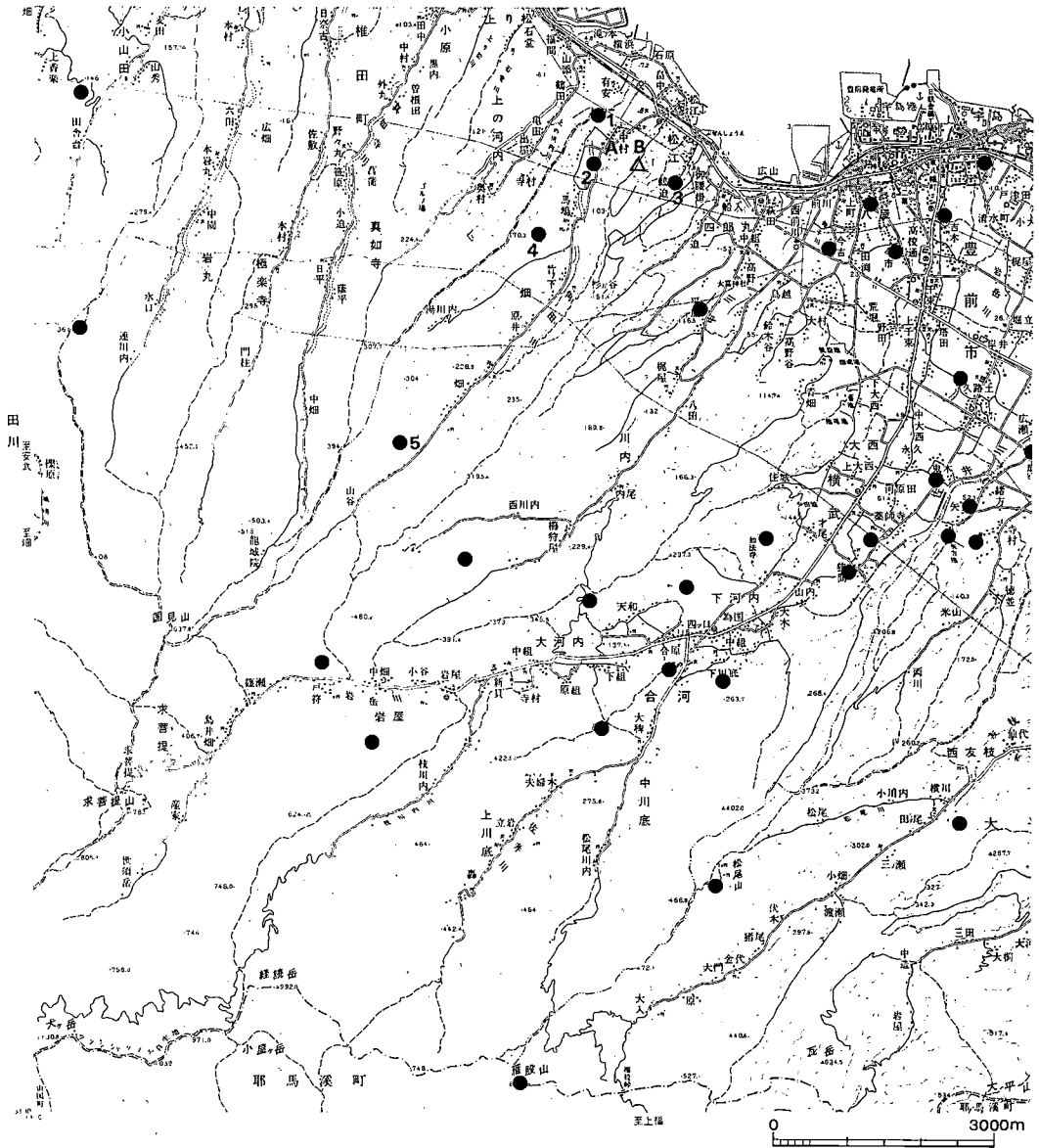
○寒城(豊前市大字松江?) JR日豊線松江駅の南、第51図に示した辺りに地名が残る。記録は残っていないようである。

以上が角田川流域の城塞で、もっともよく記録に残っているのは馬場城であり、占地・規模からみてもこの小谷の中心的な位置を占めていたからであろう。

南北朝時代には両朝と足利直冬の三者が鼎立状態にあり、その後は大内・大友氏の勢力争いの渦中であって、豊前地方は戦乱に明け暮れる長い日々が続いた。

先述した「角田荘」は現在の椎田町上松から豊前市船入付近(旧上毛・築城両郡境)にかけてを指すと言ひ、地勢的にも生産力からみてもその中心は角田八幡神社の位置する付近であり、馬場城はこの地を統治するのにもっとも適した位置にある。そして鳥越山城はこの谷の北側西口を守備する位置にあり、寒城と本遺跡は東を守る位置となり戦術的には城塞を築くのに適した地点を占めると言える。溝状遺構や土塁状遺構のほかに建物等をまったく検出していないために確証を欠くが、本遺跡が上述したような地点にあることから中世の一時期に馬場城を守る砦のようなものを構築した痕跡であろうと推測しておく。

視界の利く日には遠く北九州市門司区にいたる豊前の海岸線が、そして海の向こう、山口県の工業地帯の大型建物や煙突までが肉眼で見通せる好位置にあることを加えて置く。



- A. 角田八幡社 B. 松江炭山遺跡
 1. 鳥越山城 2. 則行城 3. 寒城
 4. 馬場城 5. 畑城

第51図 周辺城跡配置図 (1/100,000)

圖 版



1) 石組遺構現況全景 (南東から)



2) 石組遺構現況全景 (北東から)



1) 石組遺構現況全景 (南東から)



2) 石組遺構清掃後全景 (南東から)



1) 石組遺構基壇状部分 (南東から)



2) 石組遺構調査後全景 (南東から)



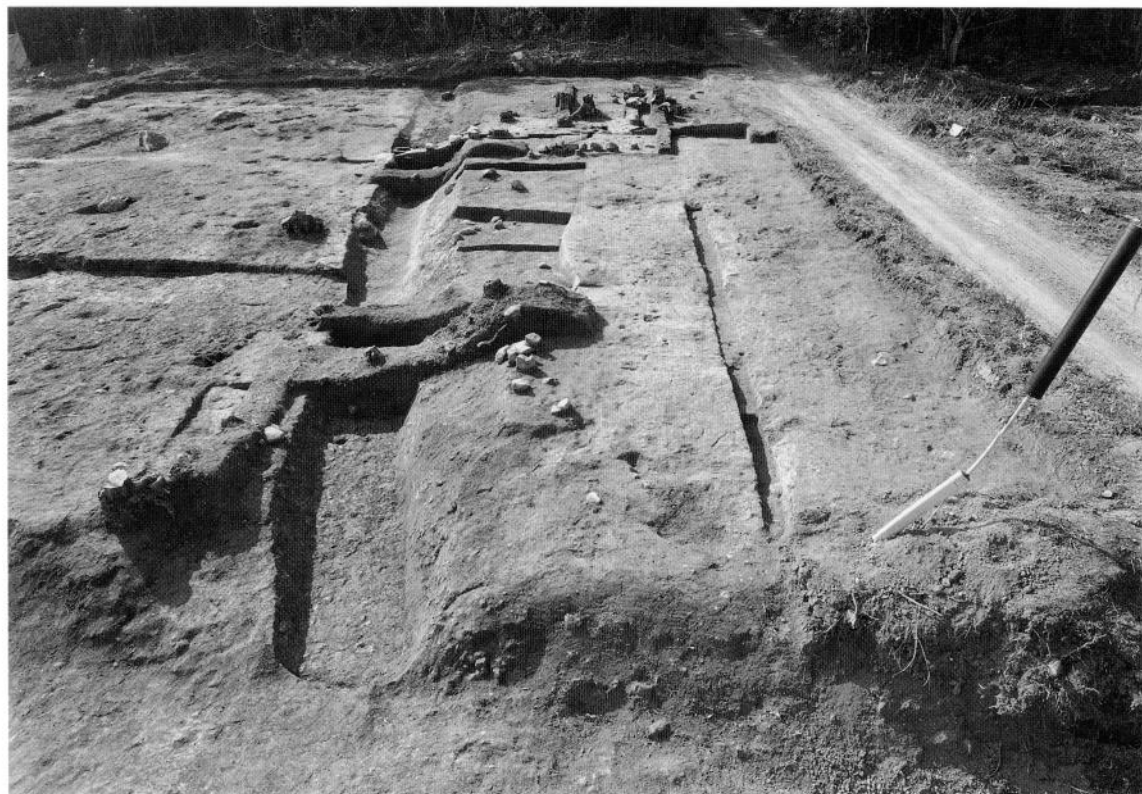
1) 溝状遺構土層 (北東から)



2) 2号土壘状遺構と溝状遺構 (東から)



1) 5号土塁状遺構 (西から)



2) 溝状遺構 (南東から)

報告書抄録

ふりがな	だんごいせき・にしいちょうだいせき・すみやまいせき							
書名	団後遺跡・西一丁田遺跡・炭山遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一般国道10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	副島邦弘・飛野博文・緒方泉							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL092-651-1111							
発行年月日	西暦1994年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃	東経 〃 〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
団後遺跡	豊前市大字中村	40214	150001	33°35'	131°05'	1988年4～6	5,000m ²	道路建設
			付近	40"		1989年4～5	2,700m ²	
				付近	付近		(7,700m ²)	
炭山遺跡	◇ 松江	40214				1988年12月	1,000m ²	◇
西一丁田遺跡	椎田町上の河内	40641				1988年10月	500m ²	◇
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
団後遺跡	集落	縄文時代 ～ 歴史時代 (中世)	竪穴住居跡9、土壙 8、掘立柱建物5、 溝、他		打製石斧・石鏃・土 錘・土玉・須恵器・ 土師器・瓦器・貿易 陶磁器		たたら跡1	
西一丁田遺跡	散布地		石組遺構、柱穴、溝、 土壙		須恵器・土師器・打 製石鏃			
炭山遺跡	散布地		石組遺構、土壘状遺 構、溝、		土師器・染付磁器・ 石鏃・砥石			

一般国道 10 号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第 3 集

団後遺跡
西一町田遺跡
炭山遺跡

1994年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 瞬報社写真印刷(株)
福岡市中央区天神5丁目4番16号
城戸ビル3F 電話(092)712-2241

福岡行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 5	登録番号 7

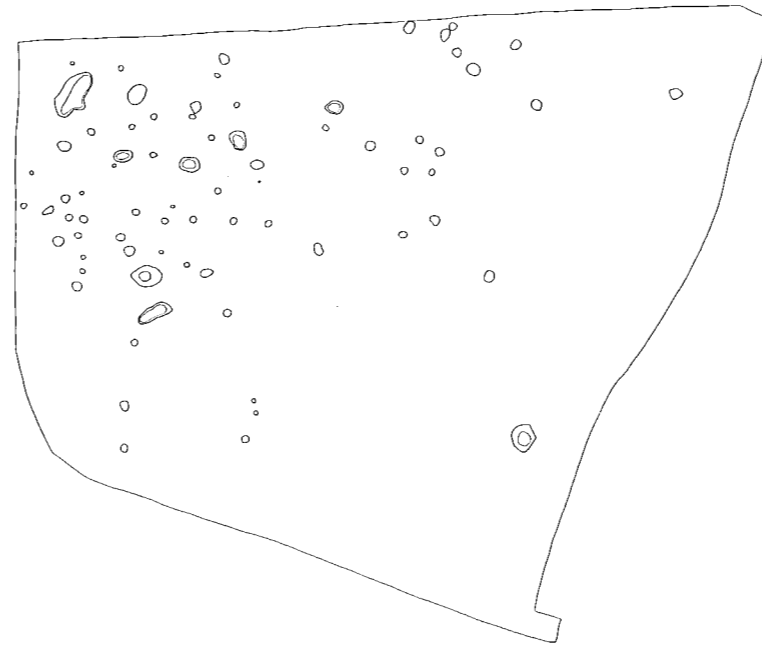
団後遺跡
西一町田遺跡
炭山遺跡

付 図

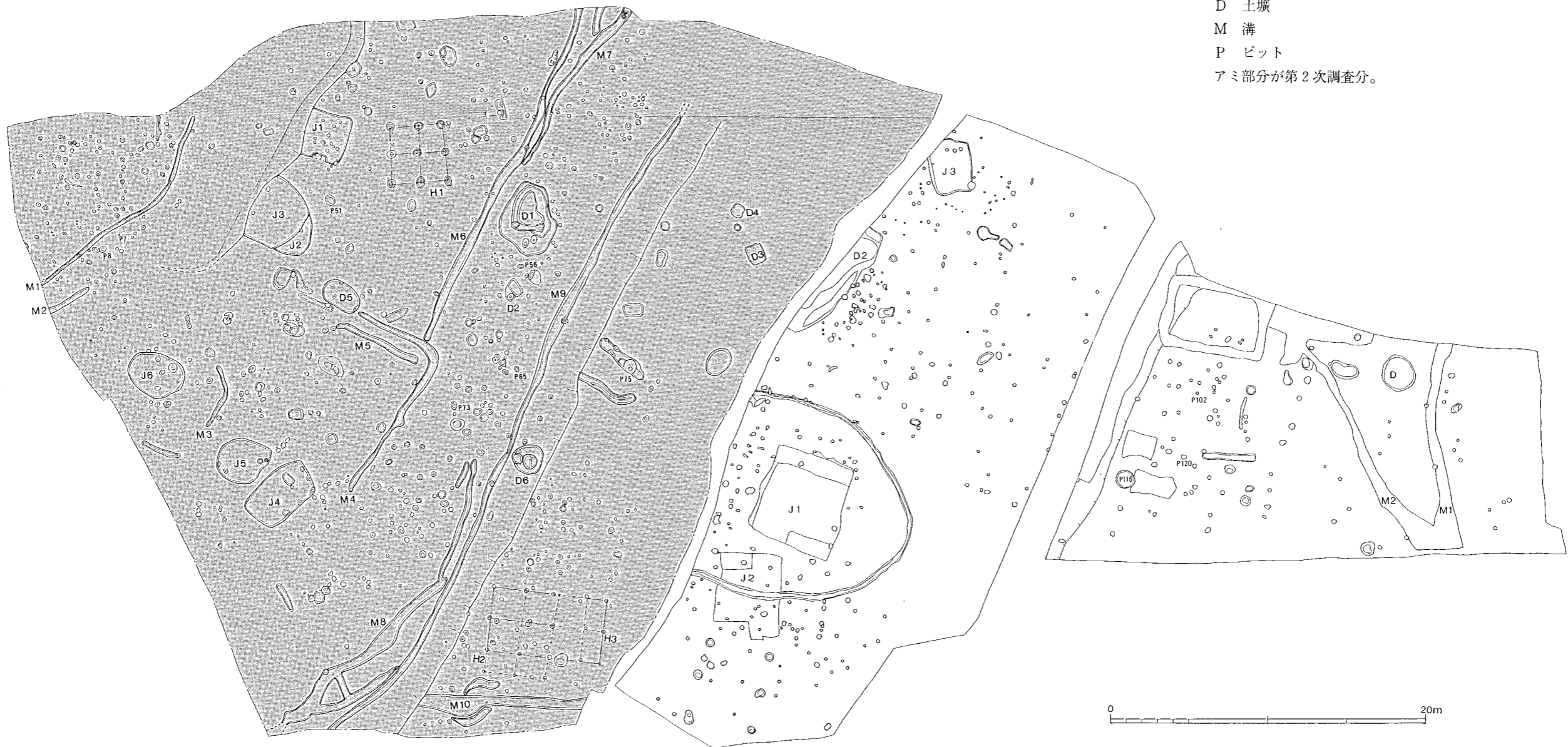
- 付図1 団後遺跡（第1次、第2次）周辺地形図（1/3,000）
付図2 団後遺跡全体遺構配置図（1/300）



付図1 団後遺跡（第1次、第2次）周辺地形図（1/3,000）



- 凡例：J 竪穴住居
 H 掘立柱建物
 D 土壇
 M 溝
 P ピット
 アミ部分が第2次調査分。



付図2 団後遺跡全体遺構配置図 (1/300)